

宗像市

小中一貫コミュニティ・スクールの取組

ー小中一貫コミュニティ・スクールと

地域学校協働活動の一体的推進ー

(実践事例集)

令和5年3月

大学との共同研究によるまちの未来創造プロジェクト

「小中一貫コミュニティ・スクールの推進に関する研究プロジェクト」



## は じ め に



国(文科省)は、全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現を目指す「令和の日本型学校教育」の構築に向けた今後の方向性の一つとして、「学校だけではなく地域住民等と連携・協働し、学校と地域が相互にパートナーとして、一体となって子どもたちの成長を支えていくことが必要である。その際、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）と地域学校協働活動を一体的に実施することが重要である。」としています。

令和4年度での実施・導入状況については、全ての公立学校のうち、コミュニティ・スクールの導入校は15221校(42.9%)となり、前年度調査から3365校(9.6P)増加。特に、小学校・中学校・義務教育学校の導入校は、13519校(48.6%)と約半数の学校で導入しています。地域学校協働本部を整備している学校は、20568校(57.9%)となり、前年度調査から1097校(3.2P)増加しています。公立学校のうち、コミュニティ・スクールと地域学校協働本部をともに整備している学校は、11180校(31.5%)となり、前年度調査から2652校(7.5P)増加しています。また、全国の地域学校協働活動推進員等の人数は、32954人となり、前年度調査から1942人増加しています。文科省においては、地域と学校が連携・協働し、子どもたちの健やかな成長を地域で支える体制が全ての学校で構築されるよう、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的な取組に対する様々な支援を通じて、全ての公立学校でのコミュニティ・スクールの導入を加速し、その質の向上に向けた取組を充実するとしています。

宗像市については、令和2年度から日の里学園と中央学園の2学園がコミュニティ・スクールのモデル校となり、学園コミュニティ・スクールを立ち上げ、三者による共育活動の推進を進めてきました。そして本年度（令和4年度）、全ての学園が学園コミュニティ・スクールの立ち上げました。

本受託研究では、昨年度から小中一貫コミュニティ・スクールの導入期に関する研究を進め、学園コミュニティ・スクールと地域学校協働活動を一体的に推進するための支援の在り方についてガイドブック（手引書）としてまとめました。本年度は、宗像市全ての学校の小中一貫コミュニティ・スクールの取組を実践事例集としてまとめることができました。このガイドブック・実践事例集が、これからの宗像市の各学園の社会総がかりの教育～コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進の更なる発展に活用して頂ければ幸いです。

令和5年3月31日

福岡教育大学教職大学院 副学長 森 保之

（大学との共同研究によるまちの未来創造プロジェクト

「小中一貫コミュニティ・スクールの推進に関する研究プロジェクト長」）

## あいさつ



小中一貫コミュニティ・スクールの導入期に関する研究報告書「宗像市小中一貫コミュニティ・スクールの取組－小中一貫コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進－（実践事例集）」の発行にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

まずは、小中一貫コミュニティ・スクールの具現化に向けた実践及び本研究報告書の作成にあたり、ご理解とご尽力をいただきました教職員及び関係者の皆様に心から敬意を表しますとともに厚く御礼を申し上げます。

さて、本市では、平成18年度から26年度までの9年間を第Ⅰ期小中一貫教育導入期として、すべての市立学校で児童生徒の課題を明らかにし、その解決に向けて多様な小中一貫教育の取組を行ってきました。また、平成27年度以降の第Ⅱ期小中一貫教育推進期では、ふるさと宗像を意識した社会の担い手の育成を目指して、「ふるさと学習」の実施や学校・家庭・地域の連携による小中一貫教育の充実を進めてきました。今後はこれまでの小中一貫教育の成果をさらに高めるべく、宗像市学校教育基本計画の基本的な考え方のテーマである「一人一人に『志をもち、自分の将来や社会の未来を創造する力』を育む」ことを目指して、学校、地域、家庭が一体となった小中一貫教育をさらに充実させるための取組を進めてまいります。その方途の一つが、小中一貫コミュニティ・スクールです。本市では、令和4年度から全ての学園に学園運営協議会を設置しました。学園の教職員や多くの保護者、地域住民が当事者意識をもって子どもの教育に関わり、社会の担い手や未来の創り手となる子どもを育てていくことを目指しています。今後は、これまで本市が築いてきた小中一貫教育を更に充実、発展させ、小中一貫教育を基盤とした小中一貫コミュニティ・スクールとして推進していきます。

最後になりましたが、本研究報告書の作成にあたり、お力添えいただきました福岡教育大学副学長 森 保之先生並びに「大学との共同研究によるまちの未来創造プロジェクト」の関係者の皆様に心より感謝申し上げますとともに、今後のご活躍を祈念し、あいさつといたします。

令和5年3月31日

宗像市教育委員会 教育長 高宮 史郎

# 目 次

○はじめに	1
福岡教育大学 副学長 森 保之	
○あいさつ	2
宗像市教育委員会 教育長 高宮 史郎	
1. 宗像市が目指す小中一貫教育コミュニティ・スクール	4
2. 小中一貫コミュニティ・スクールの進め方	9
▶ステップ1 地域のニーズ調査と学園の方向性の確立	
▶ステップ2 目標の共有化	
▶ステップ3 目標を達成するカリキュラム・デザイン	
▶ステップ4 組織体制・実働組織づくり	
▶ステップ5 実働組織を中心とした実践	
▶ステップ6 実働組織の見直し・次年度の活動計画	
3. 小中一貫コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進	23
4. 地域学校協働活動推進員の役割とCSを推進する活動	29
5. 導入期における各学園の実践	
▶日の里学園の実践	42
▶城山学園の実践	52
▶中央学園の実践	61
▶玄海学園の実践	68
▶学びの丘学園の実践	76
▶大島学園の実践	82
▶かとう学園の実践	92

# 第 1 章

**「宗像市を目指す**

**小中一貫コミュニティ・スクール」**

# 1. 小中一貫コミュニティ・スクールの全校導入

令和3年3月に策定した宗像市学校教育基本計画後期計画において、宗像市の学校教育における目標を「一人一人に、志を持ち、自分の将来と社会の未来を創造する力を育む」としました。

これからの社会では、学校や学校での学びがそれだけで完結するのではなく、子どもが地域の方々を始めとする様々な人と関わりながら、必要な力を育んでいくことが求められています。そのために、宗像市では小中一貫教育とコミュニティ・スクールを一体的に推進する「小中一貫コミュニティ・スクール」を基盤として、様々な教育活動を行うこととしました。

これまで進めてきた小中一貫教育においては、取組をより充実させるため、必要なことや効果的なもの等を見直しました。併せて、令和4年度から市立学校全校でコミュニティ・スクールを導入し、地域や家庭との連携・協働をより、社会総がかりの教育を目指していきます。すでに中央学園と日の里学園では、令和元年度からモデル事業として学校運営協議会を設置し、「小中一貫コミュニティ・スクール」を始めています。



## 2. なぜ、コミュニティ・スクールを導入するのか

急激な社会の変化に伴い、学校と地域・家庭を取り巻く課題は、より複雑化、多様化しています。そのような中、学校と地域がそれぞれ抱える課題を解決していく一つの手立てとして、国は、学校と地域住民等が力を合わせて学校運営に取り組む「コミュニティ・スクール」と学校と地域が相互にパートナーとして行う「地域学校協働活動」の一体的な推進を目指しています。これからの学校は、変化の激しい社会の動向にしっかりと目を向け、教育課程を工夫し、教育活動を展開することが求められています。保護者や地域住民とお互いの情報や課題を共有し、日々の教育活動を進めていく必要があります。

宗像市においては、これまで学校運営評議委員会を設置して、学園が地域や家庭の意向を反映し、その協力を得ながら教育活動を推進してきました。今後は、学園の教職員や多くの地域住民、保護者が当事者意識をもって地域の子どもの教育に関わり、社会の担い手、未来の創り手となる子どもを育てていくことを目指して、宗像市では、令和4年度にすべての市立学校・義務教育学校にコミュニティ・スクール（CS）を導入します。

宗像市教育大綱（平成27年3月策定）には、基本理念である「一人一人が輝く教育のまち むなかた」を目指して、「家庭と地域、学校の学びを大切にし、相互の関わりを深める」と示されています。

コミュニティ・スクールを導入することにより、今後、地域の多くの人が学校づくりに参画し、地域と一体となり、地域とともにある学校づくりが進むものと考えます。

宗像市では、平成18年度より取り組んできた小中一貫教育を踏まえ、「小中一貫コミュニティ・スクール」として、学園・家庭・地域が一体となって取組のさらなる充実を目指します。

### 小中一貫教育のさらなる充実

同じ中学校区にある小中学校を一つの学園とし、義務教育9年間の目標の設定と一貫したカリキュラムに基づき、小中一貫教育を進めてきました。今後はこれまでの成果と課題を踏まえ、学園一体となった取組を推進し、小中一貫教育をさらに充実させていきます。

### コミュニティ・スクール（CS）の導入

これまでは学校運営評議委員会を設置し、学園が、地域や家庭の理解や協力を得ながら教育活動を推進してきました。今後は、CSを導入し、地域の子どもを育てていくために、学園だけでなく、地域や保護者と協働し、総がかりで子どもの学びを支えていきます。

「小中一貫コミュニティ・スクール」へ移行

### 3. 宗像市が目指す小中一貫コミュニティ・スクール

小中一貫教育を推進する学園と学園の校区を基盤とする地域及び学園の児童生徒が生活する家庭が、学園の運営方針やめざす子ども像を共有し、目標達成に向けてそれぞれが役割を考え、果たすことで、健やかな子どもの成長を促すことができます。義務教育9ヶ年を通して、学校の子どもから、地域の子ども・社会全体の子どもへ、そして、学園・家庭・地域総がかりで地域の担い手・未来の担い手である子どもを育てていくことを目指しています。

また、小中一貫コミュニティ・スクールで学園・家庭・地域がお互いの目標・課題等の協議・共有することにより、それぞれの連携・協働した活動（地域学校協働活動）がより充実したり、新たな取組につながったりすることも期待しています。

#### 宗像市が目指す小中一貫コミュニティ・スクールとは

これからの学校は、変化の激しい社会の動向にしっかりと目を向け、教育課程を工夫し、教育活動を展開することが求められています。保護者や地域住民とお互いの情報や課題を共有し、日々の教育活動を進めていく必要があります。

宗像市においては、これまで学校運営評議委員会を設置して、学園が地域や家庭の意向を反映し、その協力を得ながら教育活動を推進してきました。今後は、学園の教職員や多くの地域住民、保護者が当事者意識をもって地域の子どもの教育に関わり、社会の担い手、未来の創り手となる子どもを育てていくことを目指してコミュニティ・スクールを導入し、これまでの小中一貫教育を基盤とした小中一貫コミュニティ・スクールの推進していきます。

#### 小中一貫教育

同じ中学校区にある小中学校を1つの学園とし、義務教育9年間の共通目標の設定と一貫したカリキュラムに基づく教育。宗像市には7つの学園があり、学校や地域の特長を生かした小中一貫教育を進めてきました。これまでの小中一貫教育の成果と課題を踏まえ、9年間の一貫したカリキュラムの充実に加えて、特別支援教育や生徒指導、不登校対応など学園一体となった取組をさらに進めます。

#### コミュニティ・スクール

保護者や地域みなさんで構成する「学校運営協議会」を設置した学校のこと。宗像市では学園（中学校区）ごとに設置するため“〇〇学園運営協議会”と呼んでいます。「学校運営協議会」の場では、学校の方針について校長から説明を受け、学校運営や課題について協議したり、学園やお互いの目標・ビジョンを共有したりします。学校・家庭・地域が力を合わせて学校の運営に取り組み、一体となって子どもを育てていく仕組みです。

※宗像市では、各中学校区内の小学校及び中学校を1つの「学園」とし、小中一貫教育を進めています。

※以降、宗像市における学校運営協議会を「学園運営協議会」と記載します。

※学園：各中学校区のこと。また、その中学校区内の小学校及び中学校のこと。

## 4. 小中一貫コミュニティ・スクールで、大切にしたいこと

導入期において、小中一貫コミュニティ・スクールで大切にしたいことは、以下の4つです。

- 学園や地域の実情に合った小中一貫コミュニティ・スクールの推進
- 学校・家庭・地域の方々一人一人の当事者意識の高揚
- 学園と家庭・地域の共有目標の共有化と役割・分担と連携・協働活動の重視
- 9ヶ年によるカリキュラム（小中一貫教育を軸とした教育活動）の共有及び学園の運営

### ○ 学園や地域の実情に合った小中一貫コミュニティ・スクールの推進

コミュニティ・スクールは、保護者や地域が学校の様々な課題解決に参画し、それぞれの立場で主体的に子どもたちの成長を支えていく仕組みです。教育委員会や学校が家庭や地域の役割や活動を指定するなど、全校・全地域一律の取組を行っていくものではありません。子どもが抱える課題を地域と共に解決する仕組みを構築し、質の高い学校教育を目指します。

### ○ 学校・家庭・地域の方々一人一人の当事者意識の高揚

宗像市教育委員会として学校教育で子どもに育みたい力は、「志を持ち、自分の将来や社会の未来を創造する力」です。これを前提として、学園や地域の状況を踏まえた学園ごとの三者の「共有目標（目指す子ども像）」を設定します。

### ○ 学園と家庭・地域の共有目標の共有化と役割・分担と連携・協働活動の重視

学校・家庭・地域が「どんな活動をするか」からスタートするのではなく、「どんな子どもを育てたいか」を協議し、共通認識を持つことが重要です。目指す子どもの姿に向かって、学園運営の充実に向けて取り組むとともに、学園・家庭・地域が学園運営協議会で協議した内容を持ち帰り、それぞれの役割・できることは何かを考えていくことが必要です。そこから、学園・家庭・地域それぞれの取組や連携・協働した活動につながります。

### ○ 9ヶ年によるカリキュラム（小中一貫教育を軸とした教育活動）の共有及び学園の運営

9年間を軸としたコアカリキュラムを学校・家庭・地域で共有し、取り組みを進めて行くことが大事です。宗像市では、生活科・総合的な学習の時間を中核としたカリキュラム（地域のひと・もの・ことを生かした単元）づくりの構築を行うことで、コミュニティ・スクール推進への参画意識の向上につなげていきたいと考えています。（R5年度より推進）

# 第 2 章

「小中一貫コミュニティ・スクール  
の進め方」

# Ⅰ 導入期の「6つのステップ」について

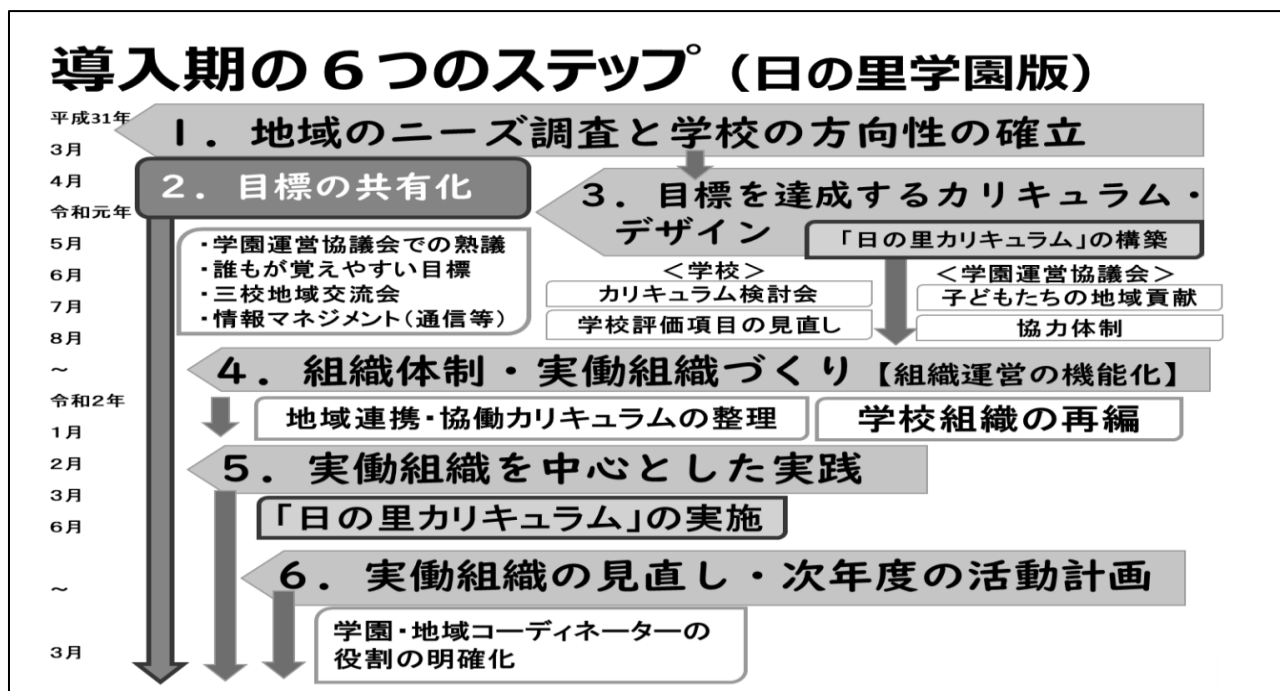
学園小中一貫コミュニティ・スクールの立ち上げには、以下の「6つのステップ」が必要です。およそ2～3年の年月をかけて「6つのステップ」を実施していくことになりますが、ステップごとの期間や全体の年数は、学校や地域の実態により異なります。

例えば、ステップ1「地域のニーズ調査と学校の方向性の確立」は、学校・家庭・地域の共通目標（以下、共通目標）を作る段階ですが、学園の経営構想をもとに共通目標がすぐに決まることもあれば、保護者や地域住民にアンケートを実施するなどして、1年以上かける場合もあります。その理由は、学校・家庭・地域の共通目標（目指す子どもの姿）が不明確では、その後の実働がスムーズにいかず、形骸化してしまう可能性があるからです。そのため、共通目標を「こんな子供を育てたい」という、より具体的にイメージできるものにしながら、三者の合意を得て設定することが大事になります。

各段階		内容
ステップ1	地域のニーズ調査と学校の方向性の確立	地域の実態調査を踏まえ、三者の共通目標を設定する
ステップ2	目標の共有化	三者の共通目標を多くの人に共有するための取組（この過程は、導入期から意図的・継続的に）
ステップ3	目標を達成するカリキュラム・デザイン	社会に開かれた教育課程を目指す「ふるさと学習」の構築
ステップ4	組織体制・実働組織づくり	コミュニティ・スクール推進のための実働組織の構築や、校内組織の見直し
ステップ5	実働組織を中心とした実践	社会に開かれた教育課程を目指す「ふるさと学習」の実施
ステップ6	実働組織の見直し・次年度の活動計画	実働組織の再編や次年度の計画を立てる

## 資料1 導入期の「6つのステップ」

それでは、ステップ1～6を具体的などのように進めていけばいいのか、日の里学園の実践を例にして紹介します。平成31年4月～令和3年3月の2年間の取組です。



資料2 日の里学園版 導入期の「6つのステップ」

## 2 各ステップの具体について

### ステップ1 地域のニーズ調査と学校の方向性の確立

#### （1）地域のニーズ調査

学校と地域の協働を進めていくためには、お互いのことを知ることが大切です。地域のニーズ調査での視点は以下の通りです。

#### ニーズ調査の視点

- ①子どもに関わる地域行事や取組はどのようなものがあるのか
- ②コミセンの組織はどのようなになっているのか
- ③地域の自然環境や歴史などの特長は何か
- ④地域の抱える課題は何か



日の里地区では、子どもや高齢者の日常的な見守りなど、熱心な取組が多数行われていることが分かりました。また、50年前に、当時としては西日本最大規模の団地が建てられ、短期間に多くの人に移り住んできた地域であるために、宗像市の中でも高齢化率が非常に高く（平成31年現在 35.2%）、世帯構成員の平均も二人を下回る地区があり、一人暮らしの老人・高齢者夫婦世帯が多い地区であることも分かりました。また、毎年夏に行われている「日の里まつり」も、まつりの規模を縮小せざるを得ない状況に

あるなどの課題があること、さらに、「CoCokara 日の里」館長のお話から、団地の老朽化や活気がない大通りや商店街を何とかしようと、行政・企業・地域団体による様々な取組が行われていることも分かりました。

## （２）学園のカリキュラム調査

(1)の「地域のニーズ調査」と同時進行で、全ての教育活動において、学校と地域が連携・協働した活動が各学年にどれくらいあるのか洗い出します。さらに、生活科、総合的な学習の時間において、地域と連携・協働した単元が各学年にどれくらいあるのかを調査します。各学校の調査を持ち寄り、一覧表にしてみることで、以下の視点での比較検討がしやすくなります。

### カリキュラム調査の視点

- ①どの単元にどんな人が関わっているのか
- ②小学校同士の横のつながりはあるのか
- ③小学校と中学校の縦のつながりはあるのか
- ④地域のニーズ調査をもとに、よりよい改善案はないか

日の里学園では、二つの小学校のカリキュラムは十分共有されておらず、ゲスト・ティーチャ(以下 GT)や協力団体もバラバラであること、中学校では地域と協働した単元がそもそも少ないことなどの課題が明らかになりました。

## （３）学校の方向性の確立 -学校・家庭・地域の共通目標の設定-

共通目標を「こんな子供を育てたい」という、より具体的にイメージできるものしながら、三者の合意を得て設定する段階です。その後の実働をスムーズに行うためにも、とても重要なところと言えます。

日の里学園では、平成 30 年 3 月に行われた「日の里学園コミュニティ・スクール準備委員会」において、日の里学園の子どもたちをどう育てていくかについて熟議を行いました。その際、家庭、地域の代表の方から「大人の言ったことを素直に聞く、優しい子が多いが、自分で考えて行動することができていない」「積極性が育つよう、家庭でも地域でも自分たちで考える場を与えたい」という意見がありました。学校の「思考力・判断力・表現力」をつけさせたいという願いと同じであることが分かりました。それを受けて、日の里学園の学校・家庭・地域の共通目標は、「自分で考え、自分で行動する

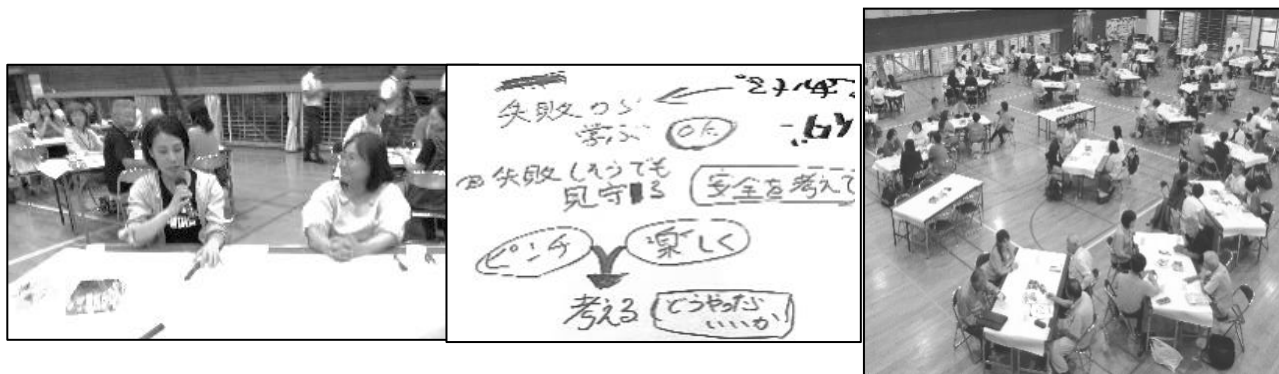
子どもの育成」と設定されました。この共通目標は、学校の教員だけの目標ではなく、保護者や地域住民も意識する目標になります。そのため、教育用語を使用せず、だれもが覚えやすいように考えられました。そして、第1回学園運営協議会(令和元年6月10日)で承認されました。

## ステップ2 目標の共有化

ステップ2「目標の共有化」は、他の全ての段階でも意識して行う重要なステップです。ステップ1において「だれもが覚えやすい目標」にしたことも、この「目標の共有化」のための一つの「仕掛け」と言えます。保護者や地域住民などの多くの人に、コミュニティ・スクールの意義や目的を伝え、その良さを実感してもらえるように、全ての段階において意図的に「仕掛け」をしていく必要があります。ここでは、その一部を紹介し、各ステップのページにおいてその取組を紹介していきます。

### (1) 三校地域交流会

PTA主催で行われている「三校地域交流会」では、三校の教員、保護者、地域が参加し意見交換を行っています。本年度のテーマを共通目標である「自分で考え、自分で行動する子どもを育てるために」と設定してもらい、ワールドカフェ方式で交流を深めました(参加者135名)(資料3)。その中で、「自分で考える子どもを育てるためには、大人が子どもの失敗を見守ろう」という意見が多く出されました。共通目標を多くの人に周知するとともに、当事者としての意識作りのきっかけになりました。



資料3 三校地域交流会の様子(令和元年7月2日)

## （２）コミュニティ・スクール掲示板（校内・コミセン）

ステップ１で調査した地域の実態を教員に周知するために、コミセンの組織図を作成・掲示したり、地域行事コーナーを作成したりして、教員や児童の地域行事への関心を高めることができるようにしました（資料４）。また、コミセンにもCS掲示板を作成してもらい、学校の情報を掲示するようにしました。



九州初開催の「ご近所みちあそび2019」に参加した子どもの感想を掲示。

＜ポイント＞

◆付箋紙を使って自由に書いてもらう、参加型の掲示板。付箋紙を書きながら、友だち同士で感想を交流することで、次回の地域行事への参加意欲を高める。

資料４ 地域の情報を共有するための掲示板

## ステップ３ 目標を達成するカリキュラム・デザイン

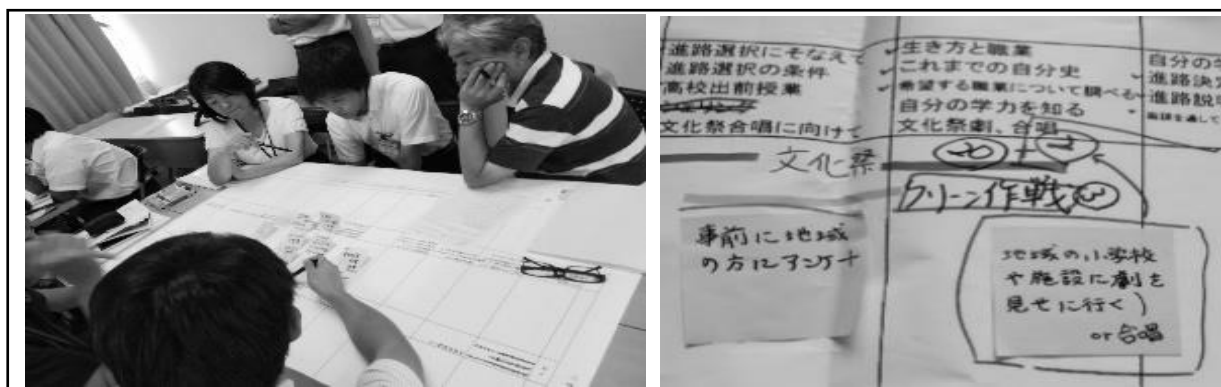
施設分離型の小中一貫校において、カリキュラムこそが教員間をつなげる重要な役割を果たすとともに、教員のコミュニティ・スクールに対する意識の変容も期待できます。このステップでは、ステップ１での地域とカリキュラムの調査をもとに、学園と地域をつなぎ、共通目標達成と地域づくりのコアとなるカリキュラムをデザインしていく段階です。

### （１）教員の三校合同研修会における生活科、総合的な学習の時間の見直し

日の里学園では、生活科、総合的な学習の時間の内容のうち、日の里地区の教育資源（ひと・もの・こと）を活かした単元をコアカリキュラム（以下「日の里カリキュラム」）と位置づけ、それを中心に見直しを行いました。小中一貫教育のさらなる充実を図ると同時に、地域の「ひと・もの・こと」を活かした「日の里カリキュラム」の構築を行うことで、教員の地域理解の促進とコミュニティ・スクール推進への参画意識を向上させることを目的としています。

まず、日の里学園の共通目標「自分で考え、自分で行動する子どもの育成」が設定された経緯を説明し、共通目標の共有化を図りました。

次に、ステップ1の調査で分かった、地域の実態や学校のカリキュラムの課題についてプレゼンを作成し、教員に提示しました。そして、学年部（西東小合同）に分かれて、小中の「日の里カリキュラム」について意見交換を行いました。9年間の生活科・総合的な学習の時間のカリキュラム一覧表と各学年の地域の「ひと・もの・こと」を活かした計画案を模造紙に貼り、出された意見を自由に書き込んでもらえるようにしました（資料5）。



**資料5 生活科・総合的な学習の時間の見直しの様子**

**（令和元年7月30日）**

中学校では、「日の里カリキュラム」に意欲的な姿勢が見られました。中学校教員から「地域の現状を知る機会がないので、それを学ぶ研修があってもいいのでは」という提案があり、学校と地域の双方向の意見交換の必要性が出されたことは大きな成果だと感じました。小学校では、各校で取り組んでいる内容を交流し、地域の課題や目標を考慮して話し合う姿が見られました。特に「高齢化問題」「日の里まつり」を題材とした二单元について、学年部の枠を超えて議論を行い、9年間の系統を意識している姿が見られました。

## **（2）カリキュラムの一部遂行と振り返り**

5年担任は、これまで、6年（1学期）の单元だった「日の里まつり」に関する内容を、5年（12月）に繰り下げ、6年1学期まで継続して実施することにしました。これまでのように、短期間でできることをするのではなく、長期計画のもと、地域の活性化のために試行錯誤しながら課題解決に取り組むことで、「自分で考え、自分で行動する子ども」の育成が図れると考えたからです。

教師のこの発想がコミセン会長の「地域を活性化させたい」「日の里まつりのアイデ

ィアが欲しい」という願いと結びつき、地域主催の「日の里まつりプロジェクト」が立ち上がることになりました(資料6)。そして、「子ども実行委員」の募集があり、5年児童(各校6名)が参加し、各学級で話し合ったアイデアを地域の会議で提案しました。



資料6 「日の里まつりプロジェクト」子ども実行委員の任命式の様子

このように、一部実施した単元については、その成果と課題を整理し、振り返りを行いました。

また、今後、地域と一緒に取り組んでいきたい内容(要望)などを書き出してもらい、それらを、学園運営協議会(令和2年1月10日)において協議することを教員へ伝えることで、学園運営協議会に参加しない教員の参画意識を高めていきました。

### (3) 第4回学園運営協議会における「日の里カリキュラム」についての熟議

まず、「目指す地域像」について、地域代表が述べた内容を以下に示します。



- 日の里まつりなどで子どもたちの考え(アイデア)が活かされる元気なまちにしたい。そして、就職してどこか違うところに住んでも、日の里がふるさとだと思えるまちにしたい。
- 子どもは地域の宝。だから、地域のみんなで子どもを育てるまちにしたい。そのためには、つながりが大事。大人も子どもも、生き生きと活躍できるまちにしたい。

それを受けて、主幹教諭が各学年の学習内容を簡単に伝え、内容や方法についての意見交換を行いました(資料7)。

日の里の歴史を学ぶ学習(3年)では、5年前に地域で行われた「宝探し in 日の里」の情報が出されました。「ウォークラリー形式で実際に地域を歩くことで、子どもたちの仲間意識も育った」という意見とともに、「安全のための見守りは地域がしよう」という提案もありました。また、「日の里まつり」に関する単元は、まちの「活性化」のための重要単元であるとして、4年生から取り組んでいくことが確認されました。さらに、「高齢者福祉・防災」は、高齢者学習の一環で民生委員体験を行うことで、



資料7 第4回学園運営協議会での熟議の様子(令和2年1月10日)

災害時に高齢者宅へ声かけに行ったり、一緒に避難したりすることができる子どもを育

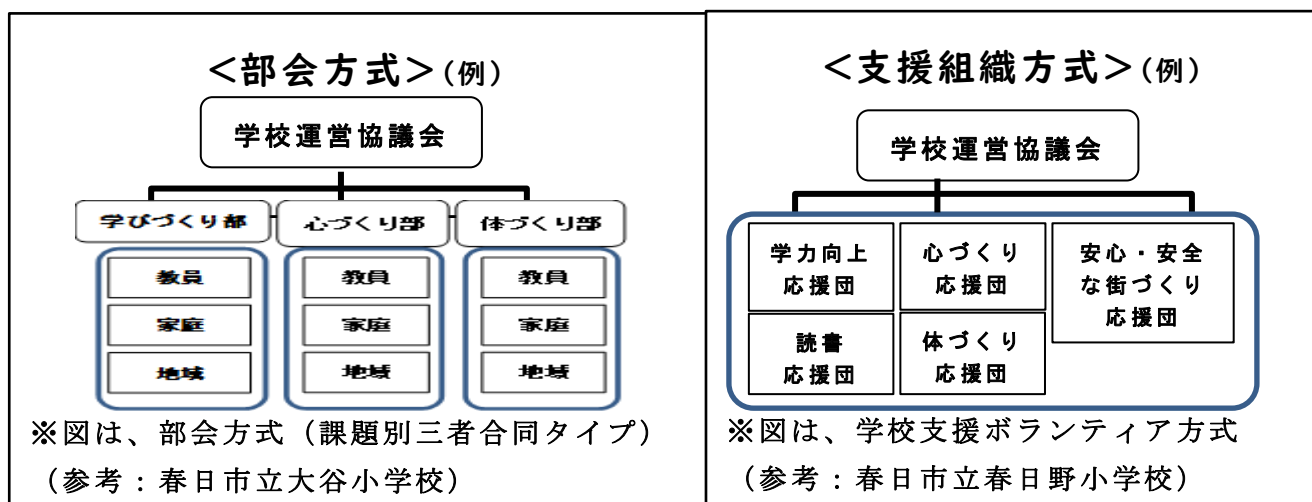
てられることが話し合われました。そして、学校と地域の合同防災訓練についても多くの意見が出されました。それらの意見を集約して「日の里カリキュラム(案)」を作成しました(資料8)。

後期	【活性化】		【高齢者福祉・防災】	
	8年：ワクワクWORK	6年：日の里もりあげ隊プロジェクト(まつり)	9年：安心・安全のまちづくり	7年：高齢者が住みよい日の里に
中期	4年：花いっぱいもりあげ隊、	廃品回収もりあげ隊、	日の里見守り隊プロジェクト	5年：考えよう！年をとるって？
	3年：発見！日の里の「たから」たんけん隊、発見！日の里の「れきし」たんけん隊			
前期	【地域を知る、ふれ合う】			
	2年：春の町ではっけん、花ややさいを育てよう、	生きるってすごい、まちの人につたえたい		
	1年：あきとなかよし、ふゆとなかよし			

資料8 「日の里カリキュラム」の案

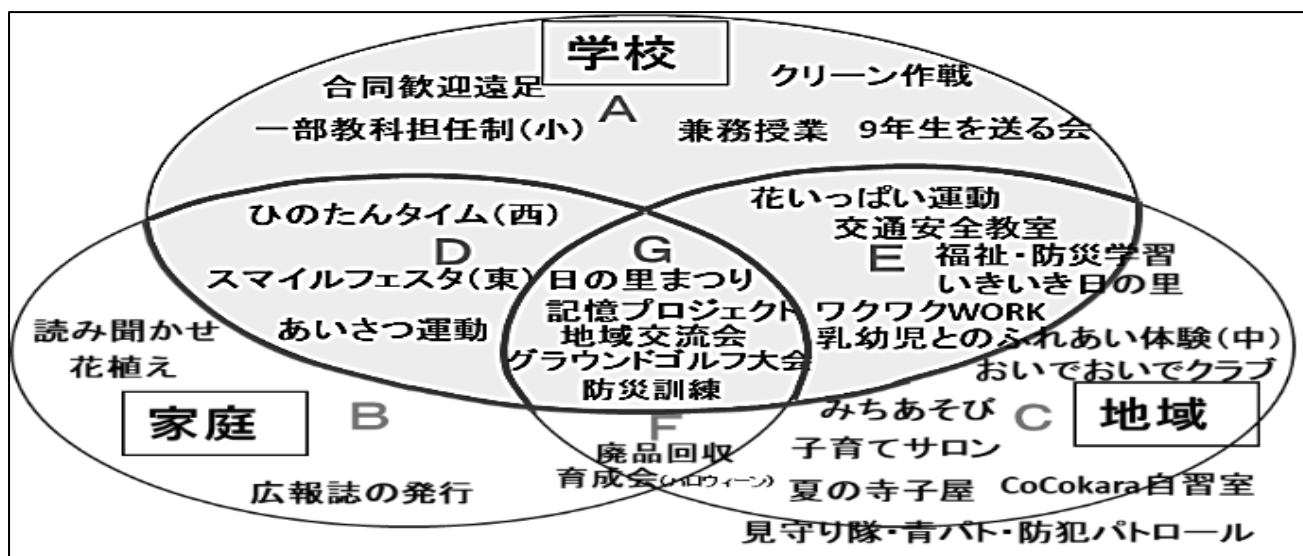
## ステップ4 組織体制・実働組織づくり

学園運営協議会で話し合ったことを実働していく組織を作る段階です。春日市のコミュニティ・スクールには、「部会方式」(目標・課題別の三者合同タイプ、三者独立タイプ)と「支援組織方式」(地域学校支援本部、CS推進委員会、ボランティア組織等)の2つのタイプがあります(資料9)。



資料9 実働組織のタイプ

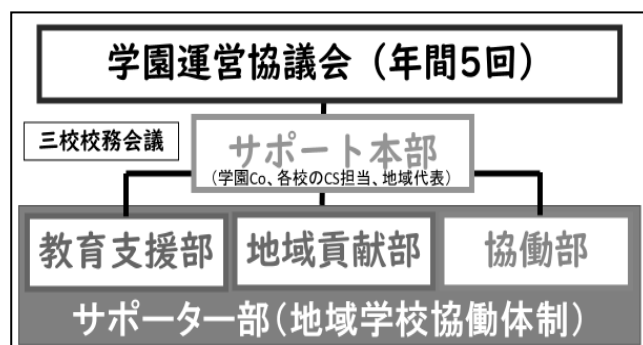
日の里学園では、「日の里カリキュラム」を中核にしていますので、まずは、「日の里カリキュラム」遂行に関わる組織を考えました。また、「日の里カリキュラム」以外の「地域連携・協働カリキュラム」を把握するために、日の里学園における、子どものための活動(「支援活動」「貢献活動」「協働活動」)にはどのようなものがあるのか、また、学校、家庭、地域のどこが主催または協働で行っているか整理しました(資料10)。



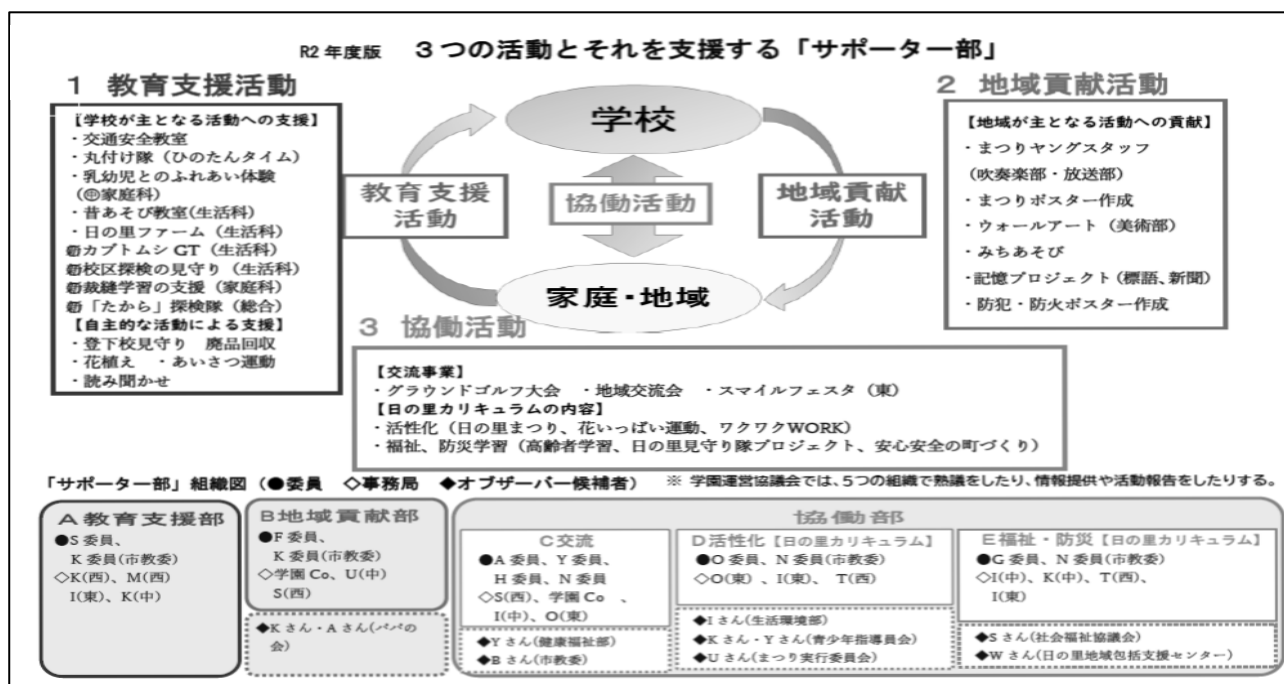
資料 10 「日の里カリキュラム」以外の地域連携・協働カリキュラムを整理したもの

そして、資料 10 の D(学校と家庭の協働)E(学校と地域の協働)G(三者の協働)にあたる部分を組織的、効率的に行っていくための組織が必要になると考え、「教育支援部」「地域貢献部」「協働部」という、サポーター部(地域学校協働体制)を立ち上げ、さらに、その機能化を図るためのサポート本部(事務局)と各校の連絡調整役として CS 推進担当を校務分掌上に新たに設けました(資料 11)。

また、各サポーター部には、学校、保護者、地域の各代表者の名前を入れることで、役割を明確にすることが決まりました(資料 12)。これを、全職員へ周知するために、三校合同職員会議(令和 2 年 4 月 2 日)において、校長部、教頭部、主幹部と協働で説明資料を作成し、説明会を行いました。さらに、第 1 回学園運営協議会(令和 2 年 6 月 10 日)においても、学園経営方針とサポーター部について承認を得ることができました。また、「日の里カリキュラム」の編成に伴い、2 年次は共通目標の一部が変更され、「地域を愛し(1 年次より追加)、自分で考え自分で行動する子どもの育成」に決まりました。



資料 11 サポート本部とサポーター部



資料 12 3つの活動とそれを支える「サポーター部」

## 「目標の共有化（ステップ2）」の取組

### 三校合同職員会議（令和2年4月2日）

日の里学園では、小中一貫教育推進のために三校合同の職員会議を実施し、学園経営構想の説明、赴任者の紹介などを行っています。

コミュニティ・スクールの目的や実働組織（サポーター部とCS推進担当）について、校長部、教頭部、主幹部が協働でプレゼンを作成し、教員に説明を行いました。日の里学園が目指すコミュニティ・スクールの姿や、「日の里カリキュラム」の実践がコミュニティ・スクールの推進につながることを伝えることで、教員の実践意欲の向上を図ることを目指しました。



三校合同職員会議の様子  
（令和2年4月2日）

## ステップ5 実働組織を中心とした実践

新型コロナウイルス感染拡大のために、実施が危ぶまれましたが、地域の方の温かい協力のおかげで、ほとんどの単元を実施することができました。実施にあたり、サポーター部会を開きました。その目的は、小小の担任が共通理解を図る、児童生徒の実態と

地域の方の思いや願いを把握し共有する、コロナ対策を検討するなど、学年やカリキュラムの実態によって様々です。特に初年度は、コロナ対策の検討が必要であったために、「例年通り」が通用しないこともあって、担任や地域の方との連絡調整をする学園 Co や CS 推進担当の役割は大きかったといえます。

## 「目標の共有化（ステップ2）」の取組

### ①学園と企業の取組をテレビで発信

宗像市が力を入れる「ハイブリット型団地再生」として、テレビで取り上げられた際に、官民と学園の協働によるまちづくりが進んでいることが放送されました。多くの人に「日の里カリキュラム」の魅力を伝えるきっかけになりました。



TV 放送された団地再生への関わり

### ②日の里地区の広報誌で「日の里学園コーナー」の連載開始

学校からの情報提供（広報）の手段は、紙媒体が基本です。日の里学園でも、学園便り（CS 通信）、学校便り、学年・学級便りを通じて、「日の里カリキュラム」実践の様子を伝えるようにしています。しかし、この方法では、保護者への発信はできても、地域住民への周知には課題がありました。そこで、日の里地区広報誌（全戸配布）に連載スペースをもらい、周知活動を強化することにしました。



## ステップ6 実働組織の見直し・次年度の活動計画

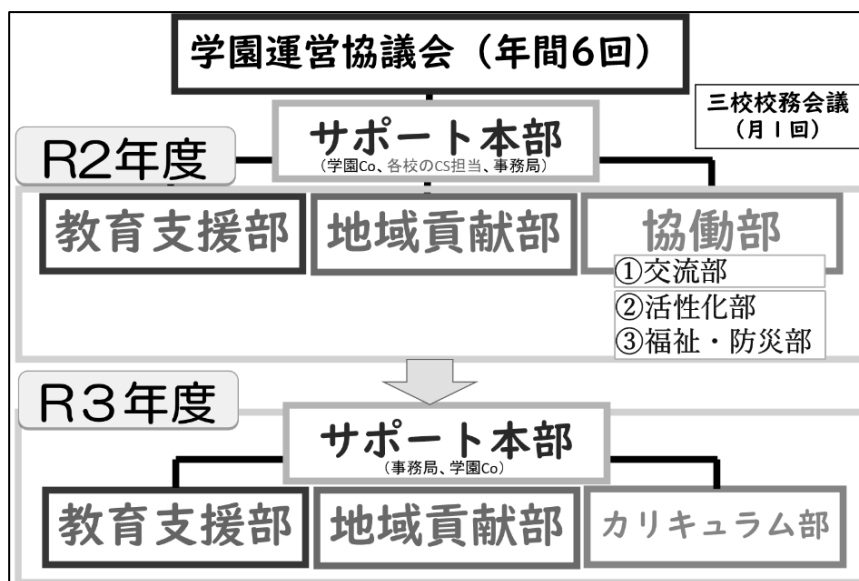
本年度の実践の成果と課題を踏まえ、次年度の実働組織の見直しと次年度の活動計画を立てていきます。それに伴い、運営協議会委員の再考の必要性も出てきます。

日の里学園では、令和2年度は、A 教育支援部 B 地域貢献部 C 協働部（①交流部②活性化部③福祉・防災部）という、5つの組織がありましたが、令和3年度には、交

流部を教育支援部へ入れるとともに、協働部をカリキュラム部と改変することが検討されています（資料 13）。

また、次年度の活動計画については、第 4 回学園運営協議会（令和 3 年 1 月 15 日）において熟議を行いました。

「教育支援部（交流部を含む）」では、「日の里学園サポーター（仮）」という、保護者や地域住民が学校の支援活動を行うボランティア組織を立



資料 13 実働組織の改編案

ち上げる計画が出されました。日の里学園を支援するボランティア活動をまとめたパンフレット作りや、本部をどこにおくのか、予算はどうするのかなどの現段階での課題を出し合い、解決の方法を模索する話し合いが行われました。また、学校評価アンケートにおいて、「保護者のコミュニティ・スクールの認知度」が低いという結果を受け、その目的や良さを実感してもらえるように、気軽に参加できる活動を企画し、保護者への周知を図っていくことが出されました。

「地域貢献部+カリキュラム部」では、まちびらき 50 周年記念事業等の情報を得ながら、カリキュラムの充実・改善を図ることが確認されました。また、「地域の要望をまとめるなど、地域の窓口になるような仕組みが必要だ」という意見が出され、地域コーディネーターの役割が見えてきました。

今後は、コミュニティ・スクール推進の要となる学園コーディネーターや地域コーディネーターの役割の明確化が大切となります。

# 第 3 章

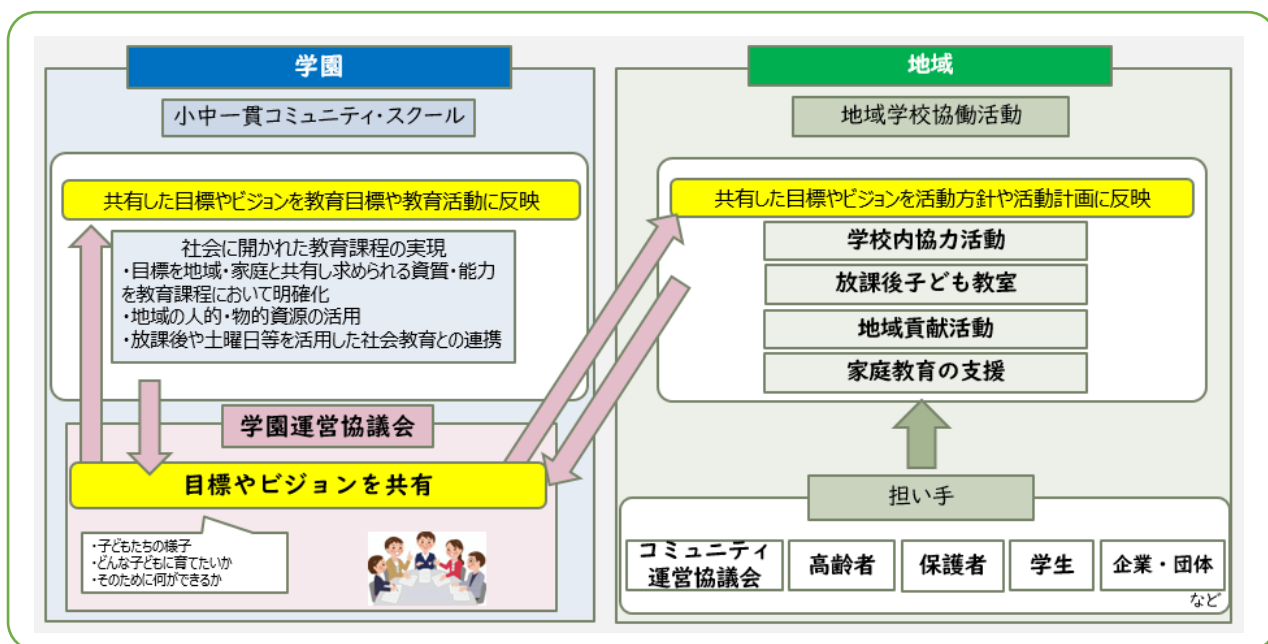
**「小中一貫コミュニティ・スクールと  
地域学校協働活動の一体的推進」**

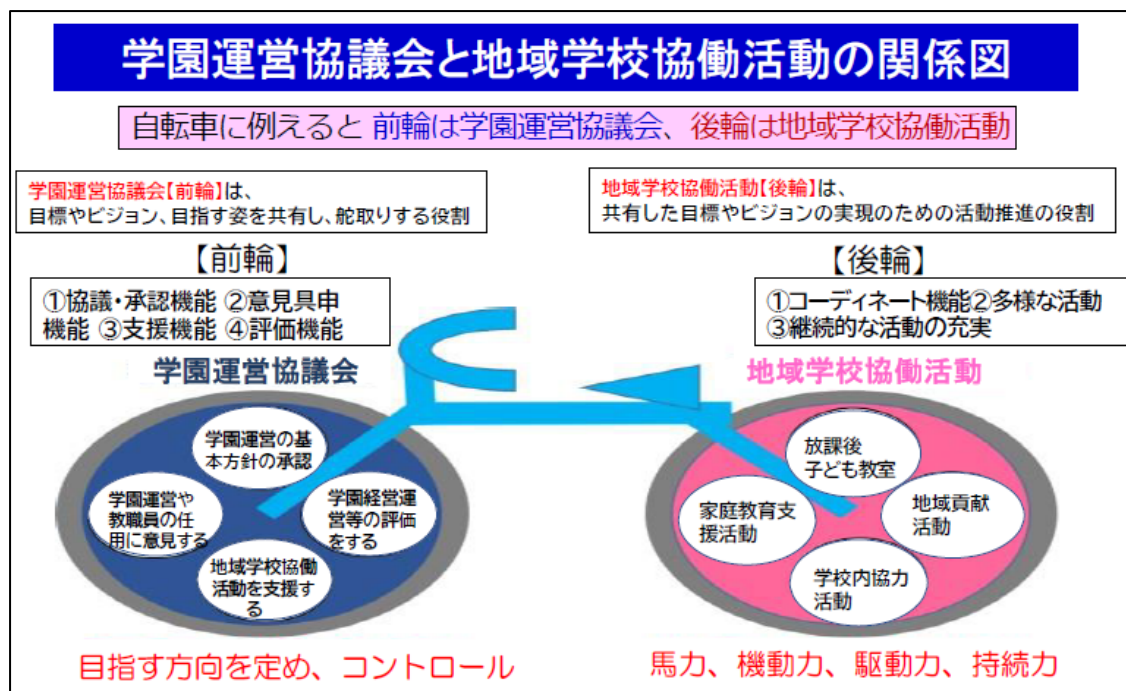
# 1. 小中一貫コミュニティ・スクールと地域学校協働活動を一体的に推進するとは

学園の方針や地域の願いをもとに学園と地域で共有した目標（子ども像）やビジョン（教育の在り方）に向けて、学園と地域が連携・協働して取り組み、その成果や課題をもとに新たな目標やビジョンを共有し、取組を進めていくことです。

そのために、学園運営協議会において、「子どもたちの様子」「どんな子どもに育てたいか」「そのために何ができるか」について、学園と地域の代表が話し合い、学園と地域で目標やビジョンを共有します。学園は、共有した目標やビジョンを自校の教育活動に反映し、社会に開かれた教育課程の実現を通して「地域とともにある学園づくり」を進めます。地域においても、共有した目標やビジョンを地域学校協働活動に反映し実施していくことを通して、「学園を核とした地域づくり」を目指します。そして、学園や地域の取組の成果や課題を学園運営協議会で共有し、新たな目標やビジョンを共有していきます。

このように、学園運営協議会を軸として PDCA サイクルをまわし続けながら、学校と地域が連携・協働していく中で「地域とともにある学園づくり」と「学園を核とした地域づくり」を進めていくことが、小中一貫コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進です。





## 2. 小中一貫コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進が進んでいる学園の姿とは

一つの例として、小中一貫コミュニティ・スクールと地域学校協働活動が一体的に推進されている学園では、保護者、高齢者、大学生、企業、団体など多様な地域住民が学園の教育活動に参加する機会が増えます。多くの地域住民がゲストティーチャーや学習支援ボランティアとなって子どもを支援する多様な地域学校協働活動が計画的・継続的に実施されるようになります。その結果として、社会総がかりで子どもを育てる教育活動が展開されるようになり、学園の活性化が進みます。（地域とともにある学園づくり）

また、地域学校協働活動に参加した地域住民は、子どもへの支援を通して、自己有用感を高めたり、生きがいを見つけたり、交友関係を広めたりしていきます。その結果として、健康で豊かな人生を歩む人が増え、新たな地域活動の創出や地域活動の担い手が増加し、地域の活性化が進みます。（学園を核とした地域づくり）

以上のように、小中一貫コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進が進んでいる学園では、地域学校協働活動が多様化していくとともに、多くの地域住民が活動に参加する姿が見られるようになります。

### 3. 小中一貫コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進を進める上で大切なことは

学園と地域が共有した目標に向けて実施する地域学校協働活動を計画に確実に位置づけていくこと、そして、その計画を学園と地域で共有していくことです。

まず、地域学校協働活動を学園の計画に位置づけていくことで、学園運営協議会で共有した目標やビジョンに対する地域の役割や責任を明確にしていくことができるようになります。その結果として、地域の当事者意識が高まり、地域学校協働活動が活性化していきます。また、学園運営協議会で共有する子どもの育ち（成果や課題）に対する地域の当事者意識も高まり、より充実した地域学校協働活動の実施に向けて内容の改善が図られていくことも期待できます。

次に、学園運営協議会で、地域学校協働活動が位置づけられた計画を学園と地域が共有していくことで、学園と地域が見通しをもって連携・協働することができるようになります。その結果として、地域学校協働活動を実施する際に、事前に学園と地域が連絡を取り合ったり、計画的に協議の場を設定したりするなど、共有した目標に向けて連携・協働していく体制づくりが進むことが期待できます。また、地域学校協働活動が一過性の取組や計画倒れとなったりすることを防ぎ、効果的継続的な実施につながっていくことも期待できます。

以上のように、地域学校協働活動を学園の計画に位置づけることで、学園運営協議会を軸として PDCA サイクルを回し続けていけるよう（小中一貫コミュニティ・スクールと地域学校協働活動を一体的推進）になります。

		【〇〇学園共育目標】 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇			
		【知】 〇 〇 〇 〇 〇 〇 子 ども	【徳】 〇 〇 〇 〇 〇 〇		
	1 年	2 年	3 年	4 年	
【 知 】 〇 〇 〇 〇 〇 子 ど も	わたしのアサガオ【生活】 (5月/▲▲クラブ)	どきどきわくわく まちたんけん【生活】 (6月/〇〇クラブ)	大豆を使った食品の ひみつ【総合】 (7月/▲▲▲▲さん)	〇〇地区を よりよくしる【総合】 (1月/〇〇クラブ)	
	むかしあそびの名人にな ろう【生活】 (1月/〇〇会)	かけざん【算数】 (11月/〇〇グループ)	昔の道具とくらし 【社会】 (12月/〇〇会)	学年のまとの【算数】 (3月/〇〇グループ)	
	むなかた子ども大学【特活】 (11月/〇〇会、■●クラブ、〇〇クラブ、■●●●さん、〇〇会社)				
	〇〇実験教室(5・9・2月の第3土曜日/〇〇会)				
	〇〇っ子学習会(毎週火曜日の放課後)				

## 4. 地域学校協働活動とは

地域学校協働活動とは、地域の高齢者、成人、学生、保護者、PTA、NPO、民間企業、団体・機関等の幅広い地域住民等の参画を得て、地域全体で子供たちの学びや成長を支えるとともに、「学園を核とした地域づくり」を目指して、地域と学園が相互にパートナーとして連携・協働して行う様々な活動です。具体的には、ゲストティーチャーや丸つけ隊、登下校の見守りといった「学校内協力活動」、放課後や休日に様々な体験活動や学習支援を実施する「放課後子ども教室」、子どもとともに地域の課題を解決する「地域貢献活動」、家庭教育学級の開設や子育てサロンの運営などを行う「家庭教育支援活動」といった活動があります。

現在、地域における教育力の低下、家庭の孤立化などの課題や、学校を取り巻く問題の複雑化・困難化に対して社会総掛かりで対応することが求められています。そのためには、地域学校協働活動のように、地域と学園がパートナーとして連携・協働するための組織的・継続的な取組（地域学校協働活動）が必要不可欠となっています。また、学習指導要領が目指す「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、学園は地域学校協働活動を教育課程に位置付けることが重要視されています。さらに、地域においても、より多くの地域住民等が子供たちの成長を支える地域学校協働活動に参画することが求められています。

地域学校協働活動は、地域の実情に応じて様々な形で展開されていきます。例えば、休日に実施する放課後子供教室から始まり、学校の授業に参加するゲストティーチャーや丸つけ隊などの学校内協力活動が加わり、さらに子どもとともにまちづくりに取り組む地域貢献活動や学校と地域の行事の共催などを実施する場合もあれば、学校の環境整備や登下校の見守りなどの学校内協力活動から始まり、放課後や土曜日に実施する放課後子ども教室に拡張していく場合もあります。

また、地域学校協働活動は、学園のみならず地域住民や保護者も含めた社会総掛かりでの教育の実現を目指すものであり、教職員の負担軽減にも資するものです。しかしながら、導入期においては「教職員への負担が大きい」という声もあることから、地域学校協働活動が教職員の負担軽減などの学園運営の改善にも資するよう、学園側の事情や地域に対する要望等に留意して推進することが必要となります。

# 第4章

**「地域学校協働活動推進員の役割と  
CSを推進する活動」**

## 地域学校協働活動推進員などの役割とCSを推進する活動

### 1. 小中一貫CSと地域学校協働活動の一体的推進に必要なもの

#### (1) 熟議

学園と地域が、よく話し合うこと

#### (2) 協働

同じ目標に向かって、一緒に協働すること

#### (3) マネジメント

組織的に人をつなぎ、やる気や能力を引き出すこと

この3つを実現するために、学園の窓口である学園コーディネーター(以下「学園Co」を用いる)と地域の窓口である地域学校協働活動推進員が必要です。

### 2. 学園コーディネーターとは

宗像市会計年度任用職員で、職務は指導主事です。市内7学園のうち、6学園に配置され、元小中学校の校長が任用されています。小中一貫教育を推進するための学校間連携の要であり、小中一貫CSの推進役です。

### 3. 地域学校協働活動推進員とは

コミュニティ運営協議会等の推薦を受け、市教育委員会が委嘱を行い、任期は1年で再任も可能です。地域学校協働活動を推進するために地域と学園をつないだり、地域の団体や個人をつないだりしてネットワークづくりを行います。

### 4. 社会総がかりの教育を実現するために

学園Coや地域学校協働活動推進員、CS推進担当教員等が中心となり「地域と教員(学園)」「地域と子ども」「地域と地域」をつなぐ仕組みをつくり、機能化を図ります。

また、学校支援ボランティア制度等の地域住民を学校に呼び込む体制を活用しながら、より多くの地域住民とともに地域学校協働活動を行い、社会全体で子どもを育てる社会総がかりの教育の実現を目指します。

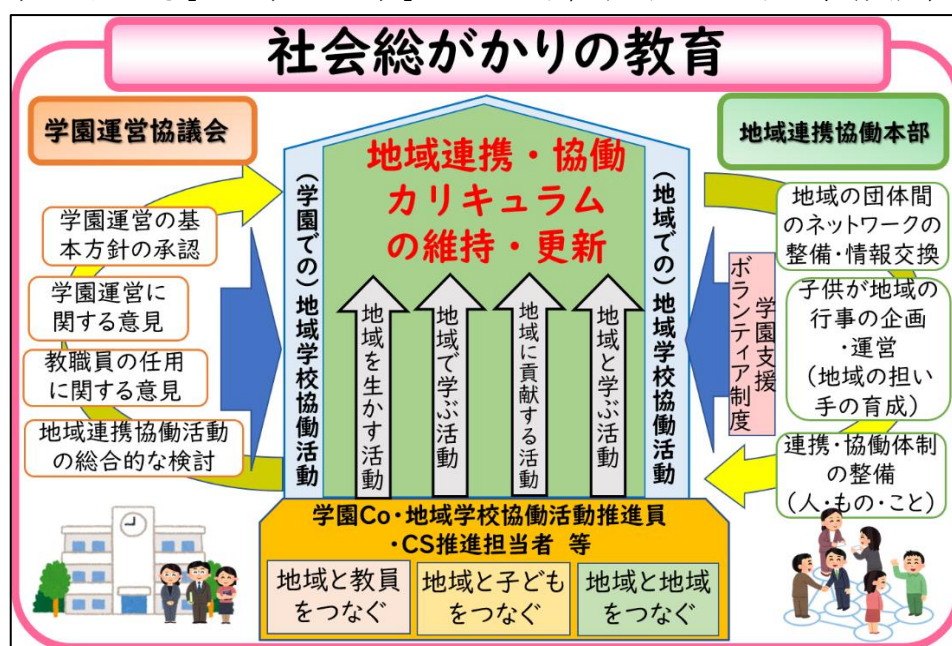


図1 社会総がかりの教育を実現するための構想図

## 5. つながりをつくるための仕組みづくり(日の里学園の実践)

### (1)地域と教員をつなぐ仕組みづくり

ア「日の里学園CS推進本部」(以下「CS推進本部」を用いる)の体制づくり

CSを推進する事務局として「CS推進本部」を設け、地域学校協働活動を行う際にできるだけ担任の負担が軽減できるようメンバー構成を考えました(図2)。

- ・学園C o 1名
- ・学園教頭部から1名(事務局校)
- ・CS推進担当教員3名(各校1名)
- ・地域学校協働活動推進員2名

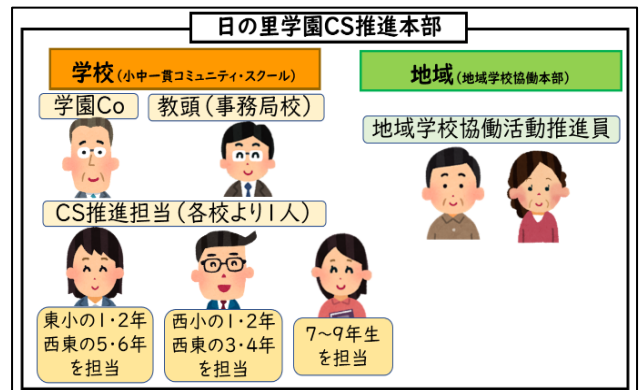


図2 日の里学園CS推進本部のメンバー

イ日の里学園のCS全体の仕組みの整備



図3 日の里学園CS全体の仕組み図

「CS推進本部」を中心としたCS全体の仕組みを図式化し整備しました(図3)。「日の里共育ネット」とは、日の里の各団等が緩やかなネットワークを形成し、地域学校協働活動を推進する体制です。

ウ「学園運営協議会」での活動報告

学園運営協議会では、15名の委員を3つの部に分けています。地域学校協働活動推進員は「協働部」に所属し、学園内外の地域学校協働活動の報告を行います。学園C oは、事務局の一員として準備運営を行い、進行役として参加します。



図4 日の里学園 学園運営協議会の組織図

## エ地域との「学園合同職員会議」の実施

学園と地域の協働意識を高めるために、年度当初の学園合同職員会議に、地域学校協働活動推進員と学園運営協議会会長（兼日の里地区運営協議会会長）を招き、職員に紹介し、職員と一緒に教育目標や学園全体の仕組みを共有しました。その際の地域との連絡調整は、学園C oが行いました（資料1）。



資料1 地域との学園合同職員会議

## オ地域を学び・地域とともに協働活動を振り返る場の設定

### （学園合同夏季研修会）

学園合同夏季研修会では、学園C oやC S推進担当と話し合い、教員が地域の方から地域の現状と課題について話を聞く「地域を学ぶ研修会」や地域連携・協働カリキュラムの成果や課題を地域の方と一緒に振り返る「地域との協働活動研修会」を企画・実施しました。地域の課題や地域の願いを聞いて、授業の構想を考えたり、地域の方の声を聞いて授業の振り返りや見直しをしたりすることができました。



資料2 地域を学ぶ研修会（R3）



資料3 地域との協働活動研修会（R4）

## カ「日の里学園サポーター制度」の活用充実

「日の里学園サポーター制度」は、学園運営協議会の「教育支援部」から立ち上がった登録制のボランティア活動です（図5）。「できる人が できる時に できることを」というスタンスで、学園の教育活動の支援をしてもらうだけでなく、地域の方の生きがいくりの場や新たな交流の場としても、学園と地域が互いにWinWinになる関係づくりを目指しています。

地域側の窓口であるサポーターコーディネーターは、各校のPTA役員（本部役員や保護者）が行っています。

地域学校協働活動推進員は、サポーターコーディネーターと連携しながら、サポート活動を支援したり、地域住民への登録の呼びかけを行ったりしています。

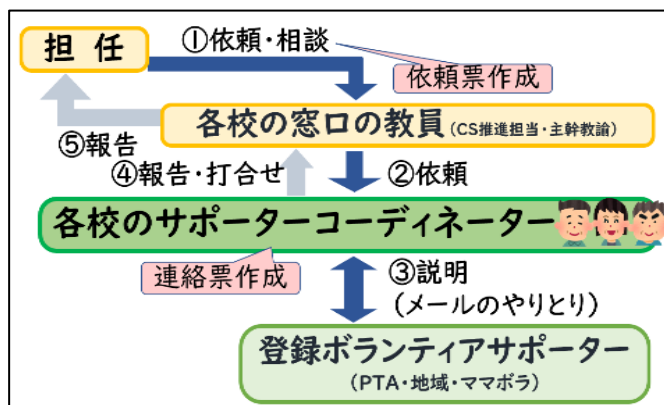


図5 「日の里学園サポーター制度」活用の流れ

## (2)地域と子どもをつなぐ仕組みづくり

### ア生徒会に「地域愛考会」の創設

「地域愛考会」は、「地域イベントを学園の子どもたちや先生、日の里全体に伝える場ができないか。」という地域側の声や、「これからの地域を担っていくのは子どもたちであり、地域の方と子どもが互いに話し合ったり、相談したりする場がほしい。」

という学園側の声が基になり創設しました。月に一回程度、地域学校協働活動推進員と生徒会役員が集って、学園や地域の情報交換をしたり、互いの活動について相談をしたりする場としています（資料4）。そして、生徒会役員が、そこで得た地域と学園の情報を載せた生徒会新聞をつくっ

ています。その新聞をコミセンや各小学校に掲示したり、校内放送で地域イベントの募集やお知らせをしたりしています。地域と子どものつながりをつくり、子どもの目を地域に向け、情報を広く共有できるようにしています（図6）

### イ日の里地区運営協議会の特別部会に「次世代育成グループ」の創設

地域を担う人財を地域で育てるために、子どもが地域イベントの企画・運営から携わり、地域貢献できる場を支援する「次世代育成グループ」を創設しました（資料5）。このグループは、地域学校協働活動推進員が、学園運営協議会にお



資料5 「日の里地区文化祭」に向けた打ち合わせ

いて、地域での子どもの主体的な活動の価値を共有したり、日の里地区コミュニティ運営協議会やNPOに相談したりして、日の里地区運営協議会の特別部会の「まちづくり委員会」の中の一つのグループとして創設しました。日の里学園の子ども（6～9年生）に募集をし、任期は1年としています。グループ



資料4 「地域愛考会」の様子



図6 「地域愛考会」を中心とした日の里の情報共有の流れ

長は、今のところは、地域学校協働活動推進員が担い、子ども育成部会と連携しながら活動しています(資料6)。

### (3)地域と地域をつなぐ仕組みづくり

#### ア「日の里共育ネット」の情報交換会の実施

「日の里共育ネット」内のネットワークをつなぐために、「日の里共育ネット」の各団体の代表者が集い、情報交換会をしています。地域学校協働活動推進員が中心となって、学園の目標とCS全体の仕組みを共有したり、各団体の情報交換や相談をしたりできるような場にしました。参加した方からは、「初めてそのような活動をしている団体があることを知りました。」「それぞれの団体で連携できることがあれば、一緒に子どもを対象とした取組をやってみたい。」などという声があがっていました(資料7)。



資料6 「日の里地区文化祭」での活動



資料7 「日の里共育ネット」の情報交換会

## 6. 各役割の明確化(日の里学園の実践)

「地域と教員(学園)」 「地域と子ども」 「地域と地域」をつなぐための仕組みを機能させるためには、図7のような「CS推進本部」の役割が必要です。

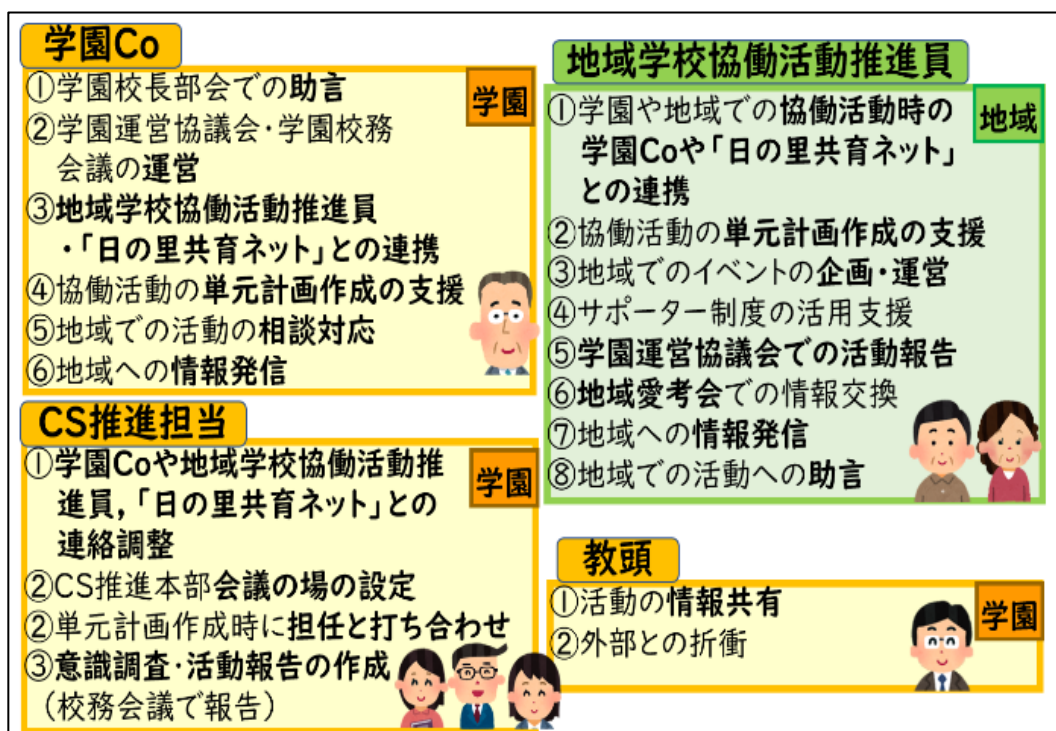


図7 「日の里学園CS推進本部」のメンバーの各役割

## 7. 一体的推進のサイクルづくり（日の里学園の実践）

図8は、学園での「地域連携・協働カリキュラム」の一つの単元を学習する際の、「CS推進本部」の業務の流れです。

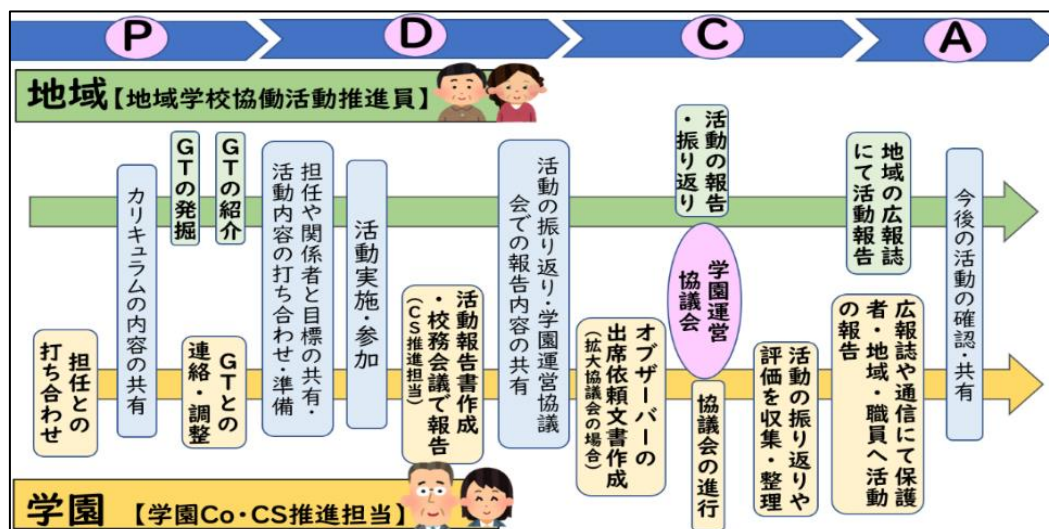


図8 「日の里学園CS推進本部」の業務の流れ

### (1) 目的・目標の共有（P）

まず、計画の段階です。地域連携・協働カリキュラムは、学園と地域の願いや課題をすり合わせ、子どもの学びや成長に価値あるものをカリキュラムに位置付けます。

6年生の総合的な学習の時間における、「日の里もりあげ隊」（地域活性）では、地域の課題に気づき、「日の里の町を活性化したい」という願

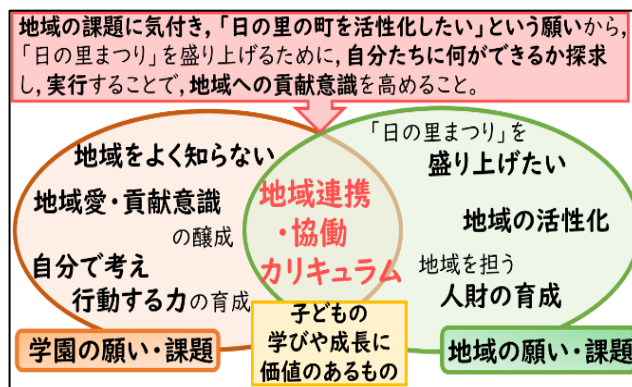


図9 「目的・目標の共有（P）」

いから、「日の里まつり」を盛り上げるために、自分たちに何ができるか探求し、実行することで、地域への貢献意識を高めることを目標としました。

この計画の段階で、できるだけ担任の負担を軽減するために、最初の打ち合わせの場は、CS推進本部で連絡調整を行い設定するようにしました。打ち合わせでは、CS推進担当が授業の目標や計画を提案し、活動の内容や日時、どのようなGTを招いたら効果的な学習が行えるか検討します。

その際キーマンになるのが、地域学校協働活動推進員です。担当教員の要請を受けて、地域をよく知る地域学校協働活動推進員が、日の里共育ネットの中から学習の内容に合いそうなGTを紹介することで、より学習の効果が高まります(図10)。場合によっては、「日の里学園サポーター制度」を活用しGTやサポーターを要請する場合があります。

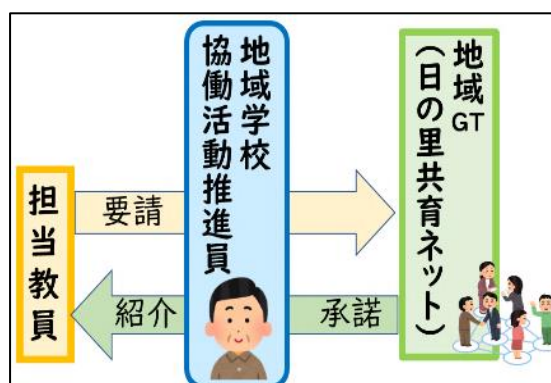


図10 地域学校協働活動推進員の役割

## (2)活動内容の理解・共有(D)

授業当日は、CS推進本部のメンバーも授業に参加し、学習支援をしたり授業の記録を行ったりします(資料8)。子どもたちの活動の様子は、担任だけでなく学園Coや地域学校協働活動推進員が通信や地域の広報誌で情報発信し、活動の目的や内容、価値が広く共有できるようしました。

また、授業が終わったら終わりではなく、学校での学習を地域に広げるために、生徒会役員が「地域愛考会」において、地域学校協働活動推進員に、「日の里を盛り上げるために授業で作ったグッズを他の地域イベントでも販売できないか」という提案も行い、地域で検討してもらいました(資料9)。



資料8 活動内容の理解・共有(D)



資料9「地域愛考会」の様子

## (3)評価の共有(C)

活動後は、CS推進担当が子どもの意識調査をします。実際に学園運営協議会委員の授業訪問も行い、教育目標達成につながる活動になっているか熟議も行いました(資料10)。

学園合同夏季研修会では、「地域との協働活動研修会」(資料11)にて、地域の方と一緒に活動の成果と課題を共有しました。この会の企画・運営や地域の方への依頼は、学園CoやCS推進担当が行いました。地域の方の意見を聞きながら協働活動の振り返りを行いました。

また、CS推進本部でも、連携・協働活動の振り返りや今後の計画について話し合い、学園運営協議会前には、協議会で報告する内容や議題にすることなどの打ち合わせを行うようにしました。



資料10 評価の共有



資料11「地域との協働活動研修会」

## (4)見直し・改善案の共有(A)

そして、活動内容や評価を、CS推進担当者が、学園校務会議にて報告し、学園内で共有しました。一方で、地域学校協働活動推進員が、学園運営協議会において報告をしました。

このように、学園運営協議会で地域学校協働活動推進員が、学園内外の連携・協

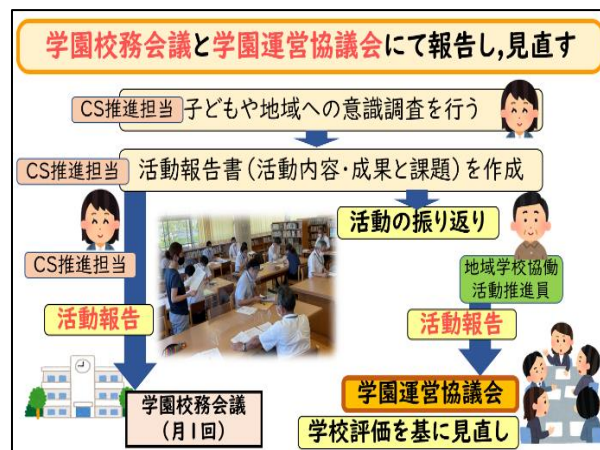


図11 見直し・改善案の共有

働活動について報告することで、子どもの姿で活動の価値が共有でき、学校評価や学校関係者評価を基に、熟議することができています。

8. 全体考察

以上のような一体的推進のサイクルを回しながら、日の里学園では、大きく分けて4つの地域学校協働活動が充実してきています（資料12）。

- 「地域を生かす活動」：地域の人・もの・ことを学習に生かす活動
- 「地域と学ぶ活動」：子どもと一緒に、保護者や地域住民も学ぶ活動
- 「地域に貢献する活動」：地域のために考え、進んで地域貢献する活動
- 「地域で学ぶ活動」：地域主催の地域での子どもの居場所となるような活動



資料12 4つの「地域学校協働活動」の様子

(1) 「日の里学園CS推進本部」に関する意識の変容

「CS推進本部」があることで地域と学園の連携・協働活動がしやすくなったかという項目では、学園運営協議会委員も地域も教員も全てポイントが上昇し、「CS推進本部」がそれぞれをつなぐ仕組みをつくり、機能させることは、連携・協働活動のしやすさにつながっていることが明らかになりました。特に、CSの推進において、地域学校協働活動推進員の存在は大きいと考えます。

表1 「日の里学園CS推進本部」に関する意識の変容

項目	対象	R3 前期	R4 後期	R3前期 分らない	R4後期 分らない
「日の里学園CS推進本部」 (学園Co・地域学校協働活動推進員・CS推進担当)があることで、 地域と学園の連携・協働活動がしやすくなった。	学園運営協議会委員	3.8	3.9	0%	10%
	地域	2.1	3.0	36.2%	27.1%
	教員	2.8	3.3	8.8%	2.6%

(4件法 学園運営協議会委員N=10 地域N=71 教員(R3から在籍する教員) N=41)

## (2)学園運営協議会委員の意識の変容

令和２年度と令和３年度以降に、大きな上昇が見られました(表２)。この間に、地域学校協働活動推進員が委嘱され、「ＣＳ推進本部」を設置しました。

地域学校協働活動推進員が、学園運営協議会において、学園内外の地域学校協働活動の内容や成果・課題を報告することで、子どもの姿で熟議することができるようになり、学園運営協議会での熟議が活性化したと考えます。また、「ＣＳ推進本部」が機能することで、連携・協働活動がしやすくなり、連携・協働する機会が増えたことで、その価値に気付き、地域・教員が連携・協働活動に協力的になったと考えます。保護者を巻き込むことについては課題です。

表２ 学園運営協議会委員の意識の変容

番号	項目	R2 前期	R3 前期	R4 前期	R4 後期
5	学園運営協議会での協議や熟議は活発に行われている。	3.3	3.7	3.7	3.9
7	保護者は、学園の教育活動に協力的である。	2.5	3.0	3.0	2.9
8	地域は、学園の教育活動に協力的である。	2.8	3.5	3.3	3.5
11	学園の先生は、地域での協働活動に協力的である。	2.7	3.2	3.7	3.6

(４件法 学園運営協議会委員(校長・教育委員会除く)N=10)

## (3)教員の意識の変容

地域と合同の研修会を行うことにより、地域の方と交流できる機会が増え、さらに地域の課題を知ることができるようになってきていると考えます。

また、ＣＳの取組が子どもの地域への関心を高めることに繋がると認識していること、サポーター制度を活用することで、その価値に気付き、連携・協働するよさを実感し、ＣＳを活性化することに効果があると感じていることが分かりました。

表３ 教員の意識の変容

番号	項目	R3 前期	R3 後期	R4 前期	R4 後期
7	地域は、学園の教育活動に協力的である。	3.2	3.3	3.5	3.5
8	地域が抱えている課題を知っている。	2.4	2.7	2.9	2.9
17	ＣＳの取組が、子どもの地域への関心を高めることにつながっている。	3.1	3.2	3.3	3.4
21	サポーター制度はＣＳを活性化するのに効果がある。	3.0	3.2	3.6	3.5

(４件法 教員(R３から在籍する教員)N=41)

## (4)子どもの意識の変容

地域の方の名前を知っている子どもの数や地域の施設を利用する子どもの数の増加がみられ、地域に目を向け、地域に関わろうとしている子どもが増えていることが分かりました。

表 4 子どもの意識の変容

項目		R 2	R 3	R 4
地域の人に自分からあいさつをする。		3.3	3.5	3.5
地域の方の名前を知っている。		2.0	2.4	2.3
地域の施設を利用する頻度。	全然利用していない	30.4%	11.7%	10.5%
	月に1～2回利用する	42.1%	37.2%	23.0%
	月に3～5回利用する	16.2%	28.4%	37.7%
	月に6回以上利用する	11.2%	22.5%	28.7%

(4件法 日の里学園の児童生徒)

## (5)地域の意識の変容

学園の教育目標やCSの目的、活動の理解が向上していることが分かりました。一方で、学園運営協議会の内容の周知については課題となっています。地域の中で子供の居場所となるような「子どもが参加できる活動」も増えています。「日の里学園サポーター制度」の登録者も増えていることから、学園と一緒に子どもを育てていこうとする地域の意識も変わってきていることが分かりました。

表 5 地域の意識の変容

項目	R3前期	R3後期	R4前期	R4後期	R3前期分らない	R4前期分らない	R4後期分らない
学園運営協議会での協議や熟議が積極的に行われている。	2.0	2.4	3.4	3.0	34.5%	32.3%	22.9%
学園の教育目標や目指す子ども像を理解している。	2.4	2.7	2.9	3.2	29.3%	20.9%	15.7%
CSの目的や仕組み、活動について理解している。	2.2	2.4	3.1	3.1	24.1%	22.5%	14.3%

(4件法 地域 N=71)

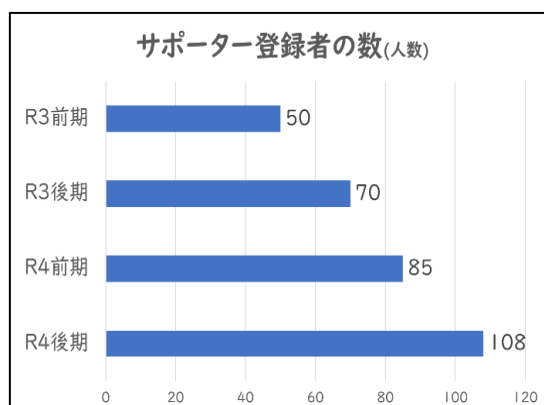


図 12 「日の里学園サポーター制度」の登録者の数

## 9. 成果

- 「日の里学園サポーター制度」の実施により、学園もWin地域もWinという形が作られ、教員も地域も連携・協働するよさを実感してきました。
- 地域連携・協働カリキュラムの実施により、学園内外で、子どもたちがまちづくりの担い手として活躍する姿が見えるようになりました。
- 地域学校協働活動推進員の委嘱により、学園内外の地域学校協働活動が共有されやすくなり、学園運営協議会の熟議が活性化しました。
- 「日の里学園CS推進本部」が機能することで、学園・地域・子どもをつなぐ仕組みがつけられ、地域の方・保護者・教員の連携・協働意識の向上や子どもの地域への関心の高まりが見られました。

# 第 5 章

## 「各学園の実践事例」

# 日の里学園の実践

## 1. 日の里学園の特徴

日の里学園（日の里東小学校、日の里西小学校、日の里中学校）は、①教育目標、研究主題、9年間を見通したカリキュラム、学習規律、家庭学習などをそろえる「学びの一貫」、②中から小へ、小から中へ、小から小への「兼務授業」、③小中合同の歓迎遠足やクリーン作戦、9年生を送る会、小小合同の宿泊体験学習や修学旅行などの「交流活動」を3つの柱として、これまで17年間小中一貫教育を推進してきた。また、本学園の運営は、小中で校務分掌を統一し、学園職員会議（4月）、学園校務会議（月1回）、学園分掌部会（学期1回）、学園合同研修会（夏季休業中）、学園授業研究会（年2回）を実施するなどシステム化し、小中の連携・協働を組織的、効率的に行っている。加えて、令和元年度から、小中一貫コミュニティ・スクールを推進しており、地域貢献活動を積極的に行うとともに、日の里地区の教育資源を生かし、小中の系統性を整えた生活科や総合的な学習の時間の「日の里カリキュラム」の実施により、地域とのつながりや信頼関係を深めている。

## 2. 日の里カリキュラムの作成の流れ

「日の里カリキュラム」の作成にあたっては、地域の課題をもとに、まず2小の単元を統一し、中学校も小学校での学びを踏まえて単元を見直した。また、学園運営協議会において地域や家庭、学園にとって大きなメリットをもたらすカリキュラムになるように、熟議を行った。そして、このカリキュラムの作成と実施により、「地域とともにある学校づくり」と「学校（子ども）を核とした地域づくり」の好循環を生み出そうと考えた。具体的には、次の手順で作成を進めた。

### （1）地域のニーズ調査と学園の方向性の明確化（R）

学園と地域がパートナーとして連携・協働していくために、学園と地域の課題を把握するとともに、双方の課題を解決するための方向性を明確にした。日の里地区の課題としては、高齢化率の高さ、地域行事の衰退傾向、団地の老朽化などが挙げられる。学園の課題としては、地域と連携したカリキュラムが多くあるものの、学校間の共有化が図られておらず、系統性が弱いという課題があった。これらの双方の課題を解決する方途として、「日の里カリキュラム」の作成と実施をコミュニティ・スクール推進の中核に据えた。

### （2）目標の共有化（V）

日の里地区全体に、コミュニティ・スクールの意義や目的を伝えていった。特に導入期においては、三者の教育目標をどのように設定し、共有化を図るかが重要になるので、「日の里学園コミュニティ・スクール準備委員会」（平成30年3月）において熟議を行い、子ども

たちをどう育てていくかを協議した。その際、家庭、地域の代表者から「子どもの積極性が育つよう、家庭でも地域でも自分たちで考える場を与えたい」という意見があり、学校の「思考力・判断力・表現力」をつけさせたいという願いと同じであることが分かった。それを受けて、日の里学園の教育目標「自分で考え、自分で行動する子どもの育成」が設定され、第1回学園運営協議会（令和元年6月）で承認された。なお、この教育目標は、教育用語を使用せず「誰もが覚えやすい目標」になるように留意している。

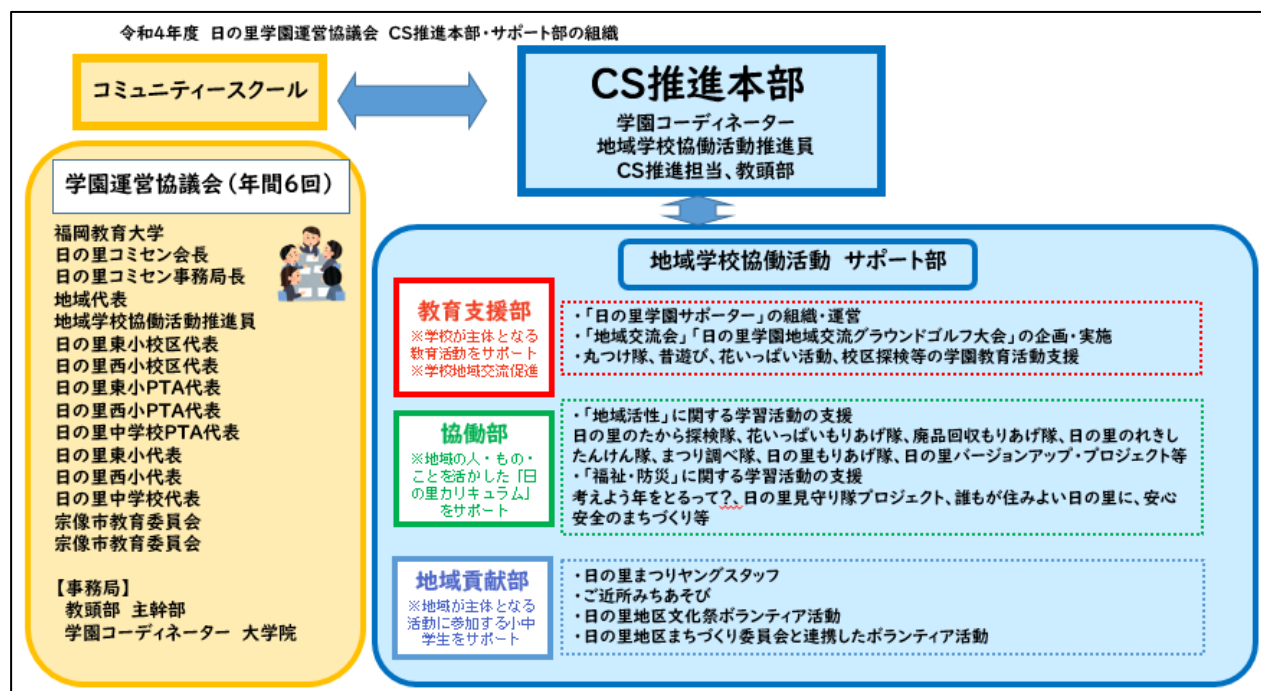
### （3）目標を達成するカリキュラム・デザイン（P）

2小1中と地域をつなぎ、教育目標達成と地域づくりの中核となるカリキュラムをデザインした。まず、三校合同研修会において、小小の話し合いでは、カリキュラム統一の方向性が見出されるとともに、中学校では、これまでの総合的な学習の時間の問題点の洗い出しを行った。次に、学園運営協議会において、学園側より原案を提示し、運営協議会委員から、目指す地域像や教育資源の情報、協力体制についてたくさんのアイディアをもらった。それらを整理し「郷土愛」「活性化」「高齢者福祉・防災」の系統が明らかになった。そして、子どもにつけさせたい資質・能力を発達段階に応じて整理した表を作成した。ここでは、特に子どもたちが地域のひと・もの・ことと協働的に関わりながら、自分たち自身が地域の課題解決の主体者となるとともに、地域の一員として自己の生き方について考えを深めることができるように留意した。さらに、学園学年部会において、次年度のカリキュラム編成として、小小は総合的な学習の時間を統一し、中学校では小学校の学びを基盤にカリキュラムの見直しと作成を行った。

## 3. 日の里学園運営協議会、地域学校協働活動組織（組織図）や構成メンバー

### （ア）組織図

日の里カリキュラム実施に向けての学園運営協議会内での組織体制・実働組織を作り、地域や学校で実施している子どもに関わる活動を「教育支援活動」「地域貢献活動」「協働活動」に整理した。そして、それぞれの活動が組織的、効率的に行えるように、運営協議会委員を選出するとともに、サポート部（地域学校協働体制）を編成した。また、学園運営協議会において、各サポート部から情報提供や活動報告をしてもらうことで、各部のPDCAサイクルが生まれるようにした。さらに、各校の連絡調整役として、CS推進担当を校務分掌上に新たに設けた。また、「日の里カリキュラム」の編成に伴い、令和2年度は共通目標の一部を変更し「地域を愛し、自分で考え自分で行動する子どもの育成」とすることが決まった。これを第1回学園運営協議会（令和2年6月）において、学園経営方針とサポート部について承認を得た。



#### (イ) 学園運営協議会の構成メンバー

No	区分	職名等
1	コミュニティ運営協議会	日の里地区コミュニティ運営協議会 会長
2	学識経験者	福岡教育大学教職大学院教授
3	コミュニティ運営協議会	日の里地区コミュニティ運営協議会 事務局
4	地域住民	子ども支援ネットワーク With Wind 代表
5	地域住民	地域学校協働活動推進員
6	地域住民	日の里東小学校区代表
7	地域住民	日の里西小学校区代表
8	地域住民	日の里東小学校 PTA 会長
9	地域住民	日の里西小学校 PTA 会長
10	行政機関の職員	日の里中学校 PTA 会長
11	対象学校の校長	日の里東小学校校長
12	対象学校の校長	日の里西小学校校長
13	対象学校の校長	日の里中学校校長
14	行政機関の職員	宗像市教育委員会子ども育成課参事
15	行政機関の職員	宗像市教育委員会教育政策課指導主事

(ウ) 日の里学園の学校運営協議会の年間計画

回	日時・場所	内 容	熟議の内容
第 1 回	5月18日(水) 18:30～ 日の里中学校	○学園運営協議会委員委嘱状授与、紹介  ○会長、副会長の承認、学園基本方針の説明、 部会組織の役割と年間計画協議	
第 2 回	6月8日(水) 15:00～ 日の里中学校	○授業訪問、感想交流  (日の里西小学校、日の里中学校)	学園の教育目標具 現化に向けて
第 3 回	9月30日(金) 18:30～ 日の里中学校	○学校評価アンケート(前期)報告及び委員に よる評価  ○学力及び生徒指導の状況について	前期取組の反省と 後期に向けて
第 4 回	11月9日(水) 15:00～ 日の里東小学校	○授業訪問、感想交流(日の里東小)	地域からの学園運 営に関する意見等
第 5 回	1月20日(金) 18:30～ 日の里中学校	○学校評価アンケート(後期)報告及び委員に よる評価	年間の取組の反省 と来年に向けて
第 6 回	3月3日(金) 18:30～ 日の里中学校	○学校評価アンケート(後期)報告及び委員に よる評価	年間の取組の反省 と来年に向けて

#### 4. 目標や課題解決に向けたカリキュラムの見直しや作成に向けて

第4回学園運営協議会（令和3年1月）において次年度の活動計画についての熟議を行い、「日の里学園サポーター」というボランティア団体の設立に向けての計画や、「日の里カリキュラム」の充実・改善に向けた話し合いを行った。

#### 5. 令和4年度に取り組んだ内容

##### （1）学園運営協議会の実際

（ア）第一回（5月18日）

学園運営協議会委員委嘱状授与と、委員の紹介を行ったのち、会長、副会長の承認、学園基本方針の説明、部会組織の役割と年間計画の協議を行った。さらに、学校・家庭・地域の近況報告と今後の計画について確認した。

（イ）第二回（6月8日）

日の里西小学校と日の里中学校において、委員による授業訪問と感想交流を行った。また、日の里学園の教育目標具現化に向けて、3つの部会で熟議を行った。

（ウ）第三回（9月30日）

学校評価アンケート（前期）報告及び委員による評価と、学力及び生徒指導の状況について報告し、共有した。前期取組の反省と後期に向けて、熟議を行った。

（エ）第四回（11月9日）

日の里東小学校において、委員による授業訪問と感想交流を行った。また、地域からの学園運営に関する意見や11月までの取組状況について、3つの部会で熟議を行った。

（オ）第五回（1月20日）予定

学校評価アンケート（後期）報告及び委員による評価を共有する。また、今年度の年間の取組の反省と、来年に向けての取組について、熟議を行う。

（カ）第六回（3月3日）予定

次年度学園基本方針の提案と、次年度の日の里カリキュラムについて報告を行う。今年度の総括と、次年度の取組に方向性を確認する。

##### （2）事例1（日の里東小学校・日の里西小学校3～6年生の地域学校協働活動の取組）

日の里学園の総合的な学習の時間は、「日の里カリキュラム」として、「地域活性」「福祉・防災」を2つの柱として、地域と協働する学習活動を設定している。小学校4年生までは、「地域を知る」ために、地域の方とたくさん触れ合い、地域の行事や活動、まちづくりを支える方々の思いや願いを学ぶことで、地域の「ひと」「こと」「もの」を知ることができた。子どもたちは地域の方にお世話になった体験を重ねることで、5年生以降の貢献意欲につながることができた。

小学校5・6年生では、「地域参画しながら地域貢献」を行うために、コミセンの各部会、まつり実行委員会、社会福祉協議会などの協力のもと、日の里まつりなどの日の里地区の活性化と、高齢者福祉を中心とした誰もが住みよいまちづくりに関わる学習に取り組んだ。子どもたちは、日の里のまちづくりの課題や高齢者を支える仕組みに気づくとともに、日の里地域活性化のために、自分たちにできることを考えることができた。（詳細は、第4章参照）

### （3）事例3（日の里中学校を中心とした地域学校協働活動の取組）

日の里中学校では、日の里カリキュラムに基づいて、各学年共に地域学校協働活動を行っている。日の里カリキュラムの中学校で取り組む柱としては「福祉・防災：高齢者学習と防災学習」と「地域活性：街づくりの学習」の2つに取り組んでいる。

#### （ア）7年生

7年生は小学校からの学習で、日の里の街は高齢化が課題であることを学んでいる。そこで中学校では誰もが住みやすい日の里にするために、中学生としては何ができるのかを考えた。まず、社会福祉協議会の方を授業に招き、認知症について、少子高齢化社会の現状について、シニアクラブ、福祉会、民生委員、社会福祉協議会など、高齢者を支える地域の仕組みや社会の制度について学ぶことができた。次に、高齢者の日々の生活の中での困り感などをシニアクラブの方々を中心に小グループで話し合い、どのようなことが高齢者を元気にするのかを学ぶことができた。さらに、地域の高齢者の方に、生徒が考えた取組（クリスマスツリーの設置、中学校の様子を知らせる掲示板の設置、交流会など）を提案し、多くの意見をもらった。現在、来年度に向けて、提案を実現するための手順や方法を考え始めている。



【写真1】社会福祉協議会による学習



【写真2】地域の高齢者と協議会

### (イ) 8年生

8年生では、「日の里バージョンアッププロジェクト」という街づくりに関わる学習がカリキュラムとなっている。8年生は、昨年の高齢者との交流の中で、日の里地区には坂道が多いことや様々な困りごとがあることを知った。そこで高齢者と顔が見える関係を築き、地域のために自分たちにできることは何かを考え、地域のために具体的に行動することを目指して学習を進めた。その中で、まず高齢者との協議会で地域の高齢者の困りごとを把握する、次に日の里の町探検で、日の里の魅力を発見したり、安全に生活するために危険箇所を把握したりする、そして、高齢者と顔が見える関係になるために、地域の公民館や集会場において「七夕絆交流会」を開催し、高齢者の方々と共に一緒にレクリエーションを行って、つながりを深める等の実践を行った。さらに、「誰もが住みよい日の里」にするために、3つのグループに分かれて、次の実践活動を進めた。

実践活動1のベンチ作りでは、坂道が多い日の里の地域の高齢者や住民が、買い物や散歩の途中で休憩するためのベンチを、地域の日の里48の方に協力してもらい、4班に分かれて作成した。設置の申し出があった地域や施設は、中学校横の坂の途中の住宅前、公園、公民館などの4か所であった。ベンチの完成後、コミセン会長をはじめ関係者を招いてベンチ贈呈式を行った。地域の人たちは予想以上のベンチの出来栄に驚き、創意工夫して立派なベンチを作った生徒達に、口々に感謝の言葉を述べた。

実践活動2の地図作りでは、日の里の地域の魅力やお薦めの店を紹介する「見どころマップ」やいつまでも住みよい日の里にするための「安全マップ」、さらには、いつでもどこでも見ることができる「日の里飲食店デジタルマ



【写真3】七夕絆交流会



【写真4】完成したベンチ



【写真5】ベンチ贈呈式



【写真6】作成したマップ

ップ」を作成した。地域を探検したり、地域の事業所を自分たちで訪ねたりする中で、生徒達も日の里の魅力を知るきっかけとなった。作成した地図は、訪問した事業者や日の里コミュニティセンター、CoCokara 日の里などに置いてもらった。

実践活動3のフリーマーケットでは、ベンチ作製の材料の資金作りとして、地域の皆様に余剰品や家庭に眠っている品物を提供してもらい、「あつまれ ひのたんマーケット」を開催した。地域に皆様から、事前に多くの品物を寄付してもらった。当日100名を超える来客があり、商品を購入してもらった。フリーマーケットの収益は、ベンチの作製材料等、地域のために活用した。「ベンチ作りの資金を集める」目的と併せて、「地域の方からいただいたものを地域の方にお返しし、地域を元気にする」という目的も達成することができた。生徒も地域の方々も笑顔で終えることができる活動となった。

また、7・8年生は地域の高齢者に向けて、暑中見舞い、敬老の日、年賀状で気持ちを込めて手作りのメッセージを送っている。丁寧な返信をもらうこともあり、中学生と地域の高齢者との交流ができている。

#### (ウ) 9年生

9年生では、「自分たちが考えた街を自分たちで守ろう」というコンセプトで、避難所に指定されている中学校で、地域との合同避難訓練を行うことにした。まず、災害や防災についての見識を深めるために、南三陸町で東日本大震災に被災された方とオンラインでつなぎ、日の里の地域の人たちと一緒に講演を聴いた。災害発生の実例の様子を見ながらの説明で、地域と連携した防災の必要性を理解することができた。

次に、合同避難訓練に向けて、3つのグループに分かれて準備を進めた。マップ班は、町の危険箇所を調べ、避難するのに最適なルートマップを作った。グッズ班は、災害時に宗像市が使用する備蓄倉庫を開け、どのようなものが避難所に必要なのかを確認した。また、簡易的にできる段ボール製の仕切りやスリッパ、椅子などの作り方を玄海少年自然の家の職員の方から学び、避難所の運営に必要な物品の準備を行った。避難所運営班は、避難者の対応の方法を考え、



【写真7】ひのたんマーケット



【写真8】地域と一緒に防災学習



【写真9】グッズ班の作製風景

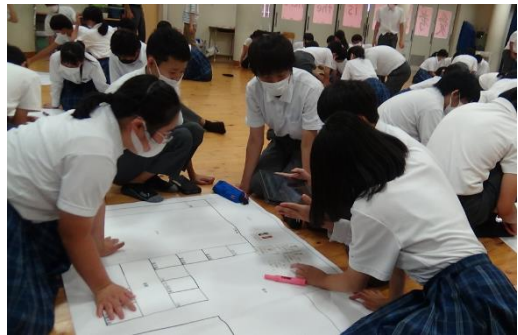
避難所の区画整理の計画、外国人の避難者への対応、けが人や要望への応え方などの準備を行った。

そして、避難所運営に向けたシミュレーションとして、HUG（避難所運営ゲーム）に全員で取り組んだ。カードを引きながら起こる様々な事態への対応を小グループで協議することで、事前の準備や計画の重要性と、次々に起こる事態への対応の難しさを知ることができた。

さらに、これまで準備してきた一連の学習の評価・価値付けや、さらに有意義な情報や取組を付加・修正するために、熊本地震の際に実際に避難所運営に関わった南阿蘇中学校を9年生全員で訪問し、防災についての交流会を行った。南阿蘇の中学生に、これまで日の里学園が取り組んできた防災学習の内容や避難所運営の計画を紹介し、本番に向けてのアドバイスをもらった。また、東海大学校舎や阿蘇大橋などの震災遺構も見学し、災害の生々しさを肌で感じることができ、見識を深めた。

9月10日（土）宗像市防災の日には、地域の協力を得、合同避難訓練を実施した。マップ班が、避難者役の地域の方をそれぞれの地区に迎えに行き、身体が不自由な方は中学生が支えになりながら、避難所である中学校体育館まで誘導した。避難所の中では、運営班を中心として、避難者の受付、名簿の作成、避難所内での誘導などの対応を行った。訓練中に余震が起き計画していたスペースが使用できないなど、生徒には事前に伝えていない状況も設定して、生徒達が状況に応じて臨機応変に対応せざるを得なくなるよう工夫した。また避難者役の地域の方に、実際の避難所運営で出そうな「暑すぎる。」「腰が痛いのでどうにかしてほしい。」

「家に帰りたい。」など無理な要望を言ってもらった。生徒たちはその場で自分達なりに対



【写真10】小グループでのHUG



【写真11】南阿蘇の中学生との交流



【写真12】見学した震災遺構



【写真13】防災訓練当日の受付の場面

応を考え、できる限りの対応をした。実際に平日の昼間に災害が発生した際は、地域に住む高校生や大人は地域にいない可能性が高い。そこで、「中学生が地域を先導するリーダーでなければならない」という意識をもたせたことが、生徒の意欲的な訓練につながった。



【写真 14】防災訓練の避難所の様子

## 6. 令和4年度における成果と課題

- （学園）社会に開かれた教育課程を目指す「日の里カリキュラム」の実施によって、地域の活性化などに学園が積極的に関与できている。同時に、ますます地域の情報が学園に届きやすくなり、「地域とともにある学校づくり」や「学校を核とした地域づくり」の好循環が生まれている。また、小中の系統を整えた「日の里カリキュラム」の実施により、児童生徒の学びの質の向上とともに、地域の人々の生きがいや学校との良好な関係を生むなど、小中一貫コミュニティ・スクールのさらなる充実を図ることができた。
- （教員）「日の里カリキュラム」の実施によって、総合的な学習の時間における授業改善が進み、また、教員の地域理解や学園内の連携が促進され、小中一貫コミュニティ・スクールの有効性を感じる教員が増えた。
- （学園運営協議会委員）「日の里カリキュラム」の実働に向けての熟議や、その実施報告などを通して、運営協議会の役割を自覚し、PTA や地域団体において共通目標を意識した活動を主体的に実行できている。
- （児童・生徒）学園の地域と協働した様々な取組によって、児童・生徒の「郷土愛」や「社会参画の意識」が引き続きはぐくまれている。

## 7. 令和5年度に向けて

- 学園の様々な取組を今後も継続的に実施し、より一層効果を上げていくために、担当者の打合せの効率化、取組や報告書等の精選が必要である。取組を増やしすぎず有意義な活動をより焦点化し、効果が薄いものはなくしていくなど、再構成を考えていく。
- 地域でのボランティア活動等、児童・生徒が活躍できる場を広げていく必要がある。
- 学園の教育活動を、地域や保護者へより発信していく必要がある。発信によって、さらに地域や保護者の協力を得て、小中一貫コミュニティ・スクールとしての取組の、好循環をより一層機能させていきたい。

# 城山学園の実践

## 1. 城山学園や地域の課題、学園としての方向性

宗像市は北九州市と福岡市の両政令指定都市の中間に位置し、北を除く 3 方向を山に囲まれ、玄界灘に大島、地島、沖ノ島、勝島を有しています。また、市の中心部には、水源でもある釣川が流れ、玄界灘に注いでいます。

市内を東西に横断する JR 鹿児島本線や国道 3 号線および国道 495 号線により二大都市への交通アクセスが充実し、住宅団地や大学、大型商業施設などが相次いで進出しました。これに伴い、急激な都市化が進み、生活環境や都市基盤が整備され、教育や文化、子育て支援などが充実しているため県内外から多くの人々が移り住み、人口も増加しています。人口減少時代に突入している現在においても、人口を維持し続けています。城山学園校区はその中心にあって、古くからの農村や新興住宅地、旧宿場町、大学を擁する学園都市という様々な特徴をもった町です。

このような環境にあって、城山学園の子どもについて以下のようなことが考えられます。

- 学習意欲があり友だちとの協働活動はできるが、自分の考えを持ち、友だちと議論することが苦手な子が多い。
- 4 校での共通行動目標「挨拶・掃除・時間を守る」に向けて取り組んでいるが、今後さらに人権意識を高め、ボランティア精神を涵養していく必要がある。
- 学習の目標を設定したり、学習の振り返り活動を行ったりして「わかる」「できる」授業づくりを推進しているが、さらに「自尊感情の高揚」や「コミュニケーション能力の育成」を図っていく必要がある。

そこで、まず、学園共通の教育目標を「郷土を愛し、地域や社会に参画・貢献する児童・生徒の育成」と設定しました。また、目標達成のために本年度の目標を「地域や社会とのつながりを意識し、主体的に関わる児童・生徒の育成」と決めて実践していくことにしました。

そしてさらに、令和 5 年度、令和 6 年度の目標へと発展させていきます。

令和 4 年度 郷土を愛し、地域や社会に参画・貢献する児童・生徒の育成

令和 5 年度 地域や社会に愛着と誇りをもち、自分なりに参画・貢献する児童・生徒の育成

令和 6 年度 地域や社会の課題を意識し、その解決に向けて参画・貢献する児童・生徒の育成

## 2. 城山学園の特徴

城山学園は、吉武小学校、赤間小学校、赤間西小学校、城山中学校の三つの小学校と一つの中学校からなります。

吉武小学校は、宗像の一番東に位置し、岡垣町や鞍手町と隣接する吉武地区に位置します。令和4年度は6学級、児童数175人。周りは自然が豊かで、教室の窓からは広々とした田畑や新立山・戸田山が望める静かで落ち着いた環境です。校区内には、武丸正助さんの廟がある「正助

ふるさと村」や「グローバルアリーナ」があり、体験施設として広く利用されています。

赤間小学校は、明治7年開校の歴史のある小学校で、開校当時の児童数は87名でした。令和4年度は、24学級、888名の児童が在籍するマンモス校となっています。校区内には、唐津街道赤間宿の面影を残す建物や歴史的資料が数多くあり、子どもたちにとって総合的な学習の時間の大切な教材となっています。子ども、教師、保護者にとって地域の「学び」の場としての学校をめざし、様々な特色ある教育活動を行っています。

赤間西小学校は宗像市の交通の要所である赤間駅の最寄りの地域で、赤間駅周辺に広がるベッドタウンの中に昭和60年に河東小と赤間小が分離併合して開校しました。住宅街の拡大に伴い平成元年普通教室6棟・特別教室4棟、平成5年普通教室2棟が増築されました。平成6年には学級数25、児童数896人のマンモス校になり、開校10周年記念式典が行われました。平成9年宗像区福祉教育研究発表会、平成16年開校20周年記念式典、地域子ども教室「あかに子クラブ」開講、平成24年城山中学校区小中一貫教育研究発表会、平成26年に開校30周年を迎えました。現在は学級数15、児童数474名の中規模校です。

城山中学校は昭和22年4月22日赤間町・吉武村学校組合東部学校として開校し、昭和24年校名を城山中学校に改名しました。昭和56年本校より自由ヶ丘中学校が分離し、平成30年に宗像市教育委員会第2期小中一貫教育研究発表会を実施しました。校舎は宗像市の東部、唐津街道赤間宿の近隣に位置します。吉武小・赤間小・赤間西小の3つの小学校の校区から生徒が通学しており、生徒の気質も少しずつ違います。学業成績ばかりでなく体育会や文化祭などの行事においてもブロック形式で互いに競い合い、結束して盛り上がる伝統ができています。また、部活動においても多くの生徒が熱心に取り組み、好成績を残しています。

### 城山学園小中一貫コミュニティ・スクール

吉武小学校



赤間西小学校



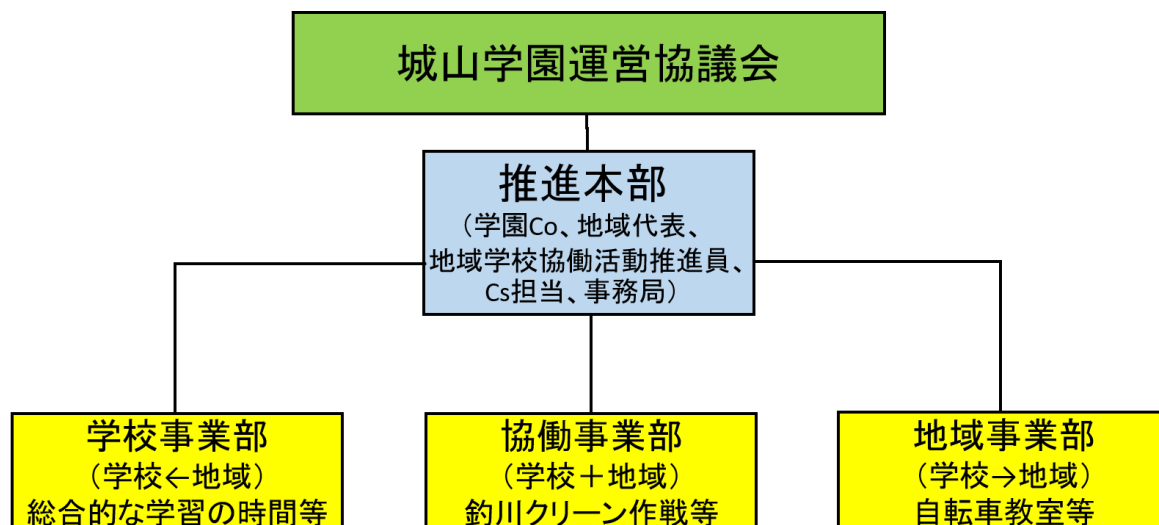
城山中学校



赤間小学校

### 3. 城山学園運営協議会、地域学校共同活動の組織（組織図）や構成メンバー

#### ■組織図



#### ■学園運営協議会の構成メンバー

No	区分	職名等
1	コミュニティ運営協議会	赤間地区コミュニティ運営協議会
2	コミュニティ運営協議会	赤間地区コミュニティ運営協議会
3	コミュニティ運営協議会	赤間地区コミュニティ運営協議会
4	コミュニティ運営協議会	赤間西地区コミュニティ運営協議会
5	コミュニティ運営協議会	赤間西地区コミュニティ運営協議会
6	コミュニティ運営協議会	吉武地区コミュニティ運営協議会
7	コミュニティ運営協議会	吉武地区コミュニティ運営協議会
8	地域住民	赤間小学校 PTA 会長
9	地域住民	赤間西小学校 PTA 会長
10	地域住民	吉武小学校 PTA 会長
11	地域住民	城山中学校 PTA 会長
12	対象学校の校長	事務局校長
13	対象学校の校長	次回事務局校長
14	地域代表	福岡教育大学教授 元PTA会長
15	学識経験者	福岡教育大学 教職大学院 特任教授
16	学識経験者	福岡教育大学 大学院教育学研究科 教授
17	行政機関の職員	宗像市役所 子ども育成課

## 4. 城山学園の学園運営協議会の年間計画

回	日時・場所	内 容	熟 議 の 内 容
1 回	6月1日（水） 城山中学校	○説明・協議 ○熟議	城山学園の学園経営についての説明・承認及び 本年度のめざす子ども像について  【熟議】子ども大学の内容と各校具体的取組
2 回	10月12日（水） 城山中学校	○説明・協議 ○熟議	城山学園児童生徒の実態及び学校関係者評価
3 回	1月25日（水） 城山中学校	○説明・協議 ○熟議	城山学園の児童・生徒の実態について  【熟議】今後の連携部会の具体的取組について
4 回	3月8日（水） 城山中学校	○説明・協議 ○熟議	アンケートの結果をふまえた学校関係者評価  【熟議】取組の成果と課題、次年度の取組

## 5. 目標や課題解決に向けたカリキュラムの見直しや作成に向けて

### (1) 城山学園教育目標及び目指す児童生徒像について

城山学園教育目標は、段階的に設定した年次目標の達成を目指す中で、「郷土を愛し、地域や社会に参画・貢献する子ども」を育成することです。（資料1）今年度は、地域と共にある学校づくりを効果的に進めていくために、学園教育目標や目指す児童生徒像（資料2）の共有を図りつつ、具体的な教育課程（城山学園カリキュラム）を編成していくことを小中一貫CSの取組の柱としました。

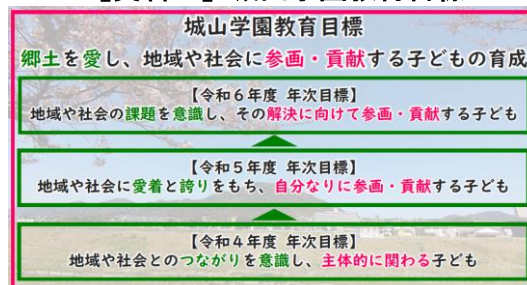
### (2) 城山学園カリキュラムの見直し

#### ア Jドリーム学習の見直し

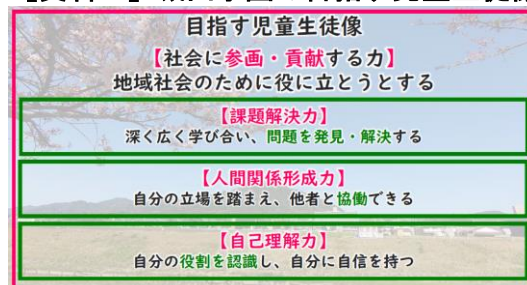
Jドリーム学習とは、「わかった・できた」ことを生かし、社会に参画・貢献する態度を育てるために、地域の教育資源を活用し

て、生活科・総合的な学習の時間を中心に、道徳の時間や学級活動と関連させた城山学園独自の総合単元的な学習のことです。宗像市の小中一貫教育の取組に合わせ、城山学園で一体

#### 【資料1】城山学園教育目標



#### 【資料2】城山学園の目指す児童生徒像



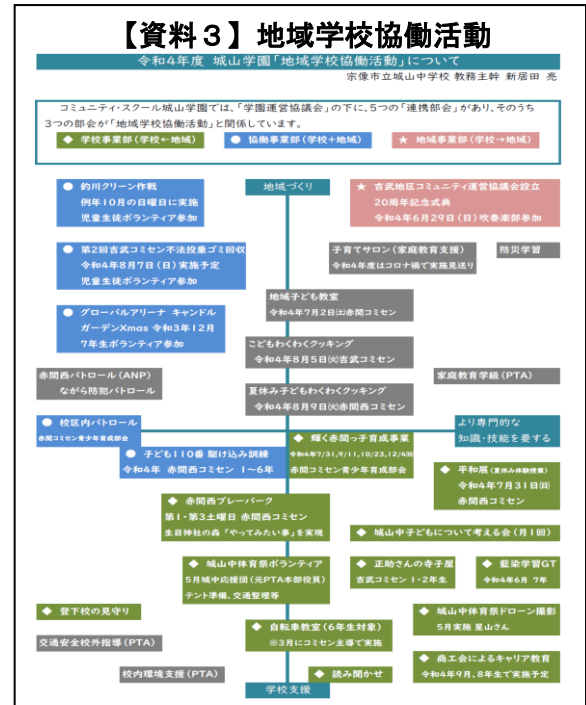
的に推進してきました。令和3年度末の城山学園主幹教諭部会で、これまでの取組を整理し、再構築していくことを確認しました。

## イ Jドリーム学習と地域学校協働活動との関連付け

令和4年度の主幹教諭部会では、これまでに実践してきた地域学校協働活動を、「学校←地域」「学校+地域」「学校→地域」に分類して整理し、(資料3) Jドリーム学習との関連を探りました。今年度中に、新たな城山学園カリキュラムが完成する予定です。

## 6. 令和4年度に取り組んだ内容

### (1) 事例1 世代間交流「春物語」(赤間西小を中心とした地域学校協働活動)



様々な世代の皆さんが赤間西小学校に集合して、それぞれの通学路のゴミ拾いをしながら赤間西コメンまで行きました。そして、地域の方々に植え方を習いながら花壇に花苗を植えました。(6月4日(土) 世代間交流「春物語」)

### (2) 事例2 「正助さんの寺子屋」(吉武小を中心とした地域学校協働活動)



吉武コミセンでは、今年は「正助さんの寺子屋」が開催されています。吉武小学校1・2年生43名が参加しました。子どもたちは、真剣な表情で学習に取り組んでいました。お世話や指導は、「正助さんの寺子屋」のボランティアさんと学童の先生方です。

### （3）事例3「輝く赤間っ子育成事業」（赤間小を中心とした地域学校協働活動）

赤間コミセンでは、「赤間地区を愛し、地域から愛される子どもの育成」をめざして、輝く赤間っ子育成事業を行っています。12月の街道の駅「赤馬館」周年祭にあわせて、赤間宿通りでクイズウォークラリーを行いました。

#### ① 7月31日（日）「楽しく学ぼう。赤間宿ってどんなところ。」

○内容 赤間宿についての学習…プレゼンによる学習 ○×クイズ



※子どもたちが自ら赤間宿のことを学習し、実際に赤間宿を歩き、ポイントやクイズを作り、当日は、クイズのポイント設営、受付、景品渡しと主体的に活動していきました。一連の活動を通して、赤間宿の良さを発見し、赤間宿への愛着を感じ取り、赤間宿を守っていこうとする意欲が育まれました。

#### ② 9月11日（日）「赤間宿街歩き」（赤間コミセン主催の取組）



輝く赤間っ子育成事業の「赤間宿街歩き」が開催されました。コミセンに集合して、17名が3つのグループに分かれて「赤間宿街歩き」をしました。案内と説明は、赤間宿ボランティアガイドの方にいただきました。

日ごろは、開いていない「枳屋」（お菓子問屋）や勝屋酒造の奥まで見学することができました。事前学習で勉強した「うなぎの寝床」や「兜づくりの家」などを実際に見ることができて大変勉強になりました。コミセンに帰って、クイズのポイント決め、チラシやポスターづくりなどをしました。大変暑かったけど楽しい1日でした。

③ 10月23日（日）「クイズやちらしを作ろう」

ウォークラリー本番に向けて、8つのポイントとクイズを作成しました。

④ 12月4日（日）「ウォークラリー本番」

（4）事例4「子ども110番の家駆け込み訓練」（赤間西小を中心とした地域学校協働活動）

赤間西コミセンと赤間西小学校が協働して、「子ども110番の家駆け込み訓練」をしました。参加者は、赤間西小学校児童、教師、「子ども110番の家」の協力者、宗像署、赤間西コミセンのスタッフ、ボランティアスタッフです。

まず、赤間西小学校 羽田野校長より訓練の趣旨についてお話をいただきました。次に、ボランティアスタッフによる模擬実演をしました。それは、「不審者からしつこく絡まれるが、振りほどいて子ども110番の家に駆け込む」というものです。子ども役の人が大声で「助けて」と勇気をふり絞って叫んで110番の家に駆け込みました。「子ども110番の家」の協力者も演技に加わり、「子ども110番の家」対応マニュアルに沿って対応や聞き取りをしました。その後、児童の代表者が駆け込み訓練をしました。子どもたちにとってもとても貴重な体験となりました。

不審者に誘われているところ



（5）事例5「不法投棄物回収事業」（吉武コミセン主催の地域学校協働活動）

令和4年8月7日7:00～9:00 吉武校区内（安の倉、宮の尾）

吉武小校区では、ここ数年、川や山への廃棄物の不法投棄に悩まされています。この問題の解決に向けて吉武コミセンが「不法投棄物回収事業」を実施していました。本年度は、吉武コミセンと新しく城山中学校（生徒会）がタイアップして取り組みました。城山中学校では、全校生徒に呼びかけをし、参加生徒を募りました。城山中学校生徒会役員他10名の中学生と吉武コミセン関係者50名の計60名が車に分乗し、現地に行きました。徒歩で峠沿いの道路を歩いて投棄物を回収して回りました。



## 〈生徒の感想文〉

私たち（城山中学校生徒会）は、吉武コミセン主催の「不法投棄物回収事業」（第2回）に参加しました。吉武コミセン前の駐車場に集合して、黄色いベストとゴミ袋をもらいました。大人の人も50人ぐらいおられました。私たちは、安の倉の峠の所に行きました。役員さんから「車に気を付けてね。」と言われました。作業をしていると「車を止めてここにゴミを捨てているんだよ。」という話も聞きました。朝早くで大変だと思っていたけど、ゴミを見つけるたびに「あった。」と楽しくなりました。ゴミは、弁当のからや空き缶、たばこの吸い殻が多かったです。作業が終わって、役員さんに「よく頑張ったね。」とほめられたのでうれしかったです。でも、とても大変だったので、私たちに何かできないか、生徒会で話し合っていきたいです。

### （6）事例6「城山中学校生徒会挨拶運動」（城山学園小中連携活動）

生徒会役員が8月31日に各小学校に行き、小学校の先生方や児童たちと挨拶運動を行い、交流を深めました。

※生徒は、直接、出身の小学校に行き、挨拶運動を行い、その後、中学校へ登校しました。顔見知りの中学生なので、温かい雰囲気の中も礼儀正しい挨拶ができていました。



### （7）事例7「セカンドスクール」（城山学園全小学校5年生の小小連携活動）

城山学園では、赤間小学校、赤間西小学校、吉武小学校の5年生が合同でキャンプを行うセカンドスクールを実施しています。

1 日時 令和4年9月21日～22日

2 会場 グローバルアリーナ



#### 【セカンドスクールのめあて】

- けじめをつけて行動しよう。
- 友だちと助け合い、仲を深めよう。
- 礼儀、自立、責任を自分から。

セカンドスクールは、公共の場所であることを常に意識して、きまりを守ってみんなが気持ちよく過ごすことができるような態度を育成する体験学習です。

## 7. 令和4年度における成果と課題

### （1）成果

- 城山学園運営協議会を中核として、城山学園の目標や方針について、各学校、各コミュニティ運営協議会が共通理解することができた。
- 各コミュニティ運営協議会を中心に、各小学校と地域が協働していく体制作りができつ

つある。また、中学生を取り込んだ地域学校協働活動が少しずつ定着してきた。

- 校内においては、CS 担当者を校務分掌に位置づけ、コミュニティ運営協議会や地域と連携していく体制を築くことができた。
- 各コミュニティ運営協議会では、地域学校協働活動推進員を選出し、学校と地域の協働活動を推進していくことができた。また、地域学校協働活動推進員の代表が城山学園運営協議会の委員となり、目標や方針を各推進委員と共有することができるようになった。
- 地域においては、J 通信やコミュニティだより、学校通信や学年・学級通信等を通して、CS を推進しようとする気運が高まってきている。

## (2) 課題

- 地域学校協働活動をさらに推進していくために、各コミュニティ運営協議会と各学校との情報交換会を定期的で開催して、年間計画と地域学校協働活動についての熟議をしていくことが課題である。
- CS を効果的に推進していくためには、学園コーディネーターと各コミュニティ運営協議会の地域学校協働活動推進員との定期的な会議を設定していくことが必要である。
- 城山学園での CS 推進についての共通理解を図るために、城山学園内の CS 担当者会を定期的で開催していくことが必要である。
- J ドリーム学習を見直し、生活科、総合、地域行事を含む系統的な城山カリキュラムを早急に作成していくことが急務である。
- 城山学園の CS 推進のために、城山学園サポーター制度を導入してことが今後の課題である。

## 8. 令和5年度に向けて

- (1) 本年度の城山学園教育指導計画書を各学校ごとにカリキュラムを見直し、学校順に朱書きしていく。城山中学校→吉武小学校→赤間西小学校→赤間小学校 最後に事務局校（城山中学校）が入力して令和5年度のエグゼクティブ計画書を作成していく。
- (2) 城山学園と各コミュニティ運営協議会の結びつきをさらに密にするために、各学校と各コミュニティ運営協議会との合同会議を学期に1回設定する。
- (3) 校内のCS推進を図るために、校内CS担当者を中核とするCS推進会議を設定する。
- (4) 城山学園サポーター制度を導入するために、各学校においてGTや協力者の人材バンクを作成する。
- (5) 各コミセンの地域学校協働活動推進員と各学校、コーディネーターとの合同会議を開催し、さらに、城山学園推進本部会議へと発展させていく。

# 中央学園の実践

## 1. 宗像の郷「中央学園」の特長

本学園児童生徒の課題は、自尊感情が低く、「自分は、がんばればできる」「友達と協力すれば乗り越えられる」という自主・自律、自他尊重の心が十分育っていないところにあります。これを踏まえ、学校が地域・家庭と協働する中で、共に豊かな心の育成を図っていけば、個々の成長と学力や体力の向上、さらに不登校等、学校に適應できない児童生徒の減少につながると考えます。

### 学園教育目標

目標をもち、自ら考え行動し、ねばり強くやり通す、心豊かで健康な子どもの育成

### 重点目標(R2~R4)

心豊かな児童生徒の育成(自主・自律、自他尊重の心の育成)

- 進んで表現し、活動する子ども
- 自他を大切にする子ども

【評価方法】

※年1回12月

質問紙で実施

平成 30 年度より、自主的で自律する心、自他を大切にする心、ふるさとを愛する心、働くことや奉仕することにやりがいを感じる心の4つの心の育成に取り組んできました。これらの心を地域・家庭と目標を共有するために、学園運営協議会の議論を基に、保護者・地域役員・教師を対象にしたアンケート調査を行い、学園の重点として、「自主・自律」と「自他尊重」の心の育成を目指すようにしました。そして、子どもにかかわる地域・家庭・学校の大人たちが、同じ視点で子どもの育成をしていくためのわかりやすい言葉にしたスローガンを右のように決めました。

スローガン

『進んで みんなで 最後まで』

## 2. 宗像の郷「中央学園」の特徴（コミュニティ・スクール）

(1) 学校をまたぐボランティア組織「サポート本部」

(2) 学園運営協議会で育まれた地域学校連携事業

- ・自転車交通安全教室
- ・むなかた子ども大学【令和4年度より】
- ・合同あいさつ運動【令和4年度より】

(3) 3校PTAによる合同事業

- ・ナイトウォーキング
- ・おうち de チャレンジ

## 3. 宗像の郷「中央学園」の特徴（小中一貫教育）

(1) 小中交流

4月…小中交流遠足(宗像ユリックスで両小学校の5年生が交流)

9月…校区愛着活動(台風11号接近のため、臨時休校)

11月…「むなかた子ども大学(文化祭)」【令和4年度より】  
中学生のボランティア参加

12月…合同あいさつ運動【令和4年度より】

2月…自転車交通安全教室【両コミュニティセンター主催】

## (2) 小小交流

7月…宗像高等学校での夏休み補充学習会

9月…5年生セカンドスクール(グローバルアリーナ)



2回の事前交流会の様子

両小学校の5年生が『セカンドスクール(宿泊学習)』を行いました。合同グループで過ごす1

泊2日。この取組を実施するにあたり、両小学校の関係者が7月より3回の実行委員会を行い、目的や活動内容を確認しました。また、両小学校の5年生が事前に交流する時間を設定し、会うたびに仲が深まる様子が見られました。



GOGO キャラバン (11 km)

12月…6年生修学旅行(場所:長崎県長崎市)【令和4年度より】

修学旅行の1日目を両小学校の6年生が一緒に行動しました。混合のグループでフィールドワークを行ったのです。この実現のために、両小学校の関係者が



オンライン打合せ



平和学習のフィールドワーク

7月より2回の実行委員会を行いました。そして、両小学校の6年生も事前の学習や実行委員会をオンラインで行い、セカンドスクールで培った絆をさらに深めました。

## (3) 職員交流

1・3学期…兼務授業

小中一貫教育の一環として、1学期は両小学校の教員が中央中学校にてT2で授業に関わりました。3学期は中央中学校の教員が両小学校で体育の授業を行いました。



兼務による体育の授業

4月…合同研修会

12日の午後に三校の職員が集まって、合同職員会議や合同分掌部会を実施して今年度の学園目標や取組について情報を共有しました。



夏季合同研修会の様子

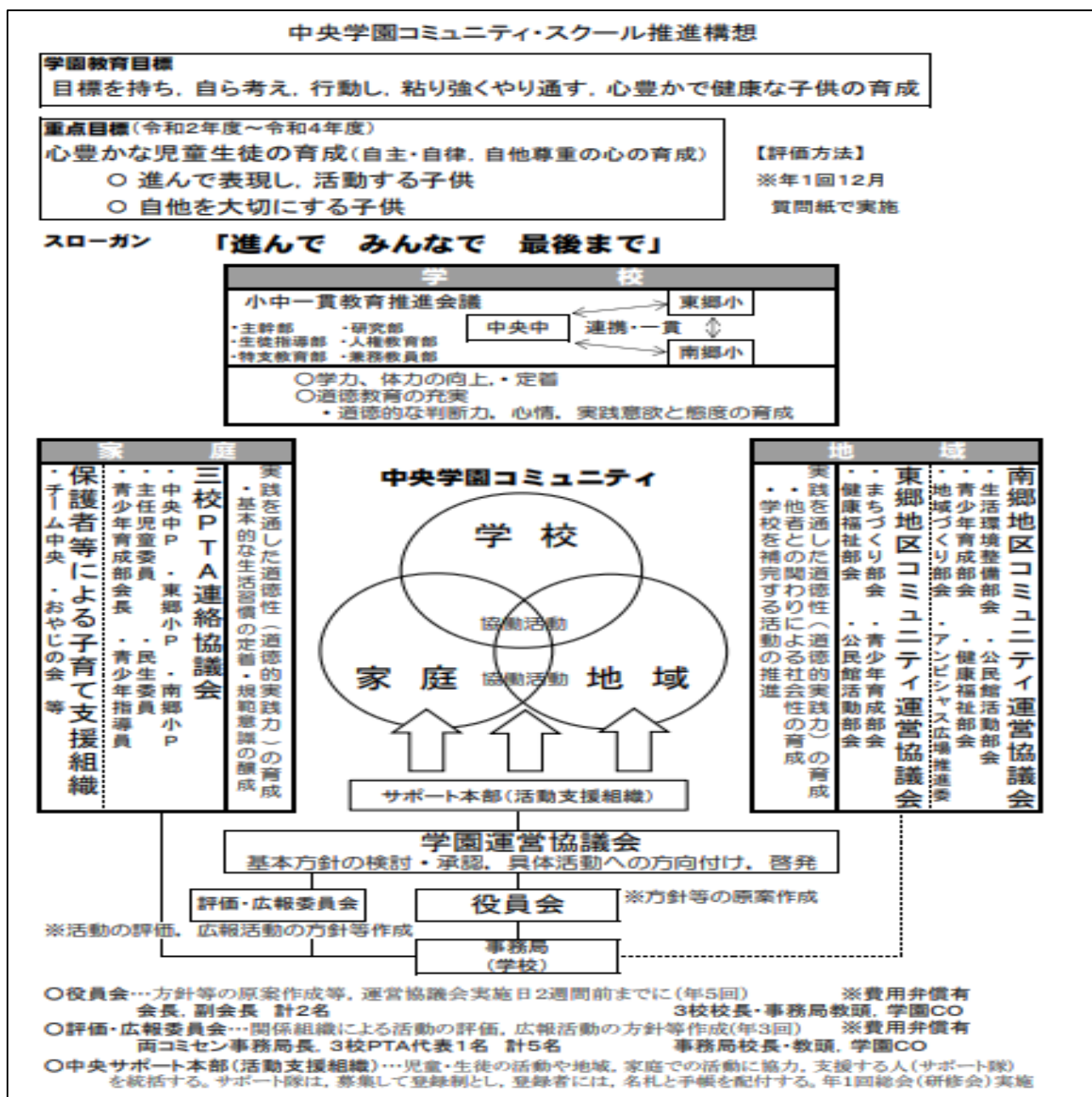
6月…合同授業研修会(小学校)

8月…夏季合同研修会

11月…合同授業研修会(中学校)

11月…人権・同和教育実践レポート交流会

#### 4. 宗像の郷「中央学園」の学園運営協議会、地域学校協働活動の組織



#### 5. 目標や課題解決に向けたカリキュラムの見直しや作成 【東郷小学校の取組】



『山笠学習』のカリキュラムづくり

9年間を見据えた「総合的な学習の時間」のカリキュラム(指導計画)づくりのために、昨年度末から研修を行いました。3月1日に指導主事を招聘し、各学年の総合的な学習の時間のカリキュラムについて、次年度1学期の「ふるさと学習」の系統性を見直し、付加修正を行いました。「ふるさと学習」の一つである『山笠学習』は、これまで高学年中心の学習であったため、4月19日に山

笠振興会の方を招聘し、一度途絶えた山笠を復活させた思いや子どもたちが参加することの意味など全職員で共通理解を図りました。8月1日の一般研修で3～6年生は、1学期行った『山笠学習』について振り返り、2学期に継続して行う内容について近接学年で考えたり、1・2年生は2学期に初めて行う『山笠学習』についてお互いに交流したりしながら計画を立てました。

### 【南郷小学校の取組】

「ふるさと学習」のカリキュラムづくりのために、夏季研修を行いました。一つは、1～6年生のふるさと学習を構想する機会を設けました。学習内容は上のようなシートに整理しました。このとき「課題設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」という課題解決の過程を意識するようにしました。このような単元構想を作成するとともに、夏休みに「南郷の魅力発見フィールドワーク」として許斐山登山と唐津街道巡りをしました。それぞれの素材の魅力を実感しただけでなく、ルート安全性や所要時間を確認することもできました。この経験を生かしながら具体的な学習計画を構想することができました。

### 【夏季合同研修会】

本研修では、「ふるさと学習」における探究的な学習の過程について理解を深めるとともに、各校の1・2学期のふるさと学習について情報共有することを通して、小小のつながりや小中のつながりを意識したカリキュラムづくりに取り組むことをねらいとしました。そのねらいを達成するために、研修会を2部構成にしました。

1ー①…9年間を見通した総合的な学習の時間の授業づくりについて

1ー②…講話を受けて、前期部会、中後期部会ごとに9年間の縦の系統性を視点にすえてのワークショップ

2…「探究的に学ぶ」総合的な学習の時間の授業づくりについて、各学年で1学期と2学期の実践をブラッシュアップする時間

1ー①について、指導主事からの「目標がそろってさえいれば、教材は同じでなくてもよい」という指導を受けて、各学年部会では中央学園ふるさと学習単元一覧表に実践カードを貼りながら、どのような力を身につけるかを理解し合いました。2では、「子どもたちがどのような課題を設定し、その課題を解決するために、どのような学習活動を仕組んでいくか」を意識しながら担当学年の実践をブラッシュアップしていききました。

2年生

単元名	とびだせ原町たんけんたい
実施時期	5～7月
地域のひと・もの・ことGTはどれ？協力頂いた施設は？	GLY（花屋）、時安建具店、そばや たからい、肉屋 マルヒチ商店、須藤電気店、古美術 薬市薬座
単元の実際児童の活動と様子（写真の活用OK）	<p>①自分たちの生活の身近にある原町を探索し、身近にあるけど知らない店のこと、原町のことについて。（原町とほかの地域の街並みを比較して、原町特有の町の雰囲気や情景に気付く。）</p> <p>②実際に原町にある店を訪問し、店内の見学、体験をしてみよう！と知りた、もっと聞きたいことをまとめ、2度目の訪問でインタビューをして情報を集める。</p> <p>③集めた情報の中から自分が特に「すごい！」「すてき！」と思ったことをピックアップする。</p> <p>④「自分が訪問した原町の店ってすごいんだ」「原町ってすてきな町だな」と思ったことをまとめ、2年生だけではなく学校や地域の人、周りの人に知ってもらいたい、伝えたいという思いから2学期の子ども大学やその準備へつなげる。</p>

研修会で活用したシート



「魅力発見フィールドワーク」



前期部のブラッシュアップの様子

## 6. 学園運営協議会から生まれた取組

### (1) 3校PTA 事業より「ナイトウォーク」

「進んで みんなで さいごまで」頑張る児童生徒の姿を目指して、昨年度から計画を進めてきた「ナイトウォーク」が今年度ようやく実施できました。宗像大社から福岡県立少年自然の家「玄海の家」まで歩き、楽しみにしていたキャンプファイヤー。火を囲みながらレクリエーションを楽しみ、いよいよ帰りは懐中電灯を片手にナイトウォーク。3校の大人も子どもも親睦を深めました。



楽しかったナイトウォーク

### (2) 「中央学園」サポート隊

中央学園「サポート隊」は、学園運営協議会の組織として令和3年に設立し、学校・PTA・各種団体・ボランティア等の関係者で構成されています。個人会員の方は60数名、賛助会員(団体)は22団体におよびます。サポート隊の活動目的は、学園の子どもたちの健全な育成を目指して地域・家庭・学校が連携・協働した総掛かりの支援を充実させることです。「東郷小おやじの会」「チーム中央」「南郷アンビシャス広場」等の団体とも連携しています。



募集のチラシ

令和4年5月28日(土)に中央中学校の図書室にて設立総会を開催しました。総会ではまず第1部として、事務局長がこれまでのサポート隊の活動をプレゼンで振り返りつつ、サポート隊の意義と目的について説明しました。次に、会長の挨拶に続き、来賓の方たちより



設立総会の様子



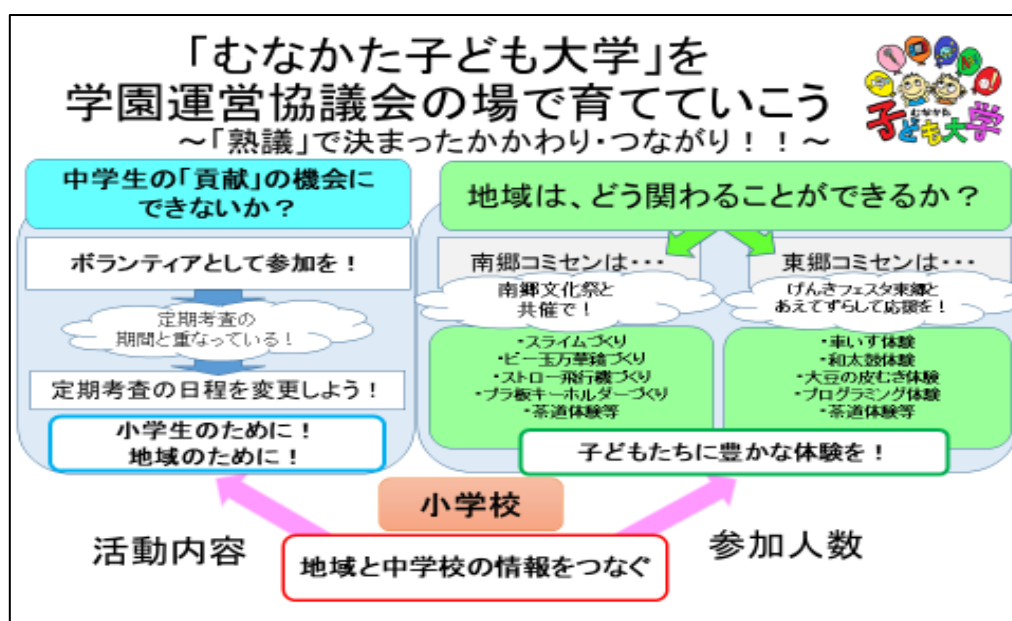
サポート隊の家庭科学習支援

りご挨拶をいただきました。最後に、これまでの活動報告・決算監査報告・今年度活動計画(案)、今年度予算(案)等が審議され可決され無事に総会を終えました。その後、第2部としてサポーターリーダーの講師より「子どもたちとのかかわり方」についての講話があり、学び合いました。総会・研修会を通して、「できる人が できるときに できるだけ」をモットーに活動することを改めて確認しました。

### (3) むなかた子ども大学

12日(土)「むなかた子ども大学」では地域・家庭・学校のそれぞれにとって有益な取組

となりました。学園運営協議会を通して、以下のような話し合いが進んだからです。



「むなかた子ども大学」中学生ボランティアの様子



お互いの立場で達成感を味わうことができ、改めて熟議の大切さを実感できました。

- ・中学生ボランティアが東郷・南郷で 74 名活躍できた。（人手不足の解消）
- ・地域で貢献できてよかった。（中学生の達成感）
- ・保護者が地域行事に参加し、活気づいた。（地域の活性化）
- ・PTA と地域のふれ合いの場になった。（大人のつながり）（親子のふれあい）
- ・子ども達にとって豊かな体験ができ、楽しい思い出ができた。（喜びと感謝）

#### （４） 合同あいさつ運動

スローガンの「進んであいさつができる子どもを育てるにはどうすればよいか」について熟議を重ねてきました。その中で次のような工夫が生まれました。

##### 【学校】

- ・子ども達が主体的に取り組めるよう、生徒会・児童会を中心に企画・発信
- ・チラシを作成し、地域に依頼

##### 【地域(コミセン)】

- ・子ども達の依頼を受けて取り組む
- ・広報紙・チラシの回覧による周知
- ・不審者と勘違いされないように、参加者にビブスを貸出

こうして、12月6日(火)と13日(火)の朝7時50分から地域と保護者、サポート隊の方々と協力して、中央学園あいさつ運動を行いました。短い時間でしたが、元気な声が飛び交う爽やかな1日の始まりになりました。

## 6. 令和4年度における成果と課題

### 【成果】

#### (1) サポート隊の実績（12月時点で49件、延べ人数187名）

体力テストの補助やタブレット入力、家庭科の裁縫の支援など、教師一人だけでは、十



中央学園合同あいさつ運動の様子

分に指導することが難しい内容をサポートしていただきました。また、子ども大学におけるジュニアサポーターの活躍は、今後の地域貢献活動への大きな一歩となりました。

#### (2) 合同あいさつ運動

実施後の感想では、中学生は、

- ・「立ち止まって深々とお辞儀をしてくれる礼儀正しい子がたくさんいてうれしくなりました。」
- ・「地域の方々とふれあい、中央中学校から社会をより良くできたと思いました。」

小学生は、

- ・「中学生や地域の人が立っていると少し緊張している人もいたけど、あいさつしない人はいなかったです。」
- ・「中学生と地域の人と協力するとあいさつがとても良くなったと思います。」

等の感想を振り返りに記入していました。地域の方にとってもあいさつ運動に参加することで、「やりがいになった」「元気が出た」とたいへん好評でした。

#### (3) 両コミュニティで深まる絆

学園運営協議会を設立して4年目。これまで合同事業や熟議を重ねてきました。ある回で、コロナ禍での行事の実施について悩みを出し合いました。学識経験者の「福岡県の行動指針が拠り所となる」という助言もあり、南郷は内容を変更しながらも夏のイベントを盛大に開催することができ、次の熟議ではお互いの成功を喜び合いました。こうして「実施の可否の議論から、どうすればできるかに発想を変えていこう」という考えが広がっていきました。新たに「東郷・南郷親善交流囲碁大会」も生まれる等、熟議を通して、地域同士の関係性も深めることができます。

### 【課題】（次年度の方角性）

- スローガン「進んで みんなで 最後まで」の周知（地域・家庭）
- 学園教育目標達成のためのグランドデザイン（地域・家庭・学校の役割分担の明確化）を作成開始
- 学園研究部と連携した系統性のある中央学園版「ふるさと学習」のカリキュラ

# 玄海学園の実践

## 1. 玄海学園や地域の課題、学園としての方向性

本学園は、玄海小学校、玄海東小学校、地島小学校、玄海中学校の3小1中学校から成り立っています。小学校・中学校ともに単学級又は複式学級ということも特徴です。

校区内には、玄海地区、池野地区、岬地区の3つのコミュニティ運営協議会があります。どのコミュニティ運営協議会も、子供たちを見守り、育てたいという思いが強く、夏祭りや文化祭などのイベントを多数企画し、子供もこれに多数参加し、地域活動が盛んです。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の流行により、地域行事が自粛され、子供たちが地域と関わる機会が少なくなり、地域への愛着を深めるような活動も減少しました。

コロナ禍ではありますが、アフターコロナを見据え、玄海学園運営協議会では、学校・家庭・地域の三者が一体となり、児童生徒や保護者アンケートの結果から学園の子供たちの実態と課題を共有し、熟議を重ねていく中で目指す子供像・家庭像・地域像を設定しました。令和5年度は、この目指す子供像・家庭像・地域像の具現化に向け、小中一貫コミュニティ・スクールを推進していきます。

### 玄海学園 教育目標

### 社会の一員として よりよく生きる 子供の育成

「社会の一員としてよりよく生きる」とは、身のまわりの事柄を自分のこととしてとらえ主体的に人・もの・ことに関わる姿と捉えます。子供たちは、同年齢や幅広い年齢層の人々と触れ合い人間関係を構築したり、地域行事や伝統文化、地域保全活動等にかかわり知恵や生き方を学んだりします。これらのことを通して、ふるさと玄海を心のよりどころとし、自分の役割や責任を自覚し、将来を切り拓いていくことを目指します。

## 2. 学園の特徴

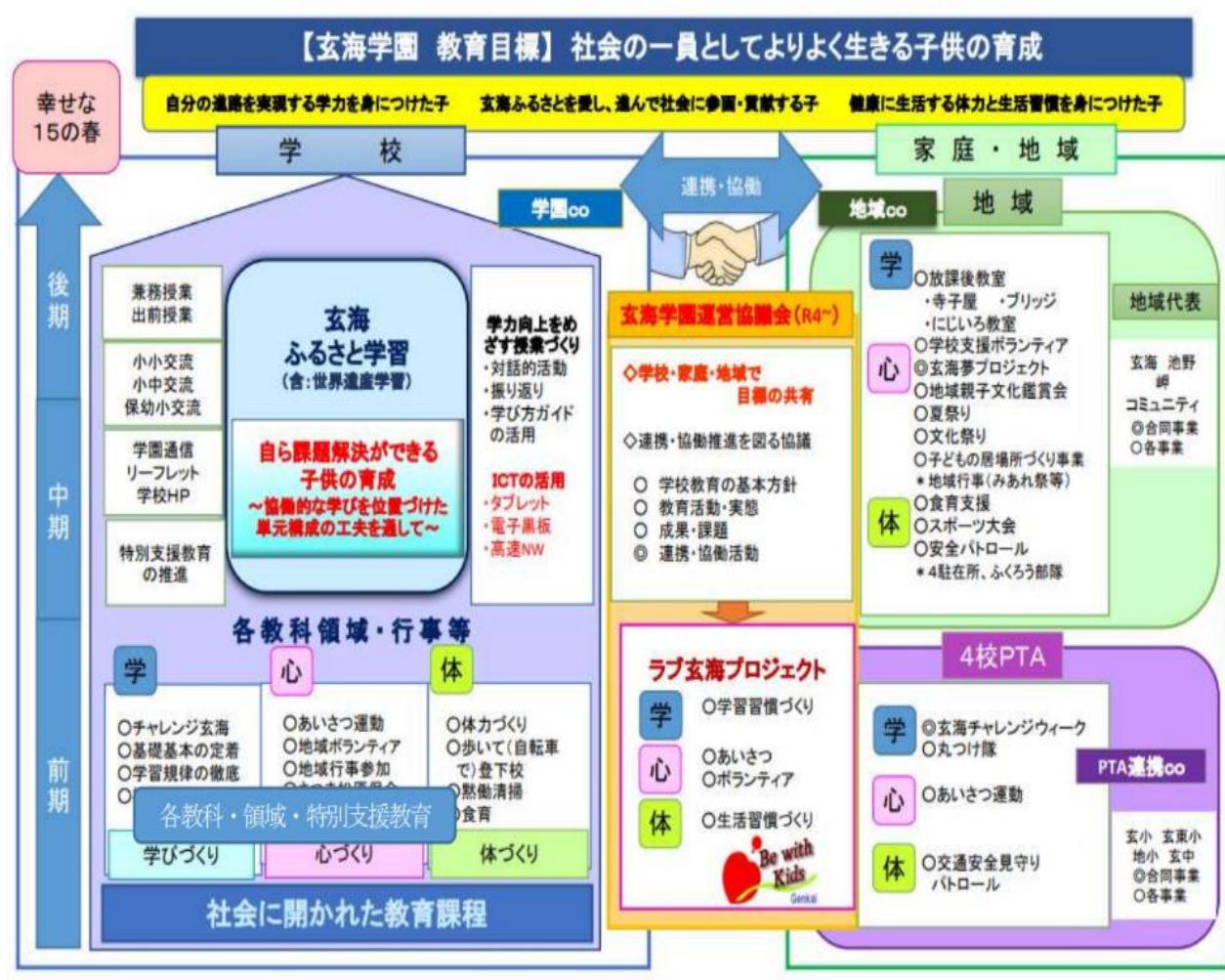
平成23年度に、宗像市教育委員会の研究指定委嘱を受け、4校で小中一貫教育を推進しました。「何事にも本気で取り組む子供の育成」を重点目標とし、「本気で人とかかわる子供」「本気で学ぶ子供」「本気で体を鍛え働く子供」の育成を目指しました。なかでも、「地域で学ぶ」「地域を学ぶ」「地域に学ぶ」教育活動のカリキュラムを編成したことは、玄海学園ならではの成果であったと考えます。具体的には、玄海学園には「みあれ祭海上神幸・陸上神幸」「さつき松原」「釣川」「宗像大社（菊づくり）」「地島山笠」「鐘崎山笠」という地域素材があります。また、「ろこぎ体験」「あんずジャムづくり」「魚さばき体験」など、地域の方と一緒に体験する活動があります。それらを系統立て、平成25年度には、

第Ⅰ期の小中一貫教育推進校 研究発表会を開催しました。

そして、翌年(平成26年度)からは「目標に向かって本気で取り組む子供の育成」を重点目標とし、学校・家庭・地域の連携協働活動「ラブ玄海プロジェクト」を始めました。

「ラブ玄海プロジェクト」とは、学校運営評議委員会において、社会の一員としてよりよく生きる子供を育てるために協議し、学校・家庭・地域が連携協働して行う活動のことです。具体的には、「『あいさつ』と『感謝の言葉』を広げよう運動」や地域ボランティア活動である「地域役立ち隊」の活動などです。また、第Ⅰ期の成果であったカリキュラムの編成を進め、「玄海ふるさと学習」と位置付け、玄海学園として、玄海や宗像というふるさとに対して愛着と誇りをもち、持続可能な社会の創り手としての意欲や態度を育みました。その成果について、令和元年度には第Ⅱ期の小中一貫教育推進校 研究発表会を行いました。

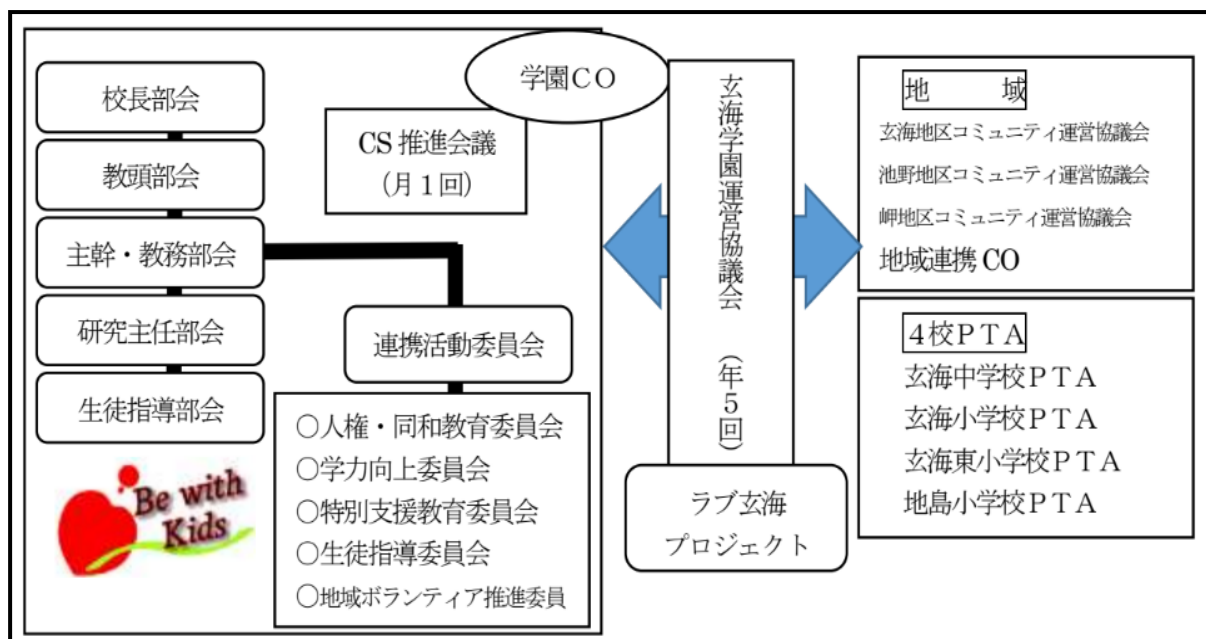
その実践を継承しつつ、新しい学習指導要領等の内容を踏まえ、本年度より、小中一貫コミュニティ・スクールとして、学園運営協議会を立ち上げ、学校・家庭・地域の協働による9年間を見据えた子供の育成を図る体制づくりを行っています。



令和4年度 玄海学園 教育活動全体構想図

### 3. 玄海学園運営協議会、地域学校協働活動の組織（組織図）や構成メンバー

【組織図】（令和4年度）



	区分	備考
1	地域代表	玄海地区コミュニティ運営協議会 会長
2	地域代表	玄海地区コミュニティ運営協議会 事務局長
3	会長 地域代表	岬地区コミュニティ運営協議会 会長 コミュニティ連携コーディネーター
4	事務局長 地域代表	岬地区コミュニティ運営協議会 事務局長 地域学校協働活動推進員 岬地区
5	地域代表	池野地区コミュニティ運営協議会 会長
6	地域代表	地域学校協働活動推進員 玄海地区
7	地域代表	地域学校協働活動推進員 池野地区
8	保護者代表	玄海中学校PTA 会長
9	保護者代表	玄海小学校PTA 会長
10	保護者代表	玄海東小学校PTA 母親代表
11	保護者代表	地島小学校PTA 会長
12	学校代表	小学校校長代表
13	学校代表	中学校校長
14	副会長（地域有識者）	元行政職員
15	学識経験者	福岡教育大学教職大学院 准教授

#### 4. 玄海学園の学園運営協議会の年間計画

本年度は、以下のような計画で学園運営協議会を進めていくことにしました。なお、内容については変更の場合もあります。

	日時	内容
第1回	5月24日（火）	<b>説明</b> 玄海学園運営協議会 運営要領の確認 令和3年度 玄海学園の実践の成果と課題について 令和4年度 玄海学園経営要綱の説明と承認 学園評価計画の内容について
第2回	7月22日（金）	<b>説明</b> 1学期の活動報告 <b>熟議</b> 家庭・地域から見た玄海の子供たちのよさや課題について
第3回	10月26日（水）	<b>授業参観</b> （午前：玄海東小学校・地島小学校 午後：玄海小学校・玄海中学校） <b>説明</b> 目標設定に向けた児童生徒、保護者、教師アンケートの結果 入学時の生徒の学力とその後の変容について <b>熟議</b> 共通目標づくりに向けて課題をもとに目指したい姿や大切にしたいこと
第4回	12月15日（木）	<b>説明</b> 2学期の活動報告 <b>熟議</b> 目指す子ども像(重点目標)の決定 <b>熟議</b> 目指す子ども像に向けて家庭や地域で目指す姿や取り組みたいこと
第5回	3月20日（月）	<b>説明</b> 1年間の活動報告（学園評価） 令和5年度の学園経営要綱の承認

#### 5. 目標や課題解決に向けたカリキュラムの見直しや作成に向けて

令和元年度に「玄海ふるさとカリキュラム」を作成しました。しかし、令和元年度末には新型コロナウイルス感染症の影響で、子供たちが地域で活動する機会が少なくなりました。そこで、子供たちの学びを止めることなく、コロナ禍でも可能な地域活動や子供たちが主体的にかかわり、社会に参画することができる活動を模索しました。

次ページの【資料】は、4月に玄海学園の主幹教諭・教務主任が集まり、玄海ふるさとカリキュラムの見直しに用いた資料です。令和元年度まで実施していた活動の一部を変更しています。赤く囲んだところは「豊かな海」をテーマにした内容で、玄海ならではの活動を実施し、ふるさと玄海への愛着を育みます。青く囲んだところは、キャリア教育の内容で、主体的に社会へ関わる活動を実施します。

探究活動を通して育成を目指す具体的な資質・能力							玄海カリキュラム 令和4年6月現在	
学年		前期部				中期部		
		1年	2年	3年	4年	5年	6年	
テーマ (単元)	環境 (世界遺産学習)	なつのうみとなかよし② あきとなかよし③	もっとしりたい探検隊④	玄海探検隊⑦ 雄崎山笠⑧ みあれ祭⑨	守り隊！沖ノ島の自然を 永遠に⑩(水辺教室)	地域文化を継承しよう③ 100年後も美しい松原を⑦ 雄崎山笠⑧ みあれ祭⑨	山笠行事に参加しよう③ 世界遺産までの道のり⑩	
		うみとなかよし (海の良さを知る)	玄東のよかところを紹介しよう (玄東の良さを知る)	紹介しよう！宗像のよか ところ (宗像市の良さ)		玄海の砂浜を守ろう！ (さつき松原保全活動)	豊かな海を守るために、 私たちにできること (Sea+Sons)	
	福祉	目指すべきところは9年生の「今後の自己の生き方を考え、行動する」姿である。玄海学園 では、地域素材である「豊かな海(環境)」をテーマとして探究活動を位置付け、ふるさとへの 愛着をもたせていく。			老人ホームに行って交流 しよう⑥			
	交流・キャリア	生活科見学 (合同)	生活科見学 (合同)	宗像市の様子 (合同)	二分の一成人式市 水辺教室 (合同)		宿泊体験学習 (合同) ⑨	平和について考えよう (修学旅行・合同) ⑩
知識及び技能		各学年の年間指導計画を参照						
思考力・ 判断力・ 表現力等	【課題の設定】	具体的な事実を比較して課題を見いだし【自立】、内容の面から見通しを立てる。				社会の変化や様々な立場の人々の思いを踏まえて課題を見いだし【自立】、解決方法や解決の手順、役割を見通す。		
	【情報の収集】	視点を決めて、身近な範囲から情報を集める。				広い範囲から目的に合わせて情報収集の手段を選択し、情報収集、選択する。		
	【整理・分析】	視点を基に、情報を比較、分類したり、数量などで客観的に比較したりして、特徴を見つける。				視点をつくり、事実と整理した情報を関連付けたり、多面的に考察したり、構造化したりして理解し、多様な情報の中にある特徴を見つけている。		
	【まとめ・表現】	考えをまとめ、相手意識をもって、分かりやすく伝える。				相手や目的、意図に応じて工夫してまとめ、効果的に伝える。		
学びに向かう 人間性等	【自分自身に関すること】	自分のよさや自分にできることに気付く。				探究活動を見通したり、振り返ったりして、自分の特徴を理解しようとしている。		
	【他者や社会とのかかわりに関すること】	地域についての誇りと愛情をもち、自分にできることをしようとしている。【貢献】				進んで周りの人に働きかけ、地域の人とつながりをもとめたり、地域の一員として継承しようとする意欲を高め、問題を解決しようとしている。【貢献】		
【資料 玄海ふるさとカリキュラム】								

## 6. 令和4年度に取り組んだ内容

### (1) 学園運営協議会の実際

第1回学園運営協議会 令和4年5月24日(火)

- 玄海学園運営協議会運営要領の確認
- 玄海学園運営協議会委員 委嘱状交付
- 令和3年度の玄海学園の実践の成果、課題について
- 令和4年度 玄海学園経営要綱について
- 学園評価計画および教師、児童・生徒アンケートについて
- 令和4年度の玄海学園の取組について

第1回は、学園運営協議会の委員の方々へ宗像市教育委員会 教育長 高宮 史郎様から委嘱状が交付されました。その後、玄海学園の昨年度の実践の成果と課題、本年度の玄海学園の経営要綱や評価方法を説明し、学園評価計画（アンケート）について提案しました。

第2回学園運営協議会 令和4年7月22日(金)

**説明** 1学期の活動報告

- 小学校での合同活動…修学旅行や  
社会見学、イングリッシュキャンプ
- 小中学校の合同活動…あいさつ運動、
- ※ 参加者からの意見
  - ・ 玄海学園の様々な取組をもっと発信
  - ・ 「チャレンジ玄海」は学校と家庭が  
連携して進めている効果的な取組である。

**小中合同**

さつき松原海浜清掃



玄海東小(5年)と玄海中  
(8年)と一緒に海岸のゴミ  
拾いをしました。



大きなゴミもありましたが、  
小学生と中学生が協力し  
ている姿は、微笑ましいも  
のがありました。

**熟議** 「家庭・地域から見た玄海の子供たちの良さや課題について」

○ 家庭グループで出された意見(◇：子供たちの良さ ◆：課題)

- ◇ 地域や自然を大切にする子供が育っている。
- ◆ 宿題など、与えられた課題はするが、プラスアルファの学習はしない。
- ◆ 粘り強さや競争力が課題。
- ◆ 大人数の場に行くと、縮こまってしまう。
- ◆ 異年齢間が親しすぎるために先輩・後輩の関係作りがうまくできてない。
- ◆ コロナ禍で地域行事にもっと参加したいという子供たちが参加しにくい。

○ 地域グループで出された意見(◇：子供たちの良さ ◆：課題)

- ◇ 人懐っこく、素直でのびのびしている。コミュニケーションの力が非常に高い。 ◇  
挨拶がよい。少人数で仲が良い。
  - ◆ 地域との触れ合いが少なくなった。
  - ◆ 困難に立ち向かう力が課題。  
コミセン同士の連携をしていきたい。
  - ◆ コミセンの活用・開放、コミュニティバスの活用ができないか。
- 熟議を通して、玄海学園としての課題が明らかになってきました。  
この課題を共有し、次回の学校運営協議会において「めざす子供像(共通目標)」をつくることになりました。

第3回学園運営協議会 令和4年10月26日(水)

**授業参観** 午前：玄海東小学校・地島小学校 午後：玄海小学校・玄海中学校

**説明** ① 教師、児童・生徒アンケートの結果について

② 玄海中学校生徒の「入学時の学力とその後の変容について」

**熟議** 「めざす子供像 共通目標づくり」

今回は、委員の皆さんに学園の小中学校での授業参観後、運営協議会に参加していただきました。委員の皆さんからの感想には、「ICTを活用した授業に驚いた。」「授業中であったが挨拶をしてくれる子がいた。」「子供からの発言も多く、双方向のやり取りがあっていて、素晴らしいと思いました。」などがありました。

運営協議会では、まず、教師、児童・生徒アンケートの結果について説明しました。次に、玄海中学校 野本校長が「入学時の学力とその後の変容について」と題し、学園が抱える学習面の課題を説明しました。その後「めざす子供像（共通の目標づくり）に向けて」家庭・地域グループで熟議を行いました。地域グループでは、限られたコミュニティの中では、人間関係を良好なものとしているが、玄海のコミュニティから出たときに、様々な人たちと良好な関係を築き上げることができるのか、という話が出ました。学校でも、頑張れば乗り越えることができるような少しの壁（課題）を位置付ける授業づくりをすることが必要であるという話もありました。今回の熟議を通して、「やり遂げる」「粘り強く」などの共通のキーワードが挙がるなど目指す子供像が明確になり、最終決定に向けて有意義な協議となりました。

#### 第4回学園運営協議会 令和4年12月15日(木)

**熟議** 目指す子供像（共通目標）に向け、家庭や地域で目指す姿や取り組みたいこと

前回までの熟議の内容をもとに、重点目標となる「目指す子供像」は、満場一致で「自ら学び、ねばり強くやりとげる、たくましい子供」に決まりました。その後、家庭像と地域像については、グループで話し合い、家庭像が「一人ひとりの自立に向けて かかわりよりそい 共に成長する家庭」、地域像が「ふるさとを愛し ふるさとに貢献できる子供を育て 見守る地域」となりました。

#### (2) 中学校での小・小交流(合同授業)「GENKAI Four School」の実施

本年度の新しい実践として、学園内3小学校の6年生が玄海中学校で小・小交流を行う「GENKAI Four School」の取組を年間3回[9/29(木)・12/1(木)・1/26(木)]実施しました。(1/26(木)は入学予定者説明会を兼ねる。)

この実践は、中学校入学前に学習規律などの学び方をそろえ、中学校時制での生活を体験することにより、中学校入学に向けての心構えをつくり、入学までの学習面・生活面での意識を向上させることを目的に行います。

〈GENKAI Four School の学習内容〉

第1回 令和4年9月29日(木)

- ・小・小交流…道徳・英語・学級活動
- ・中学校教師による授業…国語「漢文」



GENKAI Four School に参加した6年生

第2回 令和4年12月1日(木)

- ・小・小交流…総合的な学習の時間  
「むなかた子ども大学の振り返り」  
体育「タグラグビー」
- ・中学校教師による授業…社会科「金融教育」



3校の児童が交流し、学びあう姿  
(社会科・金融教育)

第3回 令和5年1月26日(木)

- ・小・小交流…学級活動
- ・中学校教師による授業…理科「水溶液と結晶」
- ・午後：入学予定者説明会

## 7. 令和4年度における成果と課題(○は成果、●は課題)

- 昨年度からの実践の成果を共有し、玄海学園の子供たちの学力や課題について熟議を通して明らかにすることができました。
- これまでの玄海学園の実践である「玄海ふるさとカリキュラム」を見直すことにより、系統性を重視した改良ができつつあります。
- 学校・家庭・地域の課題をもとに、目指す子供像・家庭像・地域像を定めることができました。今後、協議を行い具体的な実働の内容について計画を進めていきます。
- 玄海学園コミュニティ・スクールの活動が目指す姿を家庭・地域にしっかりと周知する必要がある。
- 玄海学園の実働する組織を整理・構築し、コミュニティ・スクールの活動を計画・実施する。

## 8. 令和5年度に向けて

本年度の成果をもとにして、玄海学園として何ができるのか、まずは家庭・地域に目指す子供像・家庭像・地域像を広く周知し、理解を得るとともに、具体的な実働に向けての組織づくりを行います。そして具体的な活動を計画し、進めていきます。

# 学びの丘学園の実践

## 1. 学びの丘学園や地域の課題、学園としての方向性

学びの丘学園は宗像市の住宅街に位置しているため、住んでいる人も多い。特に、最近では、高齢化が進んでいることと、子どもの数が減少していることが課題といえる。また、校区在住の高齢者の中には様々な専門性や特技を持った方がいる人材の宝庫である。しかしながら、学校の教育活動において、人材活用は充分であるとは言えない。

学びの丘学園キャラ  
お か り ん



次に、本学園において「人とのつながりの希薄さ」も課題と言える。宗像市は、これまで小中一貫教育に取り組んでおり、これからも引き続き学園協働で取り組んでいく。しかし、本学園は、校舎の場所が離れている学校があるため、小中協働での活動が十分に行えていないところが課題である。コミュニティ主催の文化祭などの休日を使った活動は、一緒に取り組むことができているが、あいさつ運動や児童・生徒による学園会議はあまり取り組むことができていない。

このような課題がある中、本学園では小中一貫コミュニティ・スクールを基盤とした教育活動の方向性として、地域の人材を確保し、「地域と学ぶ」「地域で学ぶ」「地域の課題を考える」「地域に貢献する（中学校）」ことを目標としている。さらに、小学校と中学校を繋ぐために、発達段階に応じた「ふるさと学習」の、再度練り直しを行っている。コロナ禍が続くなか、小中の合同行事や教科担任制の取組がいまだ行えていないことも課題の一つだと言える。小学校の「宿泊体験活動」については行えているが、コロナ禍で運動会や文化祭の児童生徒交流もできないのが現実である。コロナ禍が緩和した時は、地域の方だけでなく、児童・生徒の交流ができるように取り組みきたい。

## 2. 学園の特徴

本学園は、自由ヶ丘中学校・自由ヶ丘小学校・自由ヶ丘南小学校の3校の学園である。学園の位置は宗像市の中でも住宅地の中にある学園である。

昭和の高度成長期には、北九州市と福岡市の間地点としてベッドタウンとなり、平成には子どもの数も増え、各小学校の児童数も約900人まで増加していた。平成の後期より高齢化が進み児童・生徒の数は減少化している。

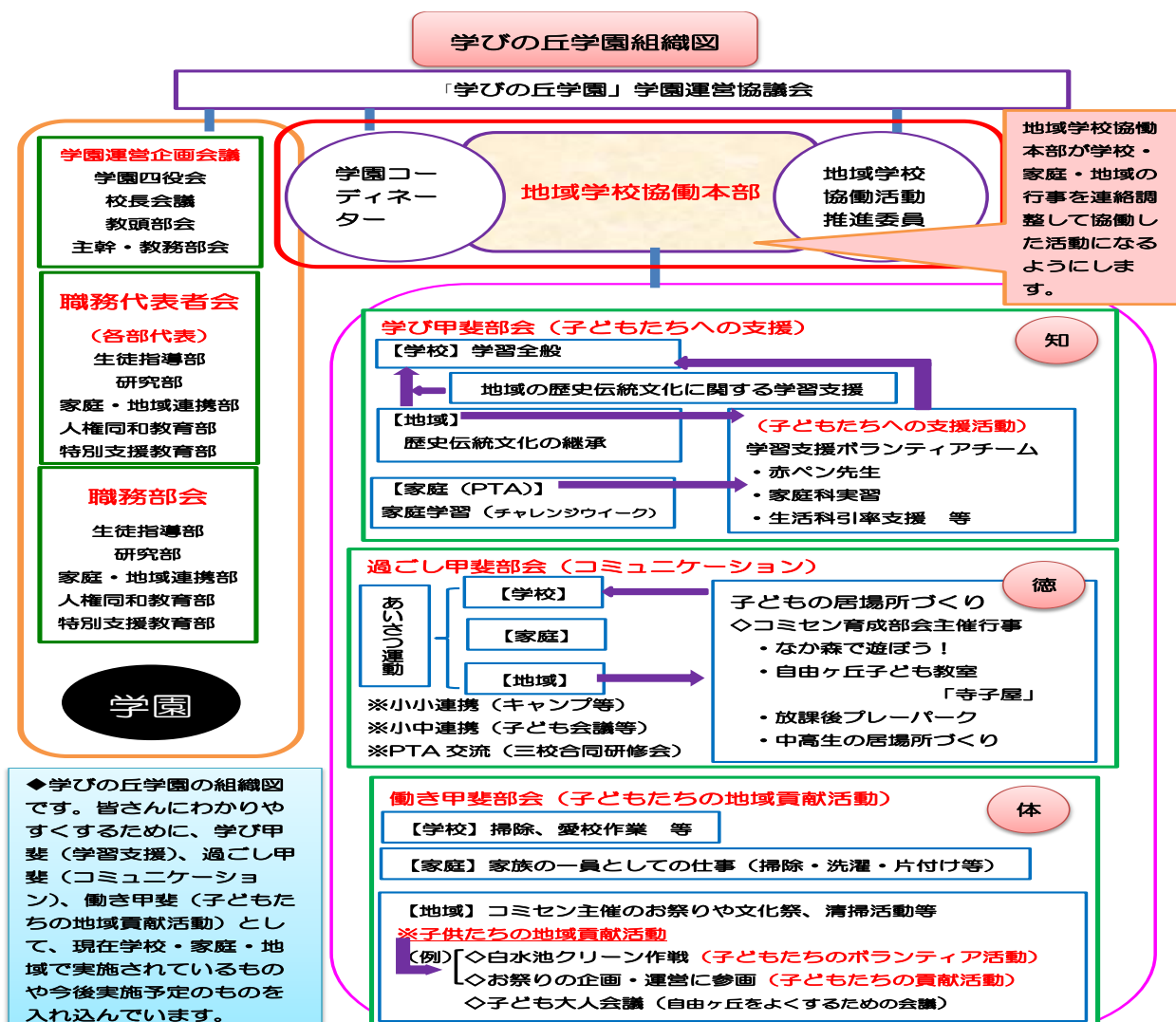


【写真1 なか森】

本学園は、「学びの丘学園」と言われるように、校区内に平地が少なく、山や丘のよう

な地形の中にある校区である。【図1 なか森】戸建ての多い本学園も近年は、世代の入れ替わりが進み、一部の地域では児童増の傾向にある。自児童生徒の学力も比較的高く、保護者も学校教育には協力的である。自由ヶ丘小学校には通級指導教室が設置され、市内9校の児童が定期的に通い学びの基盤づくりも進めている。

### 3. 学びの丘学園の学園運営協議会、地域学校協働活動の組織



### 4 学園運営協議会のメンバー

#### (1) 学校運営協議会委員

地域ぐるみで義務教育9年間の学びを支える仕組みを構築し、子どもの健やかな成長豊かな学びの創造や学校を核とした地域づくりに向けて熟議と協働を図る。保護者・地域住民等の学校運営への参画を促進し、学校・家庭・地域との連携・協働を通して学園運営の改善及び地域総がかりによる地域の将来を担う子どもの育成を目指す。

学園協議会構成メンバー

学識経験者1名、自由ヶ丘コミュニティ運営協議会代表4名程度、

PTA代表3名、行政等1名、各学校の代表（校長、教頭、教務・主幹、地域連携担当）

No	区分	職名等
1	学識経験者	福岡教育大学 教授
2	コミュニティ運営協議会	コミュニティ運営協議会ジェンダー平等推進会長
3	コミュニティ運営協議会	コミュニティ運営協議会事務局長
4	コミュニティ運営協議会	コミュニティ運営協議会会計主任児童委員
5	コミュニティ運営協議会	コミュニティ運営協議会青少年育成部会副部会長
6	コミュニティ運営協議会	コミュニティ運営協議会広報委員長
7	地域住民	自由ヶ丘小学校 PTA 会長
8	地域住民	自由ヶ丘南小学校 PTA 会長
9	地域住民	自由ヶ丘中学校 PTA 会長
10	対象学校の校長	自由ヶ丘小学校 校長
11	行政機関の職員	宗像市教育委員会 教育政策課 指導主事

## 5 学びの丘学園の学園運営協議会の年間計画

	日時および会場	内容
1回	5月13日（金） 18：30～ 自由ヶ丘小学校	○学びの丘学園経営要綱および」重点目標の説明 ○学園関係者評価（評価項目）の説明等 【熟議】 ・学校・地域の連携、協働を図る部会組織の役割や年間計画等
2回	6月24日（金） 18：30～ 自由ヶ丘小学校	【熟議】 ・学びの丘学園の重点目標の具現化を図るために各部会の実施計画について
3回	9月13日（火） 14：00～ 自由ヶ丘小学校	【学習参観】自由ヶ丘小学校5校時 ○学園自己評価の報告（1学期分）→学園関係者評価（中間） 【協議】 ・1学期の取組を振り返って
4回	10月24日（月） 18：30～ 自由ヶ丘小学校	○学園関係者評価（中間）の結果報告 【協議】 ・2学期の重点目標達成に向けた取組について
5回	1月20日（金） 18：30～ 自由ヶ丘小学校	○学園自己評価の報告（2学期）→学園関係者評価（最終） 【協議】 ・2学期の取組をふりかえって
6回	2月21日（火） 18：30～ 自由ヶ丘小学校	○学園関係者評価（最終）の結果報告 【熟議】 次年度のめざす子どもの姿、家庭の姿、地域の姿について

※ 第4回は授業参観を行い、子どもの学ぶ姿について協議を行う。

## 6 目標や課題解決に向けたカリキュラムの見直しや作成に向けて

学びの丘学園では、「教育活動を通して、自由ヶ丘をはじめとする宗像の人・もの・こと、自然、伝統と文化、世界遺産を大切に思い地域社会の一員としての自覚を持つ児童・生徒を育成する」ことを目標とし、カリキュラムの開発・実践・改善を行っている。カリキュラムの改善にあたっては、前年度までに作成した「ふるさと学習カリキュラム」に基づき、実践した内容を各学校の学年で協議する。協議を行ったカリキュラムを学園研修で、学園同学年会を行いさらに見直していく。この取組で見直したカリキュラムが発達段階に応じているか、系統性があるのかを主幹部会、地域連携部会でさらに見直していきカリキュラムの作成を行っている。

## 7 令和4年度に取り組んだ内容

### (1) 学びの丘学園運営協議会の実際

#### ①第1回学びの丘学園運営協議会

- ・委嘱状交付、学園教育目標、重点目標、子ども像の承認、学園評価についての説明
- ・「学校」「家庭」「地域」に分かれて、重点目標を具現化するための熟議

#### ②第2回学びの丘学園運営協議会

- ・3者の困り感や課題を明確にするための熟議

#### ③第3回学びの丘学園運営協議会

- ・自由ヶ丘小の授業参観を通しての意見交換

#### ④第4回学びの丘学園運営協議会

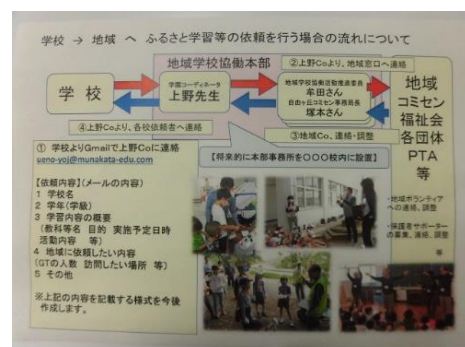
- ・ふるさと学習のカリキュラムをみながら、協働してできる内容や方法を協議

### (2) 地域学校協働本部を活用した実践

#### 【事例1】白水池清掃活動（地域から学園へ）

コミセン環境整備部会が、児童・生徒に向けてボランティア募集をかける計画があった。ココミセンの事務局長と学園コーディネーターが連携して、環境整備部会長と学園コーディネーターが学校へボランティア募集の説明に同行した。また、環境整備部

会からの募集要項を学園コーディネーターが環境整備部会から学校へボランティアの依頼があったという形で、事務局校長名での保護者向けの募集要項に作り替え、教頭部会で検討していただき、文書を修正したうえで、安心安全メールで文書を配信し、



参加希望のある児童生徒についてはQRコードを用いて応募者の名簿を作成した（作成時の応募数は35名）。さらに、応募者の全員の名簿を、学校別学年別に整理して環境整備部会に渡し当日の受付名簿として活用していただいた。

### 【事例2】ふるさと学習を生かした活動（学校から地域へ）

自由ヶ丘南小学校の5年生が、自由ヶ丘のために役立つことをしたいと考え、文化祭りに焦点をあてて学習を進めていった。そこで、文化祭りについて詳しい方をお願いしたいと、学園コーディネーターに依頼があった。そこで、コミセンの事務局長と連携して講話していただける方（コミセン会長）を選任しお願いした。子どもたちは、会長の自由ヶ丘文化祭りをを行うようになったいきさつや地域の方の思い、現在の形での開催に至るまでの歴史について学んだ。子どもたちは、できることは何かを話し合い、ステージ発表に全員が参加することと、学級で「わんぱく広場」実行委員に応募した子どもたちへの協力を行うことを決めて文化祭りに関わった。ステージ発表で盛り上げ、多くの子どもたちを楽しませた。文化祭り盛況の一端を担った活動であった。



### 【事例3】地域の防災活動に学び防災について考える活動（学校から地域へ）

自由ヶ丘中学校では、9月9日の宗像市の防災の日に合わせて、自由ヶ丘で行われている防災の取り組みについて生徒に話をしてほしいとの依頼があった。コミセンの事務局長に連絡を取り、地域と連携して講話していただける方を紹介していただくとともに、連絡を取っていただき、学園コーディネーターに取り次いでいただいた。自由ヶ丘2区の鈴木さんに、学園コーディネーターが、中学校からの計画を含めた依頼内容を説明し、講話の承諾を得て、中学校の担当者に取り次ぎ計画を進めていった。鈴木さんは、講話内容が生徒に理解できるように、プロットと、プレゼン資料を準備し、リモートによる講話を行った。生徒はメモしながらしっかりと聴き入っていた。鈴木さんの話の中で、実際に災害が生じたときに中学生に期待することとして、①近所への声かけ②避難所までの近所の方への手伝い③避難所で自分のできる活動等三点を述べてあった。防災についての学びを充実させるために今後は、体験活動の実施を検討したい。



#### 【事例4】地域の方の特技を生かした実践活動

自由ヶ丘南小1年生が、生活科で校区の秋の様子を観察し、どんぐりや木の葉を収集。それを使って、遊ぶ道具等をつくることとなった。そのために、どんぐりを使ったおもちゃや作りなどが得意な方を紹介してほしいとの依頼があった。直ちに地域学校協働活動推進員の牟田さんに、活動内容や1年生担任の考えを伝えて講師の紹介をお願いした。牟田さんは、実際に活動していらっしゃる地域の方をご存じで紹介していただいた。どんぐりゴマ、やじろべえ、けん玉づくりなど充実した活動となった。

### 8 令和4年度における成果と課題

令和4年度の成果として、1つ目は、学園の職員で「ふるさと学習」を中心としたコミュニティ・スクールに関わるカリキュラムの作成ができた。小中一貫教育までは、行事等や連携できそうな内容をカリキュラムとして作成してきたが、今年度は、「地域で学び」「地域を学び」「地域とともに学ぶ」学校と地域の両者にとって良いカリキュラムの基盤づくりができたと思っている。2つ目は、地域人材の発掘に手掛けていただいたことである。学校は、カリキュラムを見直していく中で、地域人材が参加し、GT等として関わる内容を出すことができた。地域では、学園コーディネーターを通して、自由ヶ丘コミュニティから地域人材を募集し、児童・生徒の学習活動に協働的に関わっていただくことに取り組んだ。3つ目の成果として、学園運営協議会で「地域で子どもを育てていく」「地域も子どもを育てていく」ことを共通確認してきたことである。しかし、課題もある。はじまったばかりのコミュニティ・スクールで地域人材の発掘には取り組んでいるものの、活用までは至っていない。また、カリキュラムの見直しは行ったものの、コロナ禍によりカリキュラムの実践ができていない単元もある。

### 9 令和5年度に向けて

令和5年度に向けて地域人材の発掘活用については、学校とコミュニティで人材バンク作成に取り組んでいきたい。カリキュラムについては、各学年レベルでカリキュラムの具体的な見直し、コロナ禍における対応、さらなる改善に取り組む必要がある。このような活動を日常的な指導の中に取り入れていくことで、保護者に連携された指導の様子が確認され、地域と学校、保護者が一体となったコミュニティ・スクールの発展につながっていくと思っている。

# 大島学園の実践

## 1. 大島学園や地域の課題、学園としての方向性

大島学園の課題として、大きく二つのことがあげられます。一つは、学力向上です。昨年度の全国学力テストでは、6年生、9年生ともに、国語、算数・数学、理科は、全国や福岡県の平均点をほぼ下回っていました。例年同じような傾向が見られ、授業改善を中心とした学力向上が喫緊の課題です。二つは、コミュニティ・スクールの推進です。大島学園では、昨年度まで、学園運営評議委員会を中心に、小中一貫教育を推進してきました。本年度に入り、昨年度までの取り組みをベースに学園運営協議会を立ち上げ、小中一貫コミュニティ・スクールを推進しています。しかしながら、大島学園の小中一貫コミュニティ・スクールにかかわる一人一人の当事者意識はまだ低く、十分ではありません。地域の課題としては、少子高齢化があげられます。島民の半分以上が、高齢者であり、子供の数も毎年減少傾向にあります。島での仕事も多くが漁師であり、それ以外の仕事はほとんどありません。大島学園を卒業した子供たちは、島外の学校へ進学し、その後、島へ戻り仕事に就く子供は少ない状況です。以上のような課題をふまえ、本年度は、学園運営協議会で目指す子供像を「大島を愛し、自分で考え、責任をもって行動する子ども」と設定し、それを学校・家庭・地域で共有し、それぞれの立場でできることを考え、実行してきました。その結果、地域と学校で協働した取り組みとして、防災学習、家庭と学校で協働した取り組みとして、自主学習を実施することができました。今後は、本年度実施した防災学習や自主学習の取り組みを充実・発展させていくとともに、大島の活性化のために尽力していただいている様々な人と子供たちをつなぎながら、大島の活性化や防災・福祉をテーマに、総合的な学習の時間や生活科を中心に、さらなる小中一貫コミュニティ・スクールの充実を目指していききたいと思います。

## 2 大島学園の特徴

### (1) 段階的な教科担任制

小学校1年生から担任以外と学習する時間を段階的に増やし、中学部への接続をスムーズにしています。1年生では2教科担任外から授業を受けます。3年生からは、中学校音楽教師の教科担任制が実施されます。6年生からは完全に教科担任制になります。

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	しまかぜ
国語	担任	担任	担任	担任	担任	国語	国語	国語	国語	担任
社会			担任	担任	担任	社会	社会	社会	社会	社会・担任
算数・数学	担任	担任	担任	担任	担任	数学	数学	数学	数学	担任
理科			担任	担任	担任	理科	理科	理科	理科	理科・担任
生活	担任	担任								
外国語・英語	外国語専科	外国語専科	外国語専科	外国語専科	外国語専科	外国語専科	英語	英語	英語	英語・担任
音楽	担任	担任	音楽	音楽	音楽	音楽	音楽	音楽	音楽	音楽・担任
図工・美術	1年担任	1年担任	4年担任	4年担任	美術	美術	美術	美術	美術	美術・担任
体育・保健	2年担任	2年担任	3年担任	3年担任	保健	保健	保健	保健	保健	保健・担任
技術							技術	技術	技術	技術・担任
家庭					副任	副任	家庭	家庭	家庭	家庭・担任
道徳	担任	担任	担任	担任	担任	担任	担・副	担・副	担・副	担・副
学活	担任	担任	担任	担任	担任	担任	担任	担任	担任	担任
総合			担任	担任	担任	担任	担任	担任	担任	担任

## (2) 6年生の定期考査実施

中学部から始まる期末テストの形式に慣れることや、評価をそれぞれの教科担任が行うという観点などから6年生から学期末に定期考査を実施しています。教科担任の負担を減らすために、中学部の定期考査と時期をずらしています。



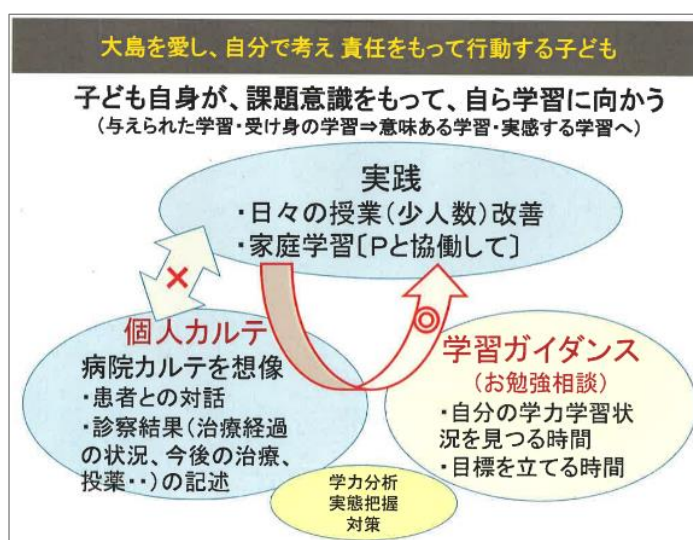
## (3) あゆみから通知表へ（5段階評価の実施）

6年生は中学部と同じ評価基準で5段階評価を実施しています。中学部での評価に慣れたり、学習の成果をふり返ったりすることで、自分自身の学習法を見直すきっかけになっています。

## (4) 個人カルテ・学習ガイダンス・授業実践サイクルの確立

大島学園では、教科担任制・専科授業・交換授業を積極的に行っています。1人の児童生徒に対して、複数の職員が関わりながら指導しています。全職員が児童生徒の実態を把握し、授業実践に生かせるように個人カルテの作成をしています。また、コミュニティ・スクールの目標でもある「大島を愛し自分で考え責任をもって、行動する子どもの育成」のために「学習ガイダンス」に取り組んでいます。大島学園の課題でもある学力の向上を図るために、児童生徒の学習状況を個人カルテで把握し、学習ガイダンスで自分の学習法を確立したり、意図的で主体的な学習にしたり、自分で

考えて自分にあった学習ができるようにしています。個人カルテは日々更新していき、学習ガイダンスは児童生徒の実態に応じて適切に仕組んでいます。学期に1回はガイダンスの時間を発達段階に応じて行い、学習の成果を確認したり、ふり返りをしたりして学習の方向性を児童生徒とともに考えています。



2学期 学習ガイダンス（6，8，9年生）					
日時	12月20日（火） 5限、6限				
内容	5教科の教科担任が6，8，9年生の生徒一人一人に学習ガイダンスを行う 期末考査の結果、1，2学期の授業、冬休みの学習についてアドバイス等を行う。				
方法	5つ（5教科）のブースを作り生徒が8分毎にブースを回っていく。 廊下にタイマーをセットして8分でブザーを鳴らす。（1分以内に移動） 生徒は8分間のガイダンス→8分間の振り返りを5教科繰り返します。 振り返りの時に先生に聞いたアドバイスをプリントにまとめます。				
	国語 調べ学習室	数学 教材室	社会 パソコン室	理科 パソコン準備室	英語 図書室
A	9番	7番	5番	3番	1番
B	10	8	6	4	2
C	1	9	7	5	3

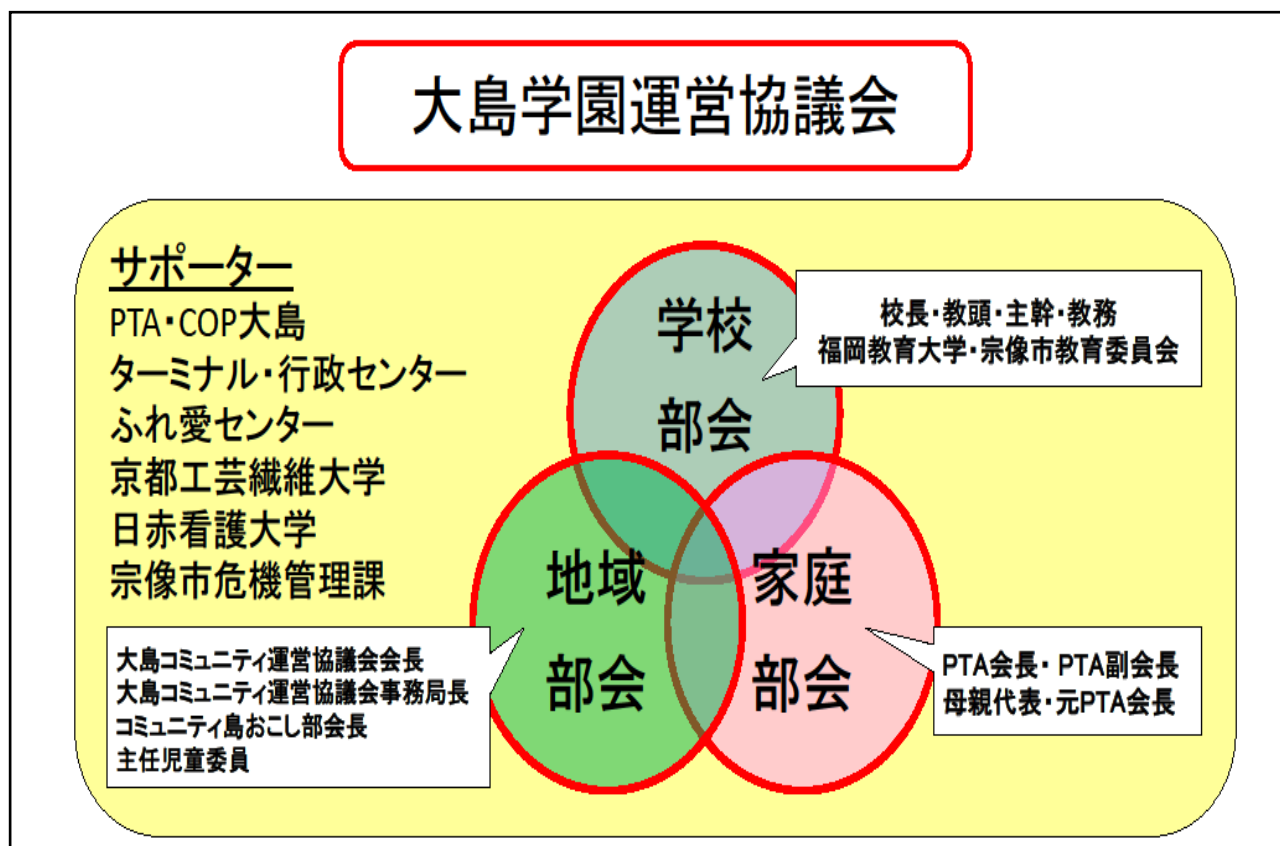
### (5) 多彩な異学年交流

9年生が行事等のリーダーになることが多いが、その他の学年もそれぞれの発達段階に応じてリーダーとなり、異学年交流に取り組んでいます。

学年	行事・単元等	内容
2年生	生活科「学校探検」 「おもちゃランド」	1・2年生合同で生活科の学習に取り組む。2年生は1年生の一番身近な手本になることで、年上としての自覚が芽生え、仲間づくりの意識が深まります。
3年生	文化祭	1・2・3年生合同で文化祭の「劇」に取り組む。3年生は2年間の経験を生かしながら、リーダーとして、よりよい劇を仕上げていきます。
4年生	入学式	義務教育学校である大島学園では4－5制をしており、入学式で1年生と密に関わるのは4年生です。1～4年生のリーダーであることを自覚することができます。
5年生	魚開き体験	5年生が中心になって地域の方とともに活動を行います。道具の準備や片付けなど、3・4年生に指示することができます。
6年生	小学部縦割り班活動 合同旗作り 文化祭	1～9年生の縦割り班の旗作りの中心になります。6年生から活動によっては、自分より高学年がいてもその活動のリーダーとして活動します。4～6年生合同で文化祭の「劇」に取り組みます。
7年生	もずく採り	5～9年生の活動で7年生がリーダーです。地域にもずく採りのお願いに行ったり、参加を呼びかけたりします。
8年生・9年生	全校縦割り班活動 児童生徒会活動 専門委員会 応援合戦	8・9年生はこれまでの活動の経験を生かして、学校生活の様々な場面で活躍します。児童生徒会活動・応援合戦は1～9年生、専門委員会は5～9年生で取り組み、過ごしやすい学園になるように自治活動を行っていきます。8・9年生は小学部の児童にも伝わるように計画や声かけの仕方を考えて取り組み、その姿を低学年が見ることで、自分たちがリーダーとなる時の手本とすることができます。



### 3 大島学園の学園運営協議会、地域学校協働活動の組織や構成メンバー (1) 組織図



#### (2) 学園運営協議会の構成メンバー

No	区分	職名等
1	学識経験者	福岡教育大学教職大学院 准教授・博士
2	コミュニティ運営協議会	大島コミュニティ運営協議会会長
3	コミュニティ運営協議会	大島コミュニティ運営協議会事務局
4	コミュニティ運営協議会	コミュニティ島おこし部会長
5	地域住民	元PTA会長
6	地域住民	主任児童委員
7	地域住民	PTA会長
8	地域住民	PTA副会長
9	地域住民	母親代表
10	地域住民	母親代表
11	対象学校の校長	大島学園校長
12	行政機関の職員	宗像市指導主事

## 4 大島学園の学園運営協議会の年間計画

第1回、第2回の学園運営協議会では、学校・家庭・地域でどんな子供を育てたいかを熟議しました。その結果、「大島を愛し、自分で考え、責任をもって行動する子ども」という目標像ができました。第3回からは、その目標達成のために学校・家庭・地域でどんなことができるかを考え、実践していきました。少しずつですが、学園運営協議会の委員を中心に、当事者意識が高まってきています。

回	日 時	内 容	熟議の内容
第1回	5月25日（水）	【開会：14:30 閉会：16:00】 ・学校経営構想の承認	目指す子ども像について
第2回	7月27日（水）	【開会：14:30 閉会：16:00】 ・学校、家庭、地域で取り組んだことの交流	目指す子ども像について
第3回	10月20日 （木）	【開会：14:30 閉会：16:00】 ・授業参観及び感想交流	学校、家庭、地域で取り組んだことについて
第4回	12月14日 （水）	【開会：14:30 閉会：16:00】 ・学校評価アンケートの結果	学校、家庭、地域で取り組んだことについて
第5回	2月28日（火）	【開会：14:30 閉会：16:00】 ・令和4年度の取組とその評価	来年度の方向性

## 5 目標や課題解決に向けたカリキュラムの見直しや作成について

### （1）コミュニティ・スクールの目標を踏まえたカリキュラムの見直し

#### ア 地域（大島）性

大島学園は地域に密着した学校であるため、地域行事への参加・協力依頼が多くあります。また、その主催も様々です。これらを1つ1つ丁寧にすべての学年が学習するのは時数の関係上難しい。そこで、学校・地域・家庭の思いを集約し、学園運営協議会で話し合い、コミュニティ・スクールの目標を踏まえた学習の柱を決定しました。その柱に沿って、探究的な学習を行い参画する学年と行事的にピンポイントで参加する学年に分けることを全職員で共通理解しました。

学習の柱	地域活性化	福祉・防災
------	-------	-------

主催	行事	内容	参加学年
中津宮	春季大祭	奉納相撲	1～6年生
中津宮	みあれ祭	陸上神幸	1～6年生
大島山笠保存会	山笠	追い山	1～9年生
島づくり協議会	みあれ祭	観光案内	7～9年生
コミセン	敬老会	会の進行・催し	5～9年生
コミセン	全島防災訓練	避難補助 など	5～9年生

## イ 9年間の系統性

大島学園は少人数であるため、複数の学年をまたいで、行事等に参加することが多いです。そのため、行事によっては複数回同じ内容をくり返し学習することになります。その重なりをなくするために9年間の系統性を見直し、これまで教師が担っていた説明的な役割を児童生徒が担い、内容を発展させたり、参加学年を限定したりすることを検討しました。

## ウ 探究的な学習の充実

これまでの大島学園のカリキュラムは多くの行事があることから、それを行っていくために、オーバーロードを起こしていました。また、行事消化的に学習を行わざるを得なかったため探究的な学習になっていませんでした。そこで、これまでのカリキュラムを見直し、探究的な学習になるように大きな枠組みでのカリキュラムの作成に取り組みしました。

### (2) 島内教材発見フィールドワーク

多くの行事を探究的な学習にするために「どのように単元計画の中に組み込んでいくのか」「導入・展開・終末のどの段階で仕組むのが効果的か」など話し合ったり、まだ、発見できていない教材を見つけたりするために、職員が島内でフィールドワークを行いました。子どもたちが探究的に学べるようにどのような「ストーリー」にするのか考えながら新しい視点で島内を回り、施設や地域の方と話しました。

## 6. 令和4年度に取り組んだ内容

### (1) 学園運営協議会の実際

第2回学園運営協議会（令和4年7月27日）で、学校・家庭・地域が、「大島を愛し、自分で考え、責任をもって行動する子どもの育成」という共通の目標を達成するためにできることを考えました。キーワードは、「郷土愛」と「自立」です。学校からは、カリキュラムの見直しを行い、大島のひと・もの・ことを活用した探究的な学習を通して、共通目標の達成を図ることを提案しました。家庭からは、「自主学習」で



大島に関することを調べさせると郷土愛につながるのではないかとことや、お手伝いなど「家での役割」を自分で考えさせ取り組ませることで自立につながるのではないかとことが提案されました。地域からは、「挨拶」という当たり前のことができることで、島外に出たときも自信をもって人とコミュニケーションができるのではないかとことや、高齢化率が高い大島では、災害が起こったときに子どもたちの力が必要であり、島の課題である「防災」について取り組んでいきたいという提案がされました。福岡教育大学坂井先生からの指導助言では、

大島を愛し、自分で考え、責任をもって行動する家庭  
大島を愛し、自分で考え、責任をもって行動する地域  
大島を愛し、自分で考え、責任をもって行動する教師



このように考えることで、今回設定された共通目標が、大島全体の目標となってくるとお話いただき、学校・家庭・地域がそれぞれの立場から当事者意識をもって動いていくことが大切であるということを経験することができました。

## (2) 事例1 (5・6年生を中心とした地域学校協働活動の取組)

総合的な学習の時間「みあれ祭で大島を盛り上げよう」

- ① 中津宮宮司の話を聞き、大島でみあれ祭を大事にしている意味を知りました。またお祭りが盛り上がることで信仰が深まり、地域に貢献できることを知りました。盛り上げるために自分たちにできることを考えました。
- ② 大島の活性化とみあれ祭の成功を考えてみあれ祭に来た人に観光案内をすることとオリジナル缶バッジを作成して配布することでPRしました。観光客から案内や缶バッジの評価をしてもらい、達成感を感じることができました。
- ③ 来年のみあれ祭に向けて、さらに活性化させるための取組を行政と共に行います。

## (3) 事例2 (6・7年生を中心とした地域学校協働活動の取組)

総合的な学習の時間「大島を守るのは自分！大島レンジャーズ」

- ① 大島コミセン依頼を受け、防災訓練時に高齢者を支援しながら避難する高齢者の担当割や避難経路の計画を立てました。
- ② 避難経路を実際に歩いてみて、防災の視点から注意するところを見つけて写真に撮りました。フィールドワークを行うことで、防災意識が高まりました。避難所で自分たちにできることを増やすために、宗像市危機管理課の方・大島分遣所の方に来ていただき、「エアベッド」「簡易トイレ」「簡易テント」の設営・撤収の体験をしました。
- ③ 避難訓練のふれ返しを行い、「高齢者との関係性づくり」「避難計画・避難経路の見直し」が課題として挙げだったので、探究していきました。

#### (4) 次年度の探究的な学習「大島ふるさと学習」＝大島カリキュラム作成

2学期に行った実践を参考に校務分掌の「総合的な学習の時間部」と「研究部」で「Team IBL (Inquiry Based Learning)」を立ち上げ、次年度のカリキュラムの作成に取り組んでいます。これまでのような、細かい単元の配列ではなく、大きく単元を仕組み探究の学習サイクルを2～3回せるようにしました。また、総合的な学習の時間のカリキュラムは、毎年同じものではなく、その時の地域の課題や思いによって変わっていくものなので、2本の学習の柱に沿いながら来年度の学年の枠組みとどちらの柱で探究していくのか「探究の重点」を共通理解しました。細かい部分や計画は、子供の実態や課題意識から大きく変わってくるので、この会では扱わないこととしました。

### 7. 令和4年度における成果と課題

#### ア 学校の取組 (学校の参画)

- 8年生総合的な学習の時間「大島の未来に向かって」において、東京修学旅行の取り組みとして郷土大島のことをより詳しく学び、大島が抱える課題を明らかにし、解決に向けて何ができるかを事前学習で考え、調査活動に取り組んだことで、これからの大島をどのようにしていくべきかを深く考え、次の取り組みにつなげることができました。



- 6・7年生 総合的な学習の時間「大島を守るのは自分！大島レンジャーズ」において大島の課題である「福祉・防災」について、コミセンの依頼を受けて、自分たちにできることを考え高齢者が自宅から学校（避難所）に避難する際の支援の仕方、避難経路の選定避難所開設時に自分たちにできることは何かなど、宗像市の危機管理課や京都工芸繊維大学と協働しながら学習したことで、避難訓練を核とした探究的な学習に取り組むことができました。



- 5・6年生 総合的な学習の時間「みあれ祭で大島を盛り上げよう」において、子どもたちは、みあれ祭を通して「もっと大島を盛り上げたい」「また、大島に来て欲しい」という目標を設定した後、クイーンビートル沖ノ島遊覧ツアーに参加したときに、記念品をもらった経験を生かして、自分たちにできる缶バッジを作成し、みあれ祭の観光ツ

アーに参加した人に配布し、大島を PR するなど、大島の活性化を「自分事」として考えることができました。

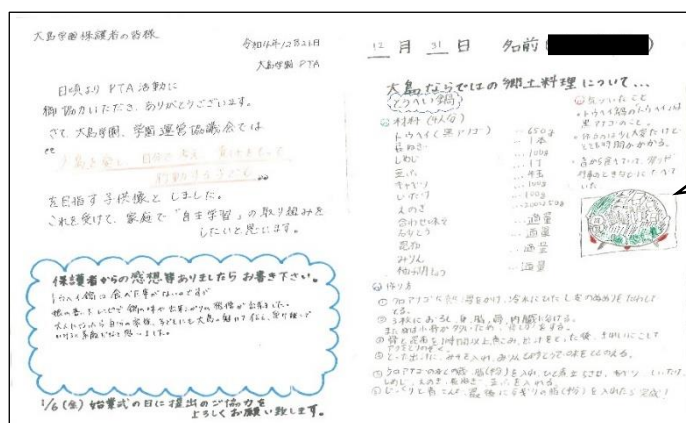
## イ 寺子屋の取組（地域の参画）

- 毎週火曜日の17時から大島コミュニティセンターで実施されている「寺子屋」という学習会において、生徒の学習進度や課題に応じてタブレットを活用したことで、主体的・探究的に学習に取り組む環境が整えられていました。



## ウ 家庭学習の取組（家庭の参画）

- 家庭主体の自主学習の取り組みがスタートし、2学期には「自分で考える自主学習」ということで、「家庭でのお手伝い」や「大島調べ」などが行われました。また、冬休みの宿題として「大島ならではの正月料理」などについて調べ学習を行い、郷土愛・自立の力を高めることができました。



大島ならではの郷土料理「とうへい鍋」について調べました。

## 探究的な学習を実践してみて（課題）

- 複数の学年をまたいだ学習が多いので、毎年同じ学習に取り組むことができません。年度末・年度初めのカリキュラム編成を児童生徒の実態、地域・保護者の思いや願い、コミュニティ・スクールの目標などを踏まえながら作成していく必要があります。また、大島の課題「島の活性化」「福祉・防災」について総合的な学習の時間を中心に取り組んできたが、探究のサイクルを回す度に、子どもたち自身が考えた新たな課題が出てきます。来年度に向けて課題を引き継ぐことが重要であると考えます。

## 8 令和5年度に向けて

### (1) 学校運営協議会の充実

コミュニティ・スクールを推進していくために、学校の教育に保護者・地域が協力するだけではなく、地域でできることは地域で取り組む、家庭でできることは保護者が取り組むそれぞれが子どもたちの成長のために当事者意識をもって関わる大切であると思います。また、「大島を愛し自分で考え責任をもって、行動する子どもの育成」という目標を学校ではどのように達成していくのか、そのための核となる学習は「生活・総合的な学習の時間」であると考えています。大島の課題でもある「島の活性化」と「福祉・防災」の2つの柱で学習に取り組み、「20年後の大島」をイメージすることで、より学習が探究的なり、当事者意識が芽生え、主体的に地域社会に参画していけると考えます。

### (2) COP むなかた大島との連携

COP とは「実践共同体 (Community of Practice、CoP)」のことです。コミュニティ・スクールの目標を達成し、大島の課題を解決するために、COP と連携することは有効な手立てであると考えています。

大島学園は将来の当事者「COP 3」として、総合的な学習の時間を中心に探究的な学習を実践していく予定です。また、子どもたちが総合的な学習の時間を探究的に学習する際に、「困ったら相談できる」「専門的なアドバイスをもらえる」など、自分たちから関われる様に、連携を取りながら子どもたちと関わらせることが大切であると考えています。

#### 一般社団法人COPむなかた大島 目的

今そこで暮らす人の受益、そこに関わろうとする人たちの受益、将来そこで暮らす人の受益のために、**当事者意識**を持っている人が参画し、離島特有の**地域課題**に長期的に取り組む仕組みづくりを行うことを目的とし、その目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) **SDGs**に照らし持続可能な地元づくりに関する啓発活動及び、地域課題の認識を共有し協働することについての理解を促進するための事業
- (2) **多様性**を受け入れ協働できる仕組み作りに取り組み、活動そのものに新しい価値を創出できるように交流を図り、離島の地域課題に取り組んでいる他地域との交流を通じて**島嶼間の連携**を促進していくための事業
- (3) **新しい技術・知識**を学ぶ機会を取り入れて、埋もれていた物に価値をつけ理解を深めブランディングするための事業
- (4) 新たな協働の可能性や島内資源を有効活用するための**研究**、成果物への高付加価値を生み出す研究などを行いながら**共創事業を立ち上げ**、それを支援していく事業
- (5) その他当法人の目的を達成するために必要な事業

#### なぜするか・誰とするかを大事に



# かとう学園の実践

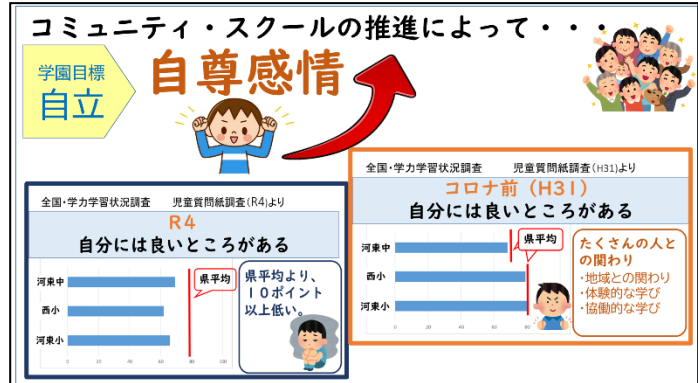
## 1. かとう学園や地域の課題、学園としての方向性

### (1) かとう学園や地域の実態や課題

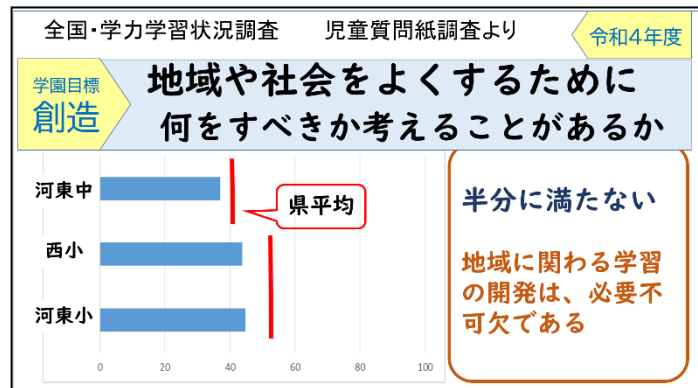
かとう学園では、「自立・協働・創造」を目標に掲げ、3校協働して教育活動を推進している。本学園の児童生徒は、全国・学力学習状況調査の質問紙「自分に良いところがあるか」の問

いに対して、コロナ禍前の平成31年度は、県と同等程度が肯定的な回答をしていたが（資料1）、令和4年度においては肯定的な回答をした児童生徒は60%ほどで、県平均を10ポイント以上下回った。コロナ禍の影響は全国的なものであるが、地域との交流により充

実した学習活動を展開していた本学園の子ども達にとって、地域との関わりで得られる体験的・協働的な学び、多くの人との関わりが失われたことが大きく影響したのではないかと考える。また、「地域や社会のためにすべきことを考えるか」についての肯定的な回答も半分に満たない。このことから、地域のことを本気で考え、関わりをもつ学習の開発が必要である（資料2）。また、河東地区では、活気ある地域の再生、地域の歴史文化の継承と交流に取り組んでいるが、地域行事、自然や歴史、文化などへの住民の関わりの少なさが課題となっている。したがって、地域に開かれた教育課程の再構築を行い、9年間を見据えた子供の育成を、地域と協働して総がかりで行っていくことは、学校のみならず、地域の活性化にもつながる喫緊の課題である。



資料1 児童生徒質問紙の結果より



資料2 児童生徒質問紙の結果より

## （２）学園目標、取組の方向性

令和４年度、かとう学園は、学園目標を「自立・協働・創造」と定め、兼務授業や小学校での一部教科担任制、小小が一部合同で行う宿泊体験学習、小中の連携を意識したドリカム講座やバックヤードツアー、学園サミット、８年生が母校において小学校に関わるボランティア体験を行う【RTM】など協働した教育活動を推進している。また、これまで行ってきた教育活動を地域・家庭と協働することにより一層目標達成につなぐことができるよう、学園運営協議会における協議や地域人材の発掘、３校間での情報の共有、共通・協働実践等を行い、子どもの育成とともに地域の思いや課題に応える地域に開かれた教育課程の開発に取り組んでいる。

## ２．かとう学園の特徴

### （１）これまでの小中一貫の取組

これまで、かとう学園では、「夢をはぐくむ教育」（キャリア教育）を中核に据えた教育活動に取り組み、「つなぐ」「そろえる」をキーワードに、「授業研究」「児童生徒間交流」「教師間交流」に力を入れてきた。特に、中期である５年生から７年生までの接続を円滑なものとし、９ヶ年の学びを繋いでいくため、家庭や地域と連携を図りながら教育実践を積み重ねてきた。

### （２）小中一貫教育の取組の具体

#### 【ドリカム講座】（資料３）

小学校６年生と中学生を対象に、夢を実現して活躍している大人をＧＴとして招き、自分の将来について考える学習である。講座を通して、働くことの価値や地域貢献の尊さへの意識を醸成することができている。



資料３ ドリカム講座（Ｒ元年度）

【通学路クリーンアップ作戦】（資料 4）

河東コミセンの主催事業で、ボランティア精神を養い、進んで地域に奉仕しようとする態度を育てることを目指している。河東小、河東西小の6年生と河東中の7年生がグループを編成して、通学路の清掃活動を行っている。



資料 4 クリーンアップ作戦（H30 年度）

【バックヤードツアー】（資料 5）

中1ギャップ解消にむけて、小学校6年生が中学校を見学したり、体験授業を受けたりしている。バックヤードツアーを行うことで、小学生は、中学校入学への不安を解消し、期待をふくらませるとともに、中学校も新入生を迎える環境づくりを行っている。



資料 5 バックヤードツアー（R元年度）

【かとう学園サミット】（資料 6）

かとう学園の児童生徒が、学校生活を自らの手で豊かなものにしていきたいという願いをもち、課題や課題を解消するための方策について考え、取り組んでいる。これまで、「あいさつ運動」「いじめ撲滅運動」



「社会貢献的な活動」等の具体的目標を設定して活動の充実を図ってきた。取組を通して、自分の考えをしっかりともち、考えを深める児童生徒が育ってきている。

資料 6 かとう学園サミット(R3 年度)

### 3. かとう学園の学園運営協議会

#### 学園運営協議会の構成メンバー

No	区分	職名等
1	地域住民	城西ヶ丘区長
2	コミュニティ運営協議会	河東コミュニティ 副会長
3	コミュニティ運営協議会	河東コミュニティ 青少年育成部会 部会長
4	コミュニティ運営協議会	河東コミュニティ 民生委員・児童委員協議会 会長
5	コミュニティ運営協議会	池野コミュニティ 地域学校協働活動推進員
6	地域住民	河東中PTA会長
7	地域住民	河東小PTA会長
8	地域住民	河東西小PTA会長
9	地域住民	河東中保護者（河東小令和元年度PTA 会長）
10	地域住民	河東小保護者（河東小現PTA副会長）
11	地域住民	河東西小保護者（河東西小前PTA会長）
12	地域住民	河東西校区ボランティア会会長
13	地域住民	デンキショップにしのはら 店長
14	学識経験者	福岡教育大学准教授
15	対象学校の校長	事務局校 校長（河東小学校）

### 4. 年間計画

回	日時・場所	内 容	熟議の内容
第1回	6月1日（水） 18:30～ 河東小学校	○学園運営協議会委員の委嘱状の交付 ○会長・副会長の選出・承認 ○学園経営要綱 マスタートプランの説明・承認 ○熟議①	「かとう学園の子供たちの現状」～学校・家庭・地域での子ども達の実態を共有する～
第2回	6月29日（水） 18:30～ 河東小学校	○学園評価項目の検討 ○熟議②	「期待する子供の姿」～学校・家庭・地域で方向性を共有する～
第3回	10月7日（金） 14:00～ 河東中学校	○河東中学校授業参観 ○熟議③：生徒会役員との交流 ○学園アンケート（前期）結果の報告	「中学生が地域に思うこと・地域が中学生に思うこと」
第4回	11月29日（火）18:30～ 河東小学校	○学園CSカリキュラムの検討 ○学校関係者評価について ○熟議④	「次年度の実践に向けて学校・家庭と地域が一緒にやれること」
第5回	1月25日（水） 18:30～	○学校関係者評価の結果報告 ○学園アンケート（後期）結果報告 ○学園自己評価	「今年度の成果と課題、来年度の計画につ

	河東小学校	○熟議⑤	いて」
第6回	3月2日（木） 18:30～ 河東小学校	○年間の総括 ○次年度の方向性の確認 ○学園評価の報告 ○学園マスタープランの仮承認	「地域の力をどう子供たちの教育に生かすことができるか」

## 5. 学園目標や課題解決に向けたカリキュラム作成に向けて

### （1）カリキュラムの実態調査（主幹部）

3校の生活科・総合的な学習の時間の年間計画を持ち寄り、学校と地域が連携・協働した単元を確認し合った。その結果、各小学校のカリキュラムは十分に共有されておらず、G Tや協力団体が様々であること、中学校では、地域と連携・協働した単元が減少していること、9年間の系統が確立されていないことなどの課題が明らかになった。

### （2）3校合同夏季研修会の企画・運営

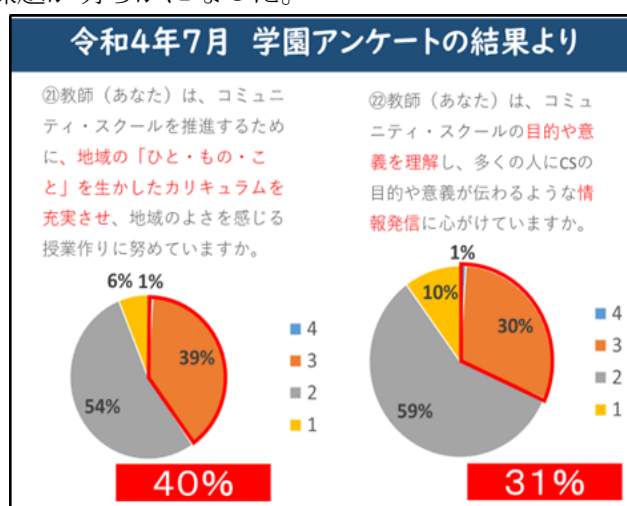
本年度4月から小中一貫CSが導入されたが、教員にとっての実感は非常に低い現状であった（資料7）ため、3校合同夏季研修会（令和4年8月4日）において、「小中一貫CSの推進～『ふるさと学習』のカリキュラム作りを通して～」を実施した。研修会は、以下のような3部構成で実施した。

#### 【第1部 CSについての説明】

河東西小学校の堤主幹教諭が、「CSになって何がどう変わるのか、どんなメリットがあるのか」「学園運営協議会とは」「学園運営協議会委員の紹介」「学園運営協議会での熟議の様子や内容」についてプレゼン資料を用いて説明し、CSの取組についての現状と今後の見通しについての理解を促した。

#### 【第2部 講話「生活・総合的な学習の時間の進め方」】

宗像市教育委員会 名切太志指導主事を招聘し、地域のひと・もの・ことを活かして生活科・総合的な学習の時間を充実させていくことがCSの推進につながることや生活・総合的



資料7 職員のCS意識調査

な学習の時間の単元計画の作り方、学習を充実させるためのポイント等について示していた  
 だき、カリキュラムの見直しの視点を共通理解できるようにした。

### 【第3部 学年部会によるカリキュラムの見直し】

学年毎に教室に分かれて話し合いを行った。河東小学校、河東西小学校合同の同学年部会の  
 教室では、「生活科・総合的な学習の時間の課題」「3校のカリキュラム一覧」「子供の関わ  
 りが可能な地域行事一覧（河東コミセン総会資料から抜粋）」を模造紙で提示し、お互いの  
 学校の取組を紹介し合うとともに、地域の課題や目標を考慮して共通して行える取組はない  
 か話し合った（資料 8）。中学校部会では、職場体  
 験、防災学習などもっと中学生が地域のことを考  
 えて行動できる内容はないか検討を行った。その  
 中で、教師自身が地域の実態や課題を知ることが  
 必須であることや、9年間の軸を明確にし、系統立  
 てる必要があることが明らかになった。それぞれの  
 の学校で2学期の実践記録を残して、3学期のカリ  
 キュラム検討会に持ち寄ることにした。



資料 8 同学年部会の様子

### （3）新しい単元の開発（学園 Co. 主幹部 5年担任）

地域から「かとコミ農園の取組を学校と協働してできないか」という依頼を受けた。年間  
 行事や児童の発達段階を考えた結果、両小学校の5年生を対象に、総合的な学習の時間「か  
 とコミ農園とわたしたち」に取り組むことを決めた。学園 Co. を通じて地域と調整を行い、  
 打ち合わせを行った。（以下、実施までの打ち合わせの日時・内容）

月日	参加者	場所	内容
5月2日(月)	河東コミセン副会長 青少年育成部会長 学園 Co. 主幹2名	河東小学校	・かとコミ農園の概要 ・取組の方向性 ・検討事項の整理
7月29日(金)	河東コミセン四役 まちづくり部会 「かとコミ農園」実行委員会 学園 Co. 主幹2名	河東コミセン	・かとコミ農園の単元計 画について ・地域・学校の思いの共有 ・今後の日程

9月9日(金)	河東コミセン三役 事務局長 学園 Co.	河東コミセン	・芋ほり当日の流れ (道具・トイレ・送迎等)
9月20日(火)	河東コミセン三役 事務局長 学園 Co.	河東コミセン	・学校との連携について ・かとコミ農園の取組とコミ セン祭りとの関連
10月4日(火)	河東コミセン三役 事務局長 学園 Co.	河東コミセン	・事前学習の内容の確認 ・芋ほり当日の計画

#### (4) 第4回学園運営協議会におけるカリキュラムの熟議

かとう学園の生活科・総合的な学習の時間のカリキュラムについて熟議を行った。2学期に実施した各学校・学年の実践を映像を交えながら具体的に紹介した。学園運営協議委員から、目指す地域像や教育資源の情報、協力体制について多くのアイディアをいただいた。それらを整理し、地域と学園が協働で取り組む「福祉」「自然」「地域活性・防災」というテーマに焦点化を図ることができた。

#### (5) CS推進担当の動き(資料9)

令和5年度に向けて、各学年において実施したふるさと学習の単元の把握、今年度活用したGTの一覧表を作成するための情報収集など、各学年へ働きかけを行っている。年度末には、GT一覧も作成予定である。

### 6. 令和4年度に取り組んだ内容

#### (1) 学園運営協議会における中学校の

##### 学習参観・生徒会役員との交流会

学園運営協議会では、様々なテーマで熟議を重ねてきた。その中でも、第3回で行った中学生との交流(資料10)は、コロナ禍により、子どもたちとの交流がなかった学園運営協議会委員にとって有意義なものになったと感想をいただいた。自分の中学時代との違いや生徒と教師との関係性など、めざす生徒像を実際の中学生の姿で共有することができた。

また、熟議「中学生が地域に思うこと、地域が中学生に思うこと」では、互いの存在に感謝を伝えるとともに、中学生の感じる地域の課題やよさを知る機会となり、今後のCSの取組への期待感が高まった。

ふるさと学習の取り組み(河東小学校)				
学年	単元名	内容	地域の人・もの・こと	CS担当
1	生活科 「あそびとあそび」	校庭の公園や自分の身近にある秋の材料を使って、遊びの道具を作る。作った作品について工夫したところを発表をしながら紹介する。	・校庭内の公園にある木の葉、葉	
2	生活科 「もっと知りたくなる」	町たんけんに出会った人に町の良さや施設の特徴について調べ、分かったことや気付いたことをまとめる。		・校区にある施設の方 (市民体育館、かとう保育園、児童館、ほたるの里 など)
3	総合的な学習の時間 「わたしたちでできること」	耳の不自由な方や社会福祉協議会の方に関わったことや調べたことをもとにわたしたちでできることを考える。考えたことを伝える。		・福祉協議会 ・シェフツツの会 ・耳の不自由な方
4	総合的な学習の時間 「泉源の水調べ」	泉源の水の「歴史」「水害」「生活科」「飲み水」について自分の課題をもって調べる。	・駒川の生き物と環境 ・木森善王院門の改修工事 ・水辺教室 ・水害	・水辺教室 福島先生 ・水辺の方
5	総合的な学習の時間 「かとコミ農園とわたしたち」	かとコミ農園に参観して知りながら、地域を盛り上げるために、自分たちでできることを考える。	・かとコミ農園 ・みんなのまつり	・河東コミセン 山崎さん ・大江さん ・かとコミ農園の農家の方
6	総合的な学習の時間 「長崎をつたえる」	修学旅行で訪れた長崎の地で見て聞いて感じたことについて友達とともに発表する。	・地域との関わりをもてない かを検討中	

資料9 CS担当作成資料の一部



資料10 運営協議会での中学生との交流

## (2) クリーンアップ作戦（河東中学校を中心とした地域学校協働活動の取組）

コロナ禍以前に行ってきた活動を再開させた。6月は雨で実施できなかったが、目的や方法を見直すことができた。7年生が11月に「地域清掃」という形で実施した（資料11）。地域に貢献する良い機会になった。



資料 11 地域清掃の様子

## (3) 「かとコミ農園とわたしたち」（河東・河東西小学校を中心とした地域学校協働活動の取組）

地域からの依頼を受けて「かとコミ農園」に関わる学習を新たに開発した。熱意あふれる GT を招聘した事前学習（資料 12）により、子供たちの本気度が増した。かとコミ農園との協働活動は、今後 5 年生に引継ぎ、地域活性化の 1 つの役目を担うことができると考える。「かとコミ農園」に両小学校が関わることで、河東コミセン「みんなのまつり」では、芋の販売や小学生の芋ほりの様子が紹介された。例年に比べてたくさんの参加があり、地域が活性化することにつながったと河東コミセンに関わる方の声をいただいた。



資料 12 GT による事前学習

## 7. 令和 4 年度における成果と課題

今年度の成果として、第一に挙げられることは「かとう学園の職員・児童生徒のつながりの充実」である。夏の合同研修会、授業交流会では、3校の職員が連携をとりながら企画運営をし、職員が顔を合わせて研修することで、互いの取組や考えを知り、職員が「もっと学園で関わりをもち、取組を進めていきたい」と意欲をもった。また、8年生の総合的な学習の時間「R T M（母校におけるボランティア活動）」、バックヤードツアーなど、小学生と中学生が交流することで、「中学生がとても優しかった」「中学校に入学することが楽しみなってきた」などの安心感や期待感、「小学校のためにもっと～したい」など貢献意欲につながることができた。このように、今年度は、地域との連携、カリキュラムの整理などを、学園で一致団結して取り組み、今後の取組の推進の基盤ができたといえる。小中一貫 C S の取組に関する成果と課題の具体は次のとおり。

### (1) カリキュラムについて

○各学校のふるさと学習の実施の状況を把握し、各学年で地域とのつながりを生かした単元の充実・開発が進み、学園としての柱が定まってきた。

●学園の柱にそった9学年を見通した単元の整理、学習活動を継続して実施する。

### (2) 学園目標や取組の共有について

○学園目標にそった評価項目について見直すことができた。

●学園目標を具体的な子供の姿として、地域・家庭と共有することが更に必要である。

### (3) 地域との連携について

○学園 Co.、主幹部を中心に地域連携を行い、G T・教材の開発が進みつつある。

●地域・家庭・学校が協働的に活動を行う際の組織づくりが必要であり、それぞれの担う役割を明確にする必要がある。

## 8. 令和5年度に向けて

今年度は、各学校で、地域の方をG Tとして招き、多くの方に教育活動に協力していただいた。3校の職員が集い、思いや願い、課題を共有することができた。学園運営協議会での熟議を通して今後の教育活動への展望や可能性、方向性を見出すことができた。コロナ禍を経験したからこそ、人が集うことのよさと力を一層感じる一年となった。

だからこそ、次年度も職員・児童生徒の交流を継続して行うとともに、地域の方々とも積極的に交流を行い、地域全体で子供を育てる意識を高め、人々の元気につないでいきたい。また、教育活動や地域人材との関わりを持続可能なものにするために、地域学校協働活動の組織づくりや実働するための計画、人材一覧の作成も進めたい。さらに、各学校で行った実践内容を集約し、ふり返しを行うことで、地域にとっても学校にとっても有意義な活動として次年度に引き継いでいきたい。子供同士も互いに認め合い、高め合うかとう学園を目指し、年間計画や教育活動の精選・充実を行っていききたい。

# 執筆者・協力者一覧

## 1. 執筆者

### ◎研究プロジェクト委員

- ・森保之 福岡教育大学教職大学院 副学長、文部科学省CSマイスター 監修・執筆
- ・堤久美 宗像市立河東西小学校主幹教諭(福岡教育大学教職大学院修了生)
- ・荒木恵理 福岡教育大学教職大学院・スクール・リーダーシップ開発コース学校運営リーダープログラム院生(宗像市立日の里東小学校在籍)
- ・日の里学園
- ・城山学園
- ・中央学園
- ・玄海学園
- ・学びの丘学園
- ・大島学園
- ・かとう学園
- ・賀来元彦 宗像市教育委員会子ども育成課参事
- ・瀧口博章 宗像市教育委員会教育政策課指導主事

## 2. 研究協力

- ・福岡教育大学教職大学院教員

## 『宗像市小中一貫コミュニティ・スクールの取組』

— 小中一貫コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進 — (実践事例集)

---

2023 (令和5年) 年3月31日 第1刷発行

監修 森保之

発行 城島印刷株式会社

〒810-0012 福岡市中央区白金2丁目9-6

TEL. 092-531-7102 (代)

URL. <http://www.kijima-p.co.jp>